

靈界物語 第四五卷 舍身活躍 申の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第四五卷』愛善世界社

2003(平成15)年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）  
）

## 目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 小北の特使 こぎた とくし

第一章 松風 まつかぜ 一 一九二

第二章 神木 しんぼく 一 一九二

第三章 大根蕪だいこんがぶら（一一九三）

第四章 靈みたまの淫念いんねん（一一九四）

第二篇 惠めぐみの松露しょうろ

第五章 肱鐵ひぢてつ（一一九五）

第六章 唾あふん忿ん（一一九六）

第七章 相生あひおひの松まつ（一一九七）

第八章 小蝶こてふ（一一九八）

第九章 賞詞しゃうし（一一九九）

第三篇 裏名うらな異審判いしんぱん

第一〇章 棚卸志たなおろし（一二〇〇）

第一一章	仲裁 <small>ちゆうさい</small>	〔一二〇一〕
第一二章	喜苔歌 <small>きたいか</small>	〔一二〇二〕
第一三章	五三 <small>いそ</small> の月 <small>つき</small>	〔一二〇三〕

第四篇 鬼風獸雨きふうじゆう

第一四章	三昧經 <small>さんまいきやう</small>	〔一二〇四〕
第一五章	曲角狸止 <small>まがつのりと</small>	〔一二〇五〕
第一六章	雨露月 <small>うるつつき</small>	〔一二〇六〕
第一七章	萬公月 <small>まごつき</small>	〔一二〇七〕
第一八章	玉則姫 <small>たまのりひめ</small>	〔一二〇八〕
第一九章	吹雪 <small>ふぶき</small>	〔一二〇九〕
第二〇章	蛙行列 <small>かはづぎやうれつ</small>	〔一二一〇〕

〔 〕

序文

現時の讀書界は日に月に墮落して卑猥の稗史小説のみ盛んに流行し、健全なる讀物は寥々として曉天の星の如く見る影も無き有様であります。是心ある人の長大歎息する所であつて人心を害し世を毒すること蓋し測知すべからざるものであります。

迂餘曲折波瀾多き現幽神の三界活歴史の側面はこの靈界物語に依つて眼前に髣髴たるべく、通俗平易の讀物として上乘なりといふも決して王仁の過言にあらざるを信ずるのであります。

幾多の教訓、規箴、明示、暗示を含み春花、秋月、暖衣、飽食、艱苦の何ものたるかを知らざる人をして興奮發揚せしめて、世道と人心を導き、且又大本に於ける信仰淺き信者をしてその嚮ふ所を知らしむるに足ることと信じて止まぬ次第であります。

大正十一年十二月十三日

神靈界には正神界と邪神界との二大區別がある。そして正神界は至善至美至眞なる神人の安住する聖域であり、邪神界は至惡至醜なる鬼畜の住居する暗黒界である。邪神界は常に正神界の隆盛を羨み、之を破壊し攪亂せむと所在力を竭すものであり、且又正神界を呪ひ、自らの境遇を忘却して、邪神界に居ながら自ら正神界の神業を立派に奉仕して居るものの如く確信してゐるものである。自ら邪神界に墜落せりといふことが悟り得られたなれば、必ず改心する端緒が開けて來るものであるけれども、邪神なるものは其靈性暗愚にして他を顧みるの餘裕なく、世人皆濁れり、吾のみ獨り澄めり、一日も早く此暗黒なる世界を善の光明に照し以て至善至美なる天國を招來せむと焦慮しつつあるものである。何程海底をして不二山頂たらしめむとして焦慮すると、到底不可能なるが如く、假令幾百萬年かかる共海底は不二山頂たることは望まれない。それよりも其海底を一日も早く浮かび出で自ら歩行の勞を積み徐に山頂に登るに如くはないのである。

邪神界にあるものは到底眞の天國を解するの明なく、又神の福音を聞くことは出来ぬ。小北山のウライナイ教の神域に集まつてゐる諸靈や人間の靈身は既に已にその身を根底國に籍を置き邪神の團隊に加入してゐるのであるから、何程言を盡して説示しても駄目である。覺せばさとす程反對に取り何處までも自分が實見したる天の八衢や地獄の外には靈の世界は無いものと考へてゐるものである。本巻の物語を讀んで大本の信者の或る部分の人々は少しく反省されることがあらば瑞月に取つて望外の歡びとするところであります。

大正十一年十二月十三日



第一篇 小北の特使

第一章 松風（一一九一）

野も山も 錦に染なす秋の風

冬の始めとなり果てて 凧さそふ村時雨

木々の木の葉は無残にも 散りてはかなき小北山

朝な夕なに信徒が 汗をば絞り聲からし

詔る言霊も何となく 濁りはてたる世の態を

曝露なしたる神館 迷ひに迷ふ盲人

心の聾が寄り集ひ あらぬ教に歡喜して

天國淨土を來さむと もがきあせれば曲津見は

時を得顔に跳梁し  
ウラナイ教を主管する

蝶蜩別の身體を  
曲神の巢くふ宿となし

夜と晝との別ちなく  
心をとるかす【どぶ】酒に

舌ももつれて言の葉の  
あやちもつかぬ御託宣

心の曲つた魔我彦が  
猊然と側に侍し

何ぢやかんぢやと機嫌とり  
眉毛をよまれ尻毛をば

抜かれ乍らも村肝の  
心の魂を研きしと

迷ひ切つたる眼より  
婆嬬共を呼び集ひ

支離滅裂の神教を  
誠しやかに説きたてる

譯の分らぬ迷信者  
廁に蠅の集ふ如

臭い匂ひをかぎつけて  
沈香ハイコとかしづきて

麝香の様に喜びつ  
屁のよな教理を珍重し

醜の魔風を四方八方に  
吹き送るこそ忌々しけれ

眼の見えぬ文助は  
大門神社の受付に

白い装束白袴 白目をギロギロ剥き出して

苦勞する墨硯の海に 心を映す筆の先

松の神代の瑞兆と 千歳の老松に蜿々と

からみかかりし黒蛇 背筋と腹との別なく

只一心に固まりし 一本角の御神體

切りに首を振り乍ら 朝から晩まで書き通し

迷信深き婆嬬に 與へ隨喜の涙をば

こぼさせ鼻を啜らせつ 掛地や額に仕立上げ

拍手うつて叮嚀に 祀らせ居るぞ面白き

そののみならぬ神様に 御供の代りと言ひ乍ら

甘菜辛菜の墨繪をば はそば はそばに筆を執り

怪しき教に「カブラ」れた 其證ではなからうが

蕪大根のまづい繪を 頭と共に書きつける

根から葉つから言靈の ゆかぬ小北の館には

上から下まで脱線の

盲聾の誤神業

立つる煙も烏羽玉の

墨繪にかいた龍の如

御空を指して「くねくねと

宙空に迷ふ人の胸

見るもいぶせき次第也

松彦、萬公、五三公は

アク、タク、テクの三人と

ブツブツ小言を云ひ乍ら

義理一片の暇乞

不平たらたら下り坂

館をあとに歸り来る

河鹿川原にかけ渡す

一本橋の袂まで

スタスタ来る折もあれ

はるか後の坂の上に

皺枯れ聲を張上げて

十曜の紋の印したる

扇を開いてさし招き

オーイオーイと聲限り

熊谷もどきに呼とめる

怪しみ一行は立止まり

あと振返り眺むれば

橋の袂で出會した

お寅婆さまがスタスタと

矢を射る如く坂路を

髪ふり亂し下り来る

只事ただごとならじと一行いっかうは 橋はしの袂たもとに腰こしおろし  
息いきを休やすめて待まちゐたる あゝ惟かむながらかむながら神かむながら々々  
御靈みたま幸まひましまして 小北こぎたの山やまに蟠わたかまる  
八十やその曲津まがつや醜しこつかさ司し 眞理しんりを紊みだし世よを汚けがす  
其その實じつ状じやうを細こまやかに 漏もれなく落おちなく委曲まつぶさに  
述のべさせ玉たまへと瑞月ずゐげつが 神素かむす蓋さ鳴の大神おほかみの  
御前みまへに畏かしこみ願ねぎまつる。

松彦まつひこ一行いっかうは、小北山こぎたやまの神館かむやかたを暇乞いとまごひをなし、急坂きふはんを下くだりて、一本橋いっぼんばしの袂たもと迄まで歸かへつて  
來くると、後うしろの方ほうからオイオイと呼よびとめる者ものがある。面白おもしろくないとは思おもへ共ども、何いづれ、  
ああの勢いきほひで走はしつて來くればどつかで追おひつかれるに違ちがひない、どんな事ことをいふか参さん考かうの  
爲ため、聞きいても萬まん更さら損そんにはなるまいと、ここに腰こしを下おろし、蓑みのを布しいて暫しばし待まつ事ことと  
した。慌あわだしく走はしつて來きたのは以い前ぜんのお寅とら婆ばあさまであつた。お寅とら婆ばあさまはハ―ハ―  
ス―ス―と息いきを喘はづませ乍ながら、

お寅「もし一寸待つて下さい。お尋ね致したい事もあり、聞いて貰ひたい事もありますから」

松彦「別に私としてはモウあれ丈聞けば澤山でムいますから、聞きたくもありません。又頼まれるべき種もありませぬが、餘り偉い勢で、オイオイとお呼になつたものだから、素知らぬ顔してゆくのも不人情だと思ひ、ここで一寸お待ち申して居りました」

お寅「誠にお呼止め申して済みませぬ。實は蝶蜷別の教主様から、折角神様の御縁で小北山へ参拜して下さつたのだから、お神酒を一杯献上がしたい。そしてウライナイ教の教理を一通り聞いて貰ひたいから、お寅、お前御苦勞だが、モ一度此方へ来て下さるやうに願つて来いと、喧しう仰有るので追つかけて参りました。どうぞ来て下さいませ。御迷惑でせうが、決して貴方のお爲に悪いやうなことを申しませぬから……」

松彦「折角乍らお神酒は、私は下戸でムいますから、お断りを申します。又教理も略見當がついて居りますから、これで御免を蒙りませう」

お寅「そんな事仰有らずに、何卒一足、御苦勞ですが引返して下さいませな。せめて貴方丈なりと御苦勞になれば結構でムいます。貴方は蠓蠓別の教主が仰有るには、因縁のあるお方だから、あの方を取逃がしては神政成就が遅くなるから…と仰有りました。貴方のお聞の通り、小北山の山頂に石の宮様が三社祭つてムいませう。そして右のお宮様にはユラリ彦命様、又の御名は末代日の王天の大神様と申します。貴方は松彦様と云つて、松に因縁のあるお方、其お身魂の生宮様でムいますからどうしても来ても来て頂かねばなりません」

松彦「貴方は最前、バラモンの軍人が浮木の村を荒すに依つて、ここへ逃げて来た」と仰有つたが、様子を考へて見れば、中々信者所でない、蠓蠓別さまの大切なお脇立の様な感じが致しますが、違ひますかな」

お寅「流石は貴方は偉いお方だ、實は私の靈は【きつく】姫と申しまして、蠓蠓別様には大變な御厄介に預つてゐます。何時も信者だと申して、一本橋の詰へ出張し往來の人様をウラナイ教に引張る役を務めて居ります。ウラナイ教の宣傳使でムいますよ」

松彦「【きつく】姫か何か存じませぬが、随分キツク御活動をなさるのですな」

お寅「ハイ私は靈の因縁性來に依つて御用をせなくちやならぬのだと、蠓蠓別さ

まが仰有いましたので、母子が一生懸命になつて、御用致して居ります。私の娘

も地上姫の生宮でムいます。貴方は末代日の王天の大神様だから、是非共小北山

で御用をして頂かねばなりません」

松彦「ハハハ、わしの様なガラクタ人間でも、又拾うてくれる神様があるのか

なア」

萬公「モシモシ松彦さま、そんな事聞くものぢやありませんか、サア参りませう。

ユラリ彦なんて、馬鹿にしとるぢやありませんか。何ぼ貴方がユラユラしてると

云つても、ユラリ彦では、餘り有難くないぢやありませんか」

お寅「コリヤ萬公、何をツベコベと横槍を入れるのだ、泥棒奴が」

萬公「コリヤ怪しからぬ、私がいつ泥棒致しましたか」

お寅「イツヒ、能うマア白々しい、そんな事を云ふぢやい。お前は娘舎弟の

婆舎弟だ」



萬公「舍弟といへば弟の事ぢやないか、弟が何うしたと言ふのだい」

お寅「バカだなア、舍弟といふ事は泥棒といふ事だ、【しやて】もしやても合點の悪い娘泥棒だな」

萬公「アハ、ハ、ハ、無學文盲にも程がある、こんな先生が蝶蠅別の一の乾兒だから、大抵分つたものだい。サア松彦さま、行きませう」

松彦「ウン、そんなら行かうかなア」

お寅「モシモシ日の王天の大神様の生宮様、貴方に歸られては、五六七の神政が成就致しませぬ。三千世界を助けると思うて一寸待つて下さいませ」

松彦「何とウラナイ教は巧なものですなア。そんな偉い神様の生宮だと言はれると、ウソだと知り乍ら、つい釣り込まれて、私も何だか悪い氣分がしませぬわい。

併し乍らそんな事にゴマかされる私ぢやムいませぬ。折角乍ら御免を蒙りませう」  
お寅「イエイエ何と仰有つても、神が綱をかけたら放さぬぞよと仰有るのだから、

放しませぬ」

萬公「私をユラリ彦にしてくれたら、喜んで居つてやるのだけだなア、のう五三

公、お前は先づタガヤシ大神の生宮位にしてくれると良いのだけどなア」

お寅「コラ萬、貴様は何處を押へたら、そんな大それた言葉が出るのだ。勿體ないユラリ彦なんて、何を言ふのだい。お前はブラリ彦だ、ブラリ彦でもまだ勿體ない。泥彦位が性に合うてゐる。併し乍ら泥彦でも改心さへすれば、蠚蝮別様が何とかよい名を下さるだらう」

何とかなん 名をくだ 下さるだらう」

萬公「義理天上日の出神位にして貰へますかな」

お寅「それは改心次第だ、改心の上ではそれぞれ御名を下さるのだから有難いものだぞ。貴様もおれの可愛い娘を仕殺してくれた、餘り可愛うもない、憎うもない男だから、茲で一つ改心をしたがよからうぞ」

萬公「改心改心つて、人を丸で罪人扱に、ウラナイ教はしてゐるぢやないか、そんな事を聞くとムツとして来て、どんな結構な話か知らぬが聞く氣がせぬわい。神様の教を聞いて理解せいと云ふのなら分つてるが、改心と云はれちや餘り面白くない、丸で二十世紀の三五教の宣傳使が言ふやうな事を吐くのだなア。チツとお前の方から改心をして、言葉を改めたら何うだ」

お寅「お前は先づタガヤシ大神の生宮位にしてくれると良いのだけどなア」

お寅「コラ萬、貴様は何處を押へたら、そんな大それた言葉が出るのだ。勿體ないユラリ彦なんて、何を言ふのだい。お前はブラリ彦だ、ブラリ彦でもまだ勿體ない。泥彦位が性に合うてゐる。併し乍ら泥彦でも改心さへすれば、蠚蝮別様が何とかよい名を下さるだらう」

何とかなん 名をくだ 下さるだらう」

萬公「義理天上日の出神位にして貰へますかな」

お寅「それは改心次第だ、改心の上ではそれぞれ御名を下さるのだから有難いものだぞ。貴様もおれの可愛い娘を仕殺してくれた、餘り可愛うもない、憎うもない男だから、茲で一つ改心をしたがよからうぞ」

萬公「改心改心つて、人を丸で罪人扱に、ウラナイ教はしてゐるぢやないか、そんな事を聞くとムツとして来て、どんな結構な話か知らぬが聞く氣がせぬわい。神様の教を聞いて理解せいと云ふのなら分つてるが、改心と云はれちや餘り面白くない、丸で二十世紀の三五教の宣傳使が言ふやうな事を吐くのだなア。チツとお前の方から改心をして、言葉を改めたら何うだ」

お寅「お前は先づタガヤシ大神の生宮位にしてくれると良いのだけどなア」

お寅「エ、お前達のツベコベ云ふ場合だない、人間が小理屈を云うた所で何になるか、神様が改心せいと仰有れば、ハイ改心致しますと云ひ、慢心せいと仰有れば、ハイ慢心致しますと云つて、一から十迄盲従するのが信仰の要諦だよ。小理屈云ふ間は、まだ神の國の門口も覗いてゐない代物の證據だ」

萬公「三年前のお寅さまとは大變な違ですなア、能うマアそれ丈呆けたものだな」  
お寅「きまつた事だ、呆けなくて神様の信心が出来るか、呆けて氣違ひになるのが誠の信仰だ。鶯でさへも春になると、ホ、呆け狂といふぢやないか」

萬公「オイ五三公、お前代つて一つ談判をやつたら何うだ。かう云へばあゝ云ふ、あゝ云へば斯う云ふ、又ラリクラーリと甘い事團子理屈を捏ねまはすのだから、流石の俺もウルさくなつて來た、分らぬと云つてもこれ位分らぬ教は聞いた事が無い」

お寅「分らぬ所に有難味があるのだ。分つて了へば信神する必要がない、分らないから信仰をするのだよ」

萬公「ウフ、」

五三「コレお婆アさま、私の靈は分つて居りますかな」

お寅「あゝ分つて居る。お前は青森白木上様の生宮様だ、結構なお靈ぢやなア」

萬公「アハ、甘い事仰有るワイ、オイ五三公、嬉し相な顔しとるぢやないか。

貴様もソロソロ小北山のお寅狐に眉毛をよまれさうだぞ」

五三「どうでも良いぢやないか。言靈の幸はふ國だ。青森白木上になりすまして、

一つ羽振を利かしてみようかい、イツヒ、」

お寅「あゝ五三公さまとやら、お前さまは偉いものだ、流石青森白木上さまの肉

のお宮丈あつて、會得が早い、萬公のやうな靈の疵物では中々分り憎い。此靈は

一遍焼直さねば到底本物にはなりませんまい」

五三「お寅さま否大先生様、私は靈の因縁が分つたとした所で、此三人……アク、

テク、タクの靈は分つて居りますか」

お寅「そりや分つて居る共、此アクさまは「アク」ビ直し彦命、タクさまはヒツ

「タク」リ彦命、テクさまは「テク」セ直し彦命様だ。此肉の宮も小北山にはな

くてはならぬ御守護神、早く改心して御用を聞きなされ。夫れ夫れお宮を建てて

祝ひ込めて上げますぞや」

アク「アク迄貴方の命令を遵奉して、神様の爲に舍身的活動を勵みま…せぬわい」  
タク「これからタク山な信者を集めて、神様の御託宣を四方に宣傳し、三五教の爲に盡しますワイ」

テク「テクセ直し彦命がそこら中をテクリ廻してウラナイ教の奴を片つ端から言向和し、三五教の爲に活動致しませう。なアお寅さま、それでお前は満足だらう」

お寅「ナニ、お前はさうすると三五教の信者だなア。アブナイアブナイ、よい所でお會ひなさつた。今が改心の仕時ぢやぞえ。三五教も結構だが、ウラナイ教は根本の根本の教だから、マア一つ聞いて見なさい。無理に押賣はせぬからな」

テク「此婆アさまは、丸で亡者引の様な奴だなア」

お寅「亡者引の様な奴とは何だい。餘り馬鹿にしなさるな」

テク「滅相な。決して悪く思つて云つたのぢやありません。誠の道に踏ん迷つてゐる亡者を導く八王大神のやうな方だと云つたのですよ。お前はチツと耳が悪いので困る。よう云つた事が悪う聞えるのだからなア」

お寅「ヤア、悪う聞える事でも、直日に見直し聞直すのだから、八王大神様にしておきませう。私も何だか気分がよくなつた、オツホ、時に未代日の王天の大神様の生宮様、どうぞ三千世界の人民は云ふに及ばず、鳥類畜類餓鬼蟲ケラを助ける爲、螻蛄別様の命令を聞いて引返して下さいな」

松彦「そんならお世話にならうかな」

萬公「アハ、ととうとユラリ彦さまになられましたな」

松彦「ウン、ユラリ彦かナブリ彦か、ナブラレ彦か、其時に依つて改名するのだ。オイ、ブラリ彦の萬公さま、お前も一緒にブラリブラリと引返して見たら何うだ」

萬公「ブラリ彦もお伴致しませう。オイ、青森白木上、アクビ直し彦、クツタク

直し彦、テクツキ彦、サア行かう」

お寅「流石は萬公だ。否ブラリ彦だ。よい挨拶をしてくれた。それでこそお里の

帳消しをしてやる。サアサア大廣木正宗様が、義理天上さまと待つてゐられます。

サア御苦労乍ら一足登つて下さい」

松彦「大廣木正宗さまの肉の宮はどなたですか」

松彦「大廣木正宗さまの肉の宮はどなたですか」

お寅「夫は教祖様の蝶鰯別さまの事ですよ。そして義理天上様の肉宮は魔我彦さまです」

松彦「あゝさうですか、さうするとユラリ彦の方が餘程上の神さまですなア」

お寅「さうです共、さうだから大廣木正宗様が御慕ひ遊ばすのです」

松彦「私がユラリ彦の肉の宮ならば、なぜ大廣木正宗や義理天上が迎へに来ぬのだらう。怪しからぬ奴だ。そんな禮儀を知らぬ正宗や義理天上なら、モウ行く事はやめておかう。サア、萬公、五三公、アク、テク、タク、行かう」

と橋を渡らうとする。お寅は帶のあたりをグツと引つかみ、

お寅「モシモシ末代日の王天の大神様、暫くお待ち下さいませ。尊き御身を持ち乍ら、世界の爲に御苦勞遊ばし、同情の涙にたへませぬ。これも時世時節でいます。二三日御逗留下さいましたならばキツと正宗さまも天上さまも貴方に厚くお仕へなさるでせう」

松彦「さうすると、私が教主になるのかなア」

お寅「そこは正宗さまと御相談の結果如何になりますやら、そこ迄申上げるこた、

此婆アには權能がありませぬからな。何は兔もあれ引ずつてでも歸らねばおきませぬ。見込まれたが因縁だと思つて、貴方も男らしい決心なされませ」  
松彦「あゝ大變な迷惑だなア。仕方がない。そんなら行かうか」  
萬公「ハツハ、とうと捕虜になつて了つた。ホリヨ　ホリヨと涙が溢れるワイ、  
ウフ、、可笑し涙がイヒ、、」  
一同「フツフ、、プーツ　クワツハ、、」  
(大正一・一二・一　舊一〇・二三　松村眞澄録)

## 第二章　神木(一一九二)

お寅婆アさまは松彦に向ひ河鹿川の川岸に枝振りのよい老松が蜒々として枝を四方に廣げ川の上になつと突き出て居るのを指し、  
お寅「もし、末代日の王天の大神の生宮様、あの松を御覽なさいませ。立派なも



のぢやムりませぬか」

松彦「成る程、川の景色と云ひ、あの枝振りと云ひ青々とした艶と云ひ、實に云

ひ分のない眺めですな。随分鶴が巢籠りをするでせうな」

お寅「ハイハイ、鶴どころか、あの松には日の大神様、月の大神様を初め八百萬

の大神様がお休み遊ばす世界一の生松でムります。末代日の王天の大神様の、あ

れが御神體でムります」

松彦「さうすると、あの松は私の御靈の變化ではあるまいかな」

お寅「滅相な、變化どころか、あれが貴方の本守護神ですよ。時節と云ふものは

恐いものですな。たうとう生神様の貴方様がお越しなされる様になつたのだから、

ウラナイ教は朝日の豊榮昇り彦命になります。蝶螭別の教祖が仰有つた事は一分

一厘違ひませぬがな」

萬公「アハ、ハ、松彦さま、貴方は不自由な體ですな、いつもあの川邊に水鏡ば

つかり見て鳶鷹鷺等に頭から糞を引っかけられ泰然自若として川端柳を氣取つて

ムるのですな。道理で足が重いと思つて居た。本守護神があ松の大木だと分つ

ての上は、松彦さまの無精なものも、あながち責る譯にも行きますまい。エ

へへへへ

お寅「これこれブラリ彦、又口八釜しい。左兵衛治をするものぢやない」

萬公「これ婆さま、わしは左兵衛治なんて、そんな老爺めいた名ぢやありません

ぞ。萬古末代生通しと云ふ生々した萬公さまだ。餘り見損ひをして貰ひますまい

かい」

お寅「オホへへ、何と頭の悪い男だな。左兵衛治と云つたら差出物と云ふ事だ。

何でもカンでもよく差出て邪魔ばかり致すから、左兵衛治と云つたのだよ。大

松のお前が差出る處ぢやない、芋掘奴めが」

萬公「俺や、あんな大松とはチツと違ふのだ。なんぼ大松だつて松の壽命は千年

だ。此方は萬年の壽命を保つ萬公さまだ。あんまり安う買つて貰ひますまいかい」

お寅「エーエ、何から何まで教育してやらねば譯の分らぬ困つた男だな。大松と

云ふ事は大喰人足と云ふ事の代名詞だ。野良へやれば蕪をぬいて食ふ、大根をか

じる、人參を喰ふ、薩摩芋から南瓜の生まで、噛じる喰ひぬけだから、それで大

松と云ふのだ」

萬公「大喰ひするものを大松と云ふのは可笑しいぢやないか。其言葉の起源を説

明して貰ひたいものだな」

お寅「エーエ、合點の悪い代物だ、ランオン川の杭は、みんな長い大きな奴が要

るので、それで大杭の長杭と云ふのだ。その大杭の長杭は大松ぢやなければ出來

ぬのだから大松と云つたのだよ」

萬公は妙な手付をして、

萬公「あゝさうで「おまつ」か、へーん、松彦さまもさうすると松に因縁がある

から大松でせうね」

お寅「お前の松は杭になつた松だ。此お方の松は、あの通り生々した生命のある

松だよ。萬古末代生通しの松と、幹を切られ枝を拂はれ、年が年中頭を削られて

逆トンボりにされ尻を叩かれて、突つ込まれて居る大松とは、松が違ふのだ。善

悪混淆して貰うては大變困りますわい。然し松彦さま、あの松の木根元に結構

な御守護がしてあるのだから大門神社に行く迄に一寸その神様に參拜して貰ひ

たいたいのです」

松彦「あの松の根元に神様が祀つてあるのですかな」

お寅「ハイハイ、あそこが肝腎な御仕組場だ。あの因縁が分らねば小北山の因縁が分りませぬ。是非共來て貰ひ度いものです」

萬公「さうすると、まだ外に神さまが祀つてあるのか。一遍に見せると食滯する」と受付の爺さまが云ふた神さままだな。一つ見るも二つ見るも同じ事だ。序に觀覽して來ようかな。おい、五三公、アク、タク、テク、何うだ、貴様も一つ見物する氣はないか」

一同「ウン、面白からうな。参考の爲にお寅さまの、亡者案内で見物して來ようかい。お寅さま、亡者案内賃は安うして置いてくれや、見掛どりをやられると此頃吾々はチツとばかり手許不如意なだから困りますぞえ」

お寅「觀覽だの、見物だのと、何と云ふ勿體ない事を仰有るのだ。見に行くのだない、參拜に行くのだ。何故參拜さして頂きますと云はぬのだ」

萬公「三杯どころか、もう之丈け澤山に誤託宣を聞かして頂いた上は腹一杯胸一

杯だ、アハ、ハ、ハ、

お寅「サア、末代様、御案内致しませう。何卒此婆について来て下さいませ」  
松彦はいやいや乍ら婆アの後に行と共に枝振りのよい大松の麓まで進んで行  
つた。

見れば途方途徹もない大きな岩が玉垣を圍らし切口の石を疊んで置物の様にチ  
ヨンと高い處に立派に祀つてある。さうして傍に案内石が立ち蝶蝟別の筆跡で、  
「さかえの神政松の御神木」

と記してある。

五三「もしお婆さま、此大きな岩は一體何だい。さうして御神木と記してあるが、  
こりや木ぢやない、岩ぢやないか」

お寅「そんな事は氣にかけいでも、理屈はいいでも、いいぢやないか。お前達  
神木する様に「さかえの神政松の御神木」と書いてあるのだよ。ここは善と悪と  
の境だから小北山の地の高天原へ悪神の這入つて來ぬ様に千引岩が斯うして置  
てあるのだ。表向きは彌勒様の御神體だと云つて居るのだ。さうして十六柱の神

様がお祀りしてある標だと云つて十六本の小松が此通り植ゑてあるのだ。然し乍ら之は表向き、實の處は素盞鳴尊の生魂をここへ封じ込んで動きのとれぬ様に周圍八方石疊を圍らし、上から千引の岩を載せて、萬古末代上れぬ様に封じ込めておいたのだ。そのために瑞の魂の素盞鳴尊は八方塞がり同様で、二ツ進も三ツ進もならぬ様になり困つてゐやがるのだ。此石をここへ運ぶ時にも随分苦勞をしたのだよ。第一蠓蛭別さま、魔我彦さま、大將軍さま、此お寅等の奮勵努力と云つたら大したものだった。夜も晝も二十日ばかり寝ずに活動して到頭素盞鳴尊の惡神を封じ込めてやつたのだ。三五教の奴は何にも知らずに馬鹿だからヤツパリ素盞鳴尊が此世に現はれて居る様に思つてゐるのだよ。斯うしておけば三五教の信者を鼠が餅ひく様に皆小北山に引張込むと云ふ蠓蛭別さまの御神策だ。何と偉いものだらうがな』

萬公、五三公の兩人はクワツと腹を立て兩方から婆の手をグツと【ひん】握り、萬公『こりや糞婆、もう量見ならねえ。此川へ水葬してやるから、さう思へ。怪しからぬ事を吐す』

五三「こりや、お寅、蛙は口から、吾と吾手に白状致した上からは、もはや量見ならぬぞ。サア覺悟せい。おい萬公、其方の足をとれ、俺も此足を持つて川の深淵へ擔いで行つて放り込んでやるのだ」

お寅「オホ、地から生えた木の様なものだ。此婆がお前達三人や五人に動かされる様なへドロい婆か。龍宮の乙姫さまの御神力を頂いた上に良の金神様の分け魂のお憑り遊ばした丑の年生れの寅さまだ。丑寅婆アさまを何と心得てるのだ」

萬公「おい、五三公、随分重い婆だな。本當にビクともしやがらぬわ」

アク「アハ、ビクともせぬ筈だよ。婆アさまは其處に居るぢやないか。お前達は、岩を一生懸命動かさうとしたつて動くものかい。それが婆アさまに見えたのか」

五三「いや、ほんにほんに岩だつたな。おけおけ馬鹿らしい。お寅婆は彼處にけつかるぢやないか」

お寅「オホ、三五教の信者の眼力は偉いものだな。お寅さまとお岩さまと取

違へするのだから

萬公「エー」

アク、タク、テク三人「アハ、ハ、ハ、又いかれやがつたな」

お寅「あまり疑うて居ると眞逆の時に眩惑がくるぞよ、足許の深溜が目に見えぬ様になるぞよ。ウフ、ハ、ハ、」

松彦「お婆さま、いや如何も感心致しました。これから一つ大門神社へ参りませ

う」

お寅「あ、お前さまは末代様だ。身靈が綺麗だと見える。あんなガラク夕は後廻

しで宜しい。お寅さまの後から跟いて來なさい。龍宮の乙姫さまが末代さまを御

案内致しませう」

松彦「ありがたう。然し乍ら此連中を捨て置く譯にも行かぬから連れて行かう」

お寅「それは貴方、末代さまの御都合にして下さい。サア斯うおいで成さいませ

や」

と頭をペコペコさせ頻りに媚を呈し乍ら、もと來し道に引返し急坂を一行の先に



立つて上り行く。

急坂を二三丁ばかり登った處に口八臺が竝んでゐる。

萬公「もし松彦さま、一寸ここで休息して行きませうか」

松彦「ウン、よからう」

と腰をかけ息を休める。お寅は怪嫌な顔をし乍ら後ふり返り、

お寅「逆理屈ばかり轉る萬公が

坂の中央で屁古垂れにけり。

偉相に腮をたたいて居た萬公

此弱り様は何の事だい。

鼈に蓼食はした様な息づかひ

萬々々公も休むがよからう」

萬公まんこう 『迷信めいしんの淵ふちに沈しづんだお寅とらさま

底そこ知しれぬ淵ふちへバサンとはまつて。

之程これほどにきつい坂さかをばスタスタと

登のぼるは狐狸きつねたぬきなるらむ。

登のぼり坂さか上手じやうづな奴やつは馬兔うまうさぎ

丑寅うしとら婆ばさまの十八番おはこなるらむ』

お寅とら 『糞垂げぼたれて婆ばさまの登のぼる山道やまみちを

屁へ古垂こたれよつた萬公まんこうの尻けつ。

芋蕪いもがぶらだいこん大根にんじん人參にんじんあつたなら

萬まんの野郎やらうに喰くはせ度たきもの。

大根だいこんや蕪かぶらがきれて息いきつまり

何なんと茄子なすびの溝漬どぶづけ男をとこ』

萬公まんこう 臭くさい奴やつ吾わが一いつ行かうの先さきに立たつ  
腋臭わきが【とべら】の婆ばばの尻糞しりくそ 〇

お寅とら 〇こりや萬公まんこう、臭くさい奴やつとは何なにを云いふ

貴様きさまは臭くさい穴あな探さがしぞや。

彼岸ひがん過すぎになつても穴あなの無ない蛇へびは

そこら邊あたりをのたくり廻まはる。

穴あなばかり探さがして歩あるく萬公まんこうを

岩窟いはやの穴あなへ入いれてやり度たい 〇

萬公まんこう 〇何なに吐ぬかす丑寅うしとら婆ばばの尻糞しりくそ奴め

尻けつが呆あきれて雪隠せんちが踊をどる 〇

松彦まつひこ 『口八臺くちやうに腰打ち掛こしうちかけて萬公まんこうが

尻しりのつばめの合あはぬ事こと言いふ』

五三公いそこう 『口八臺くちやうに尻しりを下おろした萬公まんこうさま

糞くそ落ちおつきのないも道理だうりよ』

アク 『アクアクと互たがひに誹そしり妬ねたみ合あひ

無性むしやう矢鱈やたらに口くちをアクかな』

タク 『いろいろとタクみし證據しやうこは千引ちびき岩いは

松まつの根元ねもとに澤山たくさんにある』

テク 『山坂をテクする吾身は何となく

足腰あしこしだるくなりなにけるかな。

面白おもしろもない婆ばあさまに導みちびかれ

登のぼるも辛つらし針はりの山坂やまさか』

お寅とら 『萬公まんこうよアク、テク、タクの御ご一いち同どう

此坂道このさかみちは神かみの坂さかだよ。

神かみになり鬼おにになるのも此坂このさかを

越こえぬ事ことには分わかるまいぞや』

アク 『登のぼりつめアクになつたら何なんとせう

丑寅婆うしとらばさまに欺あざむかれつつ』

お寅 「疑を晴らして龍宮の乙姫が

後に來る身は大丈夫だよ」

松彦 「サア一同、もう行つてもよからう。乙姫さま、宜しう頼みます」

お寅 「ホ、ホ、ホ、末代様、サア参りませう」

萬公 「へん、馬鹿にして居やがる。婆の乙姫さまも見初めだ。なア五三公」

五三 「きまつた事だ。逆様の世の中だもの、乙姫さまだつて世界のために御心配

遊ばしてムるのだもの、チツたあ年も寄らうかい。アハ、ハ、ハ、ハ、」

一同 「ウフ、ハ、ハ、ハ、」

(大正一一・一二・一一 舊一〇・二三 北村隆光録)

### 第三章 大根蕪(一一一九三)

良婆さまに誘はれて

末代さまの松彦は

萬公五三公其外の

三人と共に急坂を

心ならずも登りゆく

川邊の松の根本なる

千引の岩に包まれし

祕密の鍵を握りつつ

油斷ならじと村肝の

心を固め腹を据ゑ

さあらぬ體を装ひつ

細い階段スタスタと

刻んで上る門の前

お寅婆さまは立ち止まり

これこれ申し受付の

文助さまよ末代の

神の生宮初めとし

五人のガラクク神さまが

いよいよ此處へお出ました  
一時も早く奥へいて

蠓蠓別の教祖さまに

早く取次なされませ

神の恵も大廣木

正宗さまや義理天上

日の出神の生宮も

嚙や満足なされましよ

龍宮海の乙姫が

懸りたまうた肉の宮

良婆さまの挨拶で　　ここまで喰へて来た程に  
グツグツしてると歸られちゃ　　又もや元の空阿彌だ  
早く早くと小聲にて　　耳に口寄せ囁けば  
文助爺さまは頭をば　　縦に三つ四つ振りながら  
川の流れを遡る　　やうな足つきトボトボと  
襖押開け奥の間へ　　白き姿をかくしける  
暫くあつて魔我彦は　　満面笑を湛へつつ  
氣もいそいそといで迎へ　　貴方は末代日の王の  
天の大神生宮だ　　能くまアお出下さつた  
正宗さまが奥の間で　　山野河海の珍肴に  
ポトワインの瓶竝べ　　にこにこ顔で待ちたまふ  
遠慮は決して入りませぬ　　貴方は神の生宮だ  
かうなる上はお互に　　敵と味方の隔てなく  
腹を合して神業に　　力の限り盡しませう



小ちひさき隔へだてを拵こしらへて      ゴテゴテ争あらそふ時ときでない  
 神政成就しんせいじやうじゆの御時節ごじせつが      いよいよ切迫せつぱくした上うへは  
 末代様まつだいさまの肉にくの宮みや      どうしてもかうしても此山このやまに  
 居をつて貰もらはにやなりません      神素盞鳴かむすさのをの惡神あくがみが  
 立てた教をしへに沈溺ちんできし      下くだらぬ熱ねつを吹ふき乍ながら  
 廣ひろい世界せかいを遠近をちこちと      宣傳せんでんして居ある馬鹿者ばかものが  
 澤山たくさんあると聞ききました      承うけたまはれば貴方様あなたさま  
 三五教あななひけつにお入はいりと      聞きいて一寸ちよつとは驚おどろいた  
 さはさり乍ながら能よく聞きけば      河鹿峠かじかたうげで兄様あにさまに  
 廻めぐり會あうたが嬉うれしさに      ほんの當座たうざの出來心できこころ  
 三五教あななひけつに御入信ごにふしん      なさつた事ことが知しれた故ゆゑ  
 いよいよこいつは脈みやくがある      こんな結構けつこうな肉宮にくみやを  
 ムザムザ歸かへしてはならないと      正宗まさむねさまの肉宮にくみやが  
 焦こがれ遊あそばしお寅とらさまを      もつて態々わざわざ貴方あなたをば

引き留めなさつた御無禮を  
よきに見直し聞直し

宣り直しませ魔我彦が  
蝶蜋別の代理とし

茲に挨拶仕る  
サアサア早う遠慮なく

奥へ通つて下さんせ  
神政成就の絲口が

開けて来る小北山  
これ程目出度い事あらうか

あゝ惟神々々  
神の御前に願ぎ奉る。

松彦 朝日は照るとも曇るとも

萬公 悪魔は如何に叫ぶとも

松彦 月は盈つとも虧くるとも

萬公 つまらぬ教を聞くととも

松彦 假令大地は沈むとも

萬公 足らはぬ吾等の魂で

松彦 誠の力は世を救ふ

萬公まんこう 誠まことの事ことは分わからない

松彦まつひこ 此この世よを造つくりし神かむなほひ直ほひ日ひ

萬公まんこう 此この世よの罪つみを神かむなほひ直ほひ日ひ

松彦まつひこ 心こころも廣ひろき大直おほなほひ日ひ

萬公まんこう 困こまつた事ことと知しり乍ながら

松彦まつひこ 唯ただ何なに事ことも人ひとの世よは

萬公まんこう 唯ただ何なんとなく調しらべむと

松彦まつひこ 直なほひ日ひに見み直なほし聞き直なほし

萬公まんこう 何なには免ともあれ上のぼり來きて

松彦まつひこ 身みの過あやまちは宣のり直なほす

萬公まんこう 皆みな山やまさか坂かを乗のり越こえて

松彦まつひこ 三あな五なひ教けうの宣せん傳でん使し

萬公まんこう 危あぶない教をしへを宣せん傳でんし

松彦まつひこ 治はる國くに別わけの後あと追おうて

萬公まんこう 蝶いもり 螭り の 別わけ に 招まね かれて

松彦まつひこ 漸やうや く 此處ここ に 上のぼ り 來き ぬ

萬公まんこう 如いか 何か なる 事こと が 知し ら ね ども

松彦まつひこ 末代日まつだいひ の 王天わうてん の 神かみ

萬公まんこう 乃い ぞ と 云い は れ て 松彦まつひこ は

松彦まつひこ 怪あや し き 雲くも に 覆おほ は れ つ

萬公まんこう 様やう 子す 探さぐ ら む も の を と て

松彦まつひこ 忙せわ し き 身み を ば 顧かへり み ず

萬公まんこう お 寅婆とらば さ ま の 後あと に つ き

松彦まつひこ 來きた り て 見み れ ば 文助ぶんすけ が

萬公まんこう 置物おきもの 然ぜん と 坐すわ り 居を る

松彦まつひこ お 寅婆とらば さ ま は 聲こゑ を かけ

萬公まんこう 教けう 主しゆ の 宮みや に 逸いち 早はや く

松彦まつひこ 報はう 告こく な さ れ と 急せ き 立た て る

萬公まんこう 合がてん點ゆ往かぬと待まつうちに

松彦まつひこ 〆 やつて來きたのはお前まへさま

萬公まんこう 〆 義ぎりてんじやう理やう天にくみ上の肉みや宮と

松彦まつひこ 〆 名な乗のるお前まへは魔ま我が彦ひこか

萬公まんこう 〆 道だうり理りで腰こしが曲まがつてる

松彦まつひこ 〆 丑うし寅とら婆ばさまの云いうたよに

萬公まんこう 〆 この松彦まつひこが天てんの神かみ

松彦まつひこ 〆 一いちばん偉えらい身み魂たまなら

萬公まんこう 〆 蝶いもり蝮りの別わけは逸いちはや早く

松彦まつひこ 〆 迎むかひに來こなくちやならうまい

萬公まんこう 〆 何なにか秘ひみつ密つが此この家いへに

松彦まつひこ 〆 潛ひそんで居あるに違ちがひない

萬公まんこう 〆 これや浮うか浮うかと奥おくの間まに

松彦まつひこ 〆 進すすむ譯わけには行ゆきませぬ

萬公まんこう 誠まことの心こころがあるならば

松彦まつひこ 肝腎かんじん要かなめの教祖けうそさま

萬公まんこう 蝶いもり蛸わけ別わがまへが吾前わがまへに

松彦まつひこ お越こしになつて御挨拶ごあいさつ

萬公まんこう 叮嚀ていねいになさらにやならうまい

松彦まつひこ これが第一だいいち不思議ふしぎぞや

萬公まんこう 魔我彦まがひこさまよ今一度いまいちど

松彦まつひこ 奥おくの一間ひとまに驅かけ入いつて

萬公まんこう 確たしかな返答へんたふを聞きいた上うへ

松彦まつひこ 又また改あらためて御挨拶ごあいさつ

萬公まんこう 得心とくしんするよに云いうて呉くれ

松彦まつひこ さうでなければ何處どこ迄までも

萬公まんこう 面會めんくわいする事ことお斷ことわり

松彦まつひこ これからぼつぼつ歸かへります

萬公まんこう「これこれ丑寅うしとらお婆ばあさま

松彦まつひこ「いかいお世話せわになりました

萬公まんこう「いざいざさらばいざさらば」

お寅婆とらばばは兩手りやうてを擴ひろげて、

「これこれもうし肉にくの宮みや 末代日まつだいひの王天わうてんの神かみ

氣きが短みじかいも程ほどがある 惡氣わるきを廻まはして貰もらつては

大おほいに迷惑めいわく致します 正宗まさむねさまの肉宮にくみやは

貴方あなたを決けつして袖そでにせぬ 一時いちじも早はやく現あらはれて

飛とびつきたいよに心こころでは 思おもうてムこぼるは知しれた事こと

さはさり乍ながら八百萬やほよろづ 尊たふとき神かみが出入でいりして

お神酒みきを飲あがつてムこぼる故ゆゑ どしてもこしても暇ひまが無ない

短氣たんきを出ださずに氣きを静しづめ 暫しばらく待まつて下くださんせ

貴方あなたの顔かほを潰つぶすよな 下手へたなる事ことはさせませぬ

これこれ日の出の義理天上 何をグツグツしてゐる

一時も早く奥へいて 何とか彼とかそこはそれ

お前の智慧のありたけを 縦横無盡に振り廻し

蠓蠓別の神様に してお出で

それが出来ぬよな事ならば 義理天上も怪しいぞ

日の出の神も駄目ぢやぞえ

魔我彦 『お寅婆さまの云ふ通り これから奥へ踏み込んで

羽織の紐ぢやないけれど 私の胸に「ちゃん」とある

一伍一什を打ち明けて 蠓蠓別に申しませう

末代日の王天の神 暫く待つて下しやんせ

失禮します 『と云ひながら 一間をさして入りにける。



待つ間久しき鶴の首  
脱線だらけの言靈を

萬公さまは氣を焦ち  
無性矢鱈に打ち出す。

萬公「松彦さまよ五三公よ  
アク、テク、タクの三人よ

蝶蜋別と云ふ奴は  
尊き俺等の一行を

本當に馬鹿にするぢやないか  
木枯し強い寒空に

火の氣一つなき受付に  
待たして置いてグツグツと

神のお給仕が知らねども  
鱈腹酒に喰ひ酔ひ

ズブロクさんになりよつて  
無我と夢中の爲體

夜中の夢を安々と  
見て居やがるに違ひない

これこれ申し松彦さま  
私は腹が立つて來た

松の根下の岩と云ひ 良婆さまの云ひ草が

どうしたものが腑に落ちぬ こんな所へ迷ひ込み

眉毛をよまれ尻の毛を 一つも無いよに抜かれては

世間へ對して恥晒 治國別の先生に

どうして云ひ譯立つものか 俺をば失敬な婆の奴

ブラリ彦だと云ひ居つた 松彦さまはユラリ彦

國治立の神さまの お脇立たと崇め置き

口の先にてチヨロまかし 謀叛を起すつもりだらう

挺にも棒にも合はぬ奴 したたかものが此の山に

潜んで居るに違ひない 聖人君子は危きに

近づかないと云ふ事だ 貴方は知つて居る筈ぢや

サアサア松彦歸りませう こんな處で馬鹿にされ

どうして男が立つものか アク、テク、タクよ五三公よ

お前は何と思つて居る 意見があれば今ここで

遠慮えんりよは入いらぬ薩張さつぱりと  
俺おれにぶちあけて呉くれぬかい  
腹はらの蟲奴むしめがグウグウと  
怒おこつて怒おこつて仕様しやうが無ない  
□

五三いそ公こう 五三いそ公こう司つかさが思おもふ事こと  
遠慮會釋えんりよえしやくもなきままに

陳列ちんれつすれば左さの通とほり  
耳みみを浚さらへて聞きくがよい

小北こぎたの山やまの神かみさまは  
常世とこよの姫ひめの憑うつりたる

高姫たかひめ黒姫くろひめ兩りやう人が  
迷まよひの雲くもに包つつまれて

開ひらいて置おいた醜道しこみちだ  
肝腎要かんじんかなめの高姫たかひめや

黒姫くろひめさまが改悟かいごして  
三あなな五ひけう教けうに降伏かうふくし

今いまは立派りつぱな神司かむつかさ  
見向みむきもやらぬウラナイの

教をしへを信しんじて何なんになる  
肝腎要かんじんかなめの教祖けうそさま

高姫たかひめさまや黒姫くろひめが  
自みづから愛想あいさうを盡つかしたる

ウラナイ教けうに信實しんじつが  
ありそな事ことは無ないぢやないか

これだけ聞いても分るだらう 思へば研究の價値はない

これこれ申し松彦さま 私にははや嫌になつた

深くはまらぬ其中に ここをば立ち去りスタスタと

悪魔の征途に上りませう 取るにも足らぬ奴原を

相手に致して暇潰し 肝腎要の神業に

後れた時は何としよう 齋苑の館の神様に

云ひ譯立たぬ事になる 萬公、アク、タク、テクさまよ

お前等は何と申うてるか 一應意見を五三公に

聞かして呉れよ頼むぞや

アク 天地の神の御名を笠にきて

世を亂しゆく曲ぞ忌々しき。

義理天上日の出の神と魔我彦が

何なにをめ目めあててににそそんななデデママ云いふふか。

松彦まつひこをを末代まつだい様さまよよ日ひのの王わうよ

天てんのの神かみぢぢややとと旨うまくく釣つりりややががるる。

善よくく云いははれれ氣き持もちのの惡わるうう無ないいものものと

松彦まつひこささままがが迷まよひひかかけけたたるる」

松彦まつひこ「今いま暫しばしし吾わがななすすままままにに任まかししおおけ

善よししとと惡あししととはは神かみががささばばかかむむ」

タタクク「澤山たくさんにに怪體けたいなな宮みやをを建たてて竝ならべ

怪體けたいなな託宣たくせんすするるぞぞををかかししきき。

タタククはは今いま思おもひひ浮うかかぶぶるる事ことははななし

此場を早くぬけたいばかりぞ」

テク「テクテクと強い山をば登らされ

きつい狐につままれてける。

「きつく」姫名から狐の守護神

義理も天上もあつたものかい」

文助「最前から黙言つて此處で聞いて居れば、お前さま達は、大變にこのウラナイ  
教の本山を疑ひ、ゴテゴテと小言を仰有るやうだが、そんな事を仰有ると神罰が  
當りますぞや。唯何事も神様にお任せなされ、自分の着物の襟裏についた蝨さへ  
捻り盡されぬ身で居ながら、廣大無邊の御神力を彼是云ふといふ事があります  
か。障子一枚外は見えぬと云ふ人間の分際で居ながら、大廣木正宗様のお樹てな  
された教を何ゴテゴテと云ひなさる、ちと嗜なされたら好からう、ほんに憐れな

人達ひとたちだなアア」

萬公まんこう「芋蕪大根蛇松いもかぶらだいこんくちなはまつを書かく

文助ぶんすけさまにかきまはされにけり。

芋南瓜茄子いもかぼちやなすびのやうな面つらをして

蕪大根書かぶらだいこんかくぞをかしき。

文助ぶんすけが屁理屈へりくつ計りばか竝ならべ立たて

ばば垂たれ腰こしで睨にらみけるかなア」

文助ぶんすけ「これこれ若い衆しゅう、蕪大根描かぶらだいこんかいたとて蛇へびを描かいたとて大おほきなお世話せわさまだ。

放ほつといて下くだされ、お前達まへたちのやうな絲瓜へちまの「かす」に分わかつたものかい。瓢箪へうたんから

駒こまが出る、徳利とくりから酒さけが出る。早はやく改心かいしんをなさらぬと、往ゆきも戻もどりもならぬやう

な大根だいこん「なん」が迫せまつて來きますぞや。嘘計うそばかりツグネ芋いもして、山やまの芋いもばかりして居ゐ

るのだらう。本當ほんたうに、芋いももよい芋助いもすけだなア。屁への「つつぱり」にもならぬやうな

小理屈計り轉つて、何の事だいな

萬公 「お爺さま、誠に失禮な事を申しました」

文助 「失禮だと云ふ事が分つたかな、分ればよい、神様は何でも見直し聞直し宣直し遊ばすのだから、これからは心得なされよ。吾が目が見えぬと思うて馬鹿にして居なさるが、目の見えぬ目あきもあり、目の見える盲もある世の中だから、餘り左兵衛治をなさると、取り返しのならぬ事が出来すぞえ」

萬公 「こんな魔窟へやつて来て、身魂も曇らされては取り返しがつきませぬわい。

ウフ、

文助 「エ、仕方が無い男だ。こんな没分曉漢に相手になつて居たら龍神さまが一枚も描けぬやうになつてしまふ。お蛸さまに頼まれた蕪がもちつと仕上らぬから、どれ、奥へ往つて靜かな所で一筆揮つて來ませう、これこれ末代日の王天の大神様、暫く待つて居て下さいませ。これから教祖様へ御催促して來ますから」

萬公 「蕪の先生、左様なら」

文助 「エ、仕方が無いわい、仕方の無い【ケレマタ】だなア」



と呶つぶやきながら奥おくの間まへ姿すがたを隠かくした。

(大正一一・一二・一一 舊一〇・二三 加藤明子録)

第四章 靈みたまの淫念いんねん (一一一九四)

朝あさから晩ばんまで酒盛さかもりの

蠪いもり別りわけの神司かむつかさ

數多あまたの神かみの出入しゅつにふに

酒くしを祀まつると云いひ乍ながら

頬ほほべた迄までも赤あかくして

臭くさい息いきをば吹ふきまくり

侍者じしやの鼻はなをばゆがませつ

腋臭わきがのかほり紛々ぶんぶんと

あたりの空くう氣きを改かい惡あくし

天津祝詞あまつのりとの言靈ことたまを

呂律ろれつもまはらぬ舌したの根ねに

ころばせ乍ながら朝あさの中うち

ウラナイ教けうの神言かみごとを

汗あせをタラタラ絞しぼりつつ

唱へて又もや神様に うましき酒を獻り

【づぶ】六サンになつた上 眞晝が來れば神前に

足許怪しく進みより 天にまします吾父よ

御國を來らせ玉へかし 天になります其如く

地にも天國建てさせよ アーメン、ソーメン、トコロテン

ウドンに蕎麥に焼芋の 肴をドツサリ前に据ゑ

曲津の神の御光來 いと叮嚀に歡迎し

絶對的に博愛の 趣旨を貫徹させ乍ら

夕べになれば正宗の 酒にはあらぬ肉の宮

蠓蝨別は數珠をもみ 南無阿彌陀佛南無阿彌陀

般若心經波羅蜜經 節面白く唱へ上げ

三教合同の御本尊 床次さまの後をつぎ

天晴れ教主と成りすまし 酒の機嫌でドラ聲を

張上げ唸るお寅さま 小皺のよつた手を出して

爛德利をひん握り  
朝顔型の杯を

前につき出し目を細うし  
お酒の功德も大廣木

正宗さまよコレちよいと  
お過ぎしあれと差出せば

酒のタンクの正宗は  
御機嫌斜ならずして

お寅よお前は偉い奴  
年はとつても姥櫻

まだどこやらに花の香が  
プンプン残つて居るやうだ

お前の優しい其目許  
オツト、、、、こぼれます

あまり勢が強い故  
情が餘つて迸り

一張羅のお小袖が  
サツパリ「わや」になりました

さは去り乍ら之も亦  
正宗さまの御酒に

よごされたりと見直せば  
却て私は有難い

可愛いお方が好き好む  
靈の籠つた露ぢやもの

如何して不足に思ひませう  
一獻あがれと徳利を

又もや前に突出せば  
正宗さまは悦に入り

あゝ世の中に酒と云ふ 奴程可愛いものはない

お酒が俺の生命だ 酒さへあらば如何様な

ナイスも嬢も要るものか お寅のさした杯は

高姫さまの口元に どことはなしによく似とる

此杯を唇に あててキツスをする時は

何ともいへぬ味がする あゝ有難い有難い

これ高姫よ高姫よ 大けな口を開け乍ら

ここに居ますと一言の なぜ言問ひをしてくれぬ

口ばつかりがあつたとて 肝腎要の肉の宮

お目にかからな気がゆかぬ ホンに思へば情ない

夢の浮世といふことは こんなことをば言ふのだろ

夢の蝶螭別さまと 播陽さまが言ひよつた

コレコレ丑寅婆アさまよ お前ぢや根つから気がゆかぬ

大奥に居る上義姫 肉の宮をば呼ん出来て

酒さけの相あひて手をさしてくれ  
 何なんとはなしに淋さびしうて  
 そこらが冷つめたくなつて來きた  
 可を笑かしう此この世よが渡わたれない  
 異い性せいがなくては面おも白しろく  
 呼よんでお出いでとタダこねる  
 サアサア早はやう上じやう義ぎ姫ひめ  
 呼よんでお出いでとタダこねる  
 丑寅うしとら婆ばさまはキツとなり  
 口こう角かく泡あわをとばしつ  
 團栗どんぐり眼まなこをむきだし  
 蝶い蝮もり別わけの旦だん那なさま  
 私わたしの前まへでそんな事こと  
 どこを押おさへたら言いへますか  
 過すぎし逢あ瀬ふせの睦むつ言ことを  
 最も早はやお忘わすれなさつたか  
 ホンに薄はく情じやうなお前まへさま  
 私わたしは今いまは年とし老よつて  
 皺しわ苦く茶ち婆やアになつたれど  
 浮う木きの村むらの侠け客ふかくで  
 丑寅うしとらさまと仇あだ名なをば  
 取とつたる女をんな侠け客ふかくだ  
 バカになさるも程ほどがある  
 何なに程ほど神かみが澤たく山さんに  
 お出で入いりなさるか知しらね共ども  
 さうクレクレと猫ねこの目めの  
 お變かはり易やすい戀こひ衣ころも  
 破やぶつて貰もらつちやたまらない

私わたしも了れう見けんある程ほどに 覺おぼえてゐるよと言いひ乍ながら

松彦まつひこさまを受う付つけに 待またしたことを打うち忘わすれ

蠓いもり別わけの胸むな倉ぐらを 力ちからに任まかせてグツと取とり

コリヤコリヤ正まさ宗むね大おほ廣ひろ木き 蠓いもり別わけよバカにすな

お寅とむの腕うでには骨ほねがある モウ此この儘ままですまさぬぞ

どうぢやどうぢやと胸むな板いたを 力ちからに任まかしてもみつぶす

蠓いもり別わけは泡あわを吹ふき 顔かほを蒼まつ青さをにサツと變かへ

アイタタタツタ待まつてくれ どうやら息いきが切きれさうだ

もう是これからはスツパリと 松まつ姫ひめさまの上じやう義ぎ姫ひめ

肉にくの宮みやをば思おもひ切きり お前まへを大だい事じにする程ほどに

放はなせよ放はなせ胸むな倉ぐらを アイタタツタ ウンウンウン

苦くるしいわいの、コラヤお寅とら 許ゆるしてくれよと手てを合あはし

剛がう情じやう我が慢まんの正まさ宗むねも 命いのち惜をしさに詫わびいれれば

呆あきれてこける爛かん德どく利り 杯さかづきまでがメチャメチャに

砕くだけて笑わらふ面白おもしろさ ガチヤン ガチヤンと拍ひやうし子取とり

土瓶どびんは躍をどる德利舞とくりまふ 朝顔あさがほがた型の杯さかづきは

落花らくくわみぢん微塵をどとなりはてて 姿すがたちひ小かさく數かず多おほく

變化へんげしたるぞ可笑をかしけれ お寅とらは尚なほも承知しようちせず

コリヤコリヤ正宗まさむねおほひろき大廣木おほひろき 口くちさき先さきばかりでツベコベと

ゴマかしよるか、そんな事こと 聞きくよな婆ばばぢやない程ほどに

以後いごのみせしめ今いま一つ ああの世よこの世よの境さかひまで

やつてやらねばおかないと 鬼おにの蕨わらびをふり立たてて

悋氣りんきの勢いきほ凄せまじく ポカンポカンと打うちたたく

目めを白しろ黒くろとさせ乍ながら アイタタ タツタ コリヤ許ゆるせ

金輪こんりん奈落ならく天てんが地ちと なる世よが來きても正宗まさむねは

決けつしてお前まへを捨すてはせぬ 疑うたがひはらして其手そのてをば

早はやく放はなしてくれぬかい 折角せつかく呑のんだ酒さけ迄までが

早遠國はやゑんごくへ出奔しゅっほんし ゴツと身みに沁しむ秋あきの風かぜ

冬の薄衣ブルブルと 身體一面慄ひ出した

あゝ惟神々々 御靈幸ひませよ

涙と共に手を合せ 願へばお寅はつけ上り

今日はどしても許しやせぬ 松姫さまに涎くり

怪體な細目をむきやがつて 私を盲目にしたぢやないか

今日はドツサリ身のおぶら 絞つてやらねば蟲がいえぬ

たかが男の一人位 殺した所で何惜い

觀念せよと言ひ乍ら 怒りの面色凄じく

何時果つべしとも見えざりし 所へスタスタやつて來る

魔我彦さまの義理天上 日の出神の肉宮が

見るより忽ち仰天し アツとばかりに尻餅を

ついたる様の可笑しさよ 魔我彦漸く口をあけ

コリヤコリヤお寅婆アさまよ 正宗さまの肉宮を

なぜ其様に失禮な 無體なことを致すのか



瘦てもこけてもウラナイの 神の教の教祖様

神の出入の生宮を 打擲するとは何の事

靦面に罰が當るぞや 早く其手を放さんせ

言へばお寅は目をすえて コリヤコリヤ魔我彦義理天上

譯も知らずにツベコベと 仲裁だてが氣にくはぬ

唐變木のお前さまに 此いきさつが分らうか

モウ斯くなれば何もかも 一切曝露して了ふ

實の所は此お寅 正宗さまに思はれて

夜は暖き敷蒲團 恩も知らずに此色魔

人もあらうに神様の 御用を遊ばす松姫に

秋波を送り二世三世 百生迄も夫婦ぞと

約束したる此わしを 邪魔者扱にさらす故

お寅の顔が立たないと 今折檻をするところぢや

子供の出て来る幕でない グツグツしてると飛ばしづく

どこへかかかるか知れないぞ お前の足元明い内

どこなと勝手に逃げなされ サア是からが荒料理

腹わた迄もへぐり出し 大洗濯をしてやらな

中々改心致すまい ここらが百尋胃袋と

無性矢鱈にひつつかみ 鷺のやうなる爪たてて

引かきむしるぞ恐ろしき 蝶蝮別は顔しかめ

半死半生の爲體 アイタタ タツタ ウンウンウン

苦しい苦しい魔我彦よ どうぞ助けてくれぬかい

アイタタ タツタ アイタタタ お寅といふ奴アこれ程に

悋氣の強い女だと 思はなかつたあゝ苦しい

助けてくれえと聲限り 呼ばはり居たる折もあれ

目かいの見えぬ文助が コレコレ申し教祖さま

あなたが呼びなさつたる 末代日の王天の神

生宮さまが受付に しびれ切らして待つてゐる

早くお出會なされませ

何だか知らぬがガヤガヤと

いと騒がしい音がする

痛い痛いと言有るが

頭痛がするのか但し又

お肩がこるのかわらね共

餘り人を待たしては

御無禮になるかも知れませぬ

目かいたの見えぬ文助は

此場の様子を露知らず

平氣な事を言うてゐる

お寅はハツと氣がついて

オウオウさうぢやオウさうぢや

末代日の王天の神

此門口に待つてゐる

コリヤコリヤ正宗大廣木

末代様のお出で故

今日は許しておく程に

モウこれからは馬鹿なこと

したり言うたり致したら

お前の首はない程に

覺悟はよいかと云ひ乍ら

ハツと放せば正宗は

ハツと一息鼻汁をかみ

涙を拭ふ可笑しさよ

お寅は尻目にかけて乍ら

素知らぬ顔をよそほひつ

襟をば直しソロソロと

受付さして出でて行く。

お寅婆アさまの受付へ出た後で、魔我彦は松彦にこんな所を見られては大變だと思ひ、蝶蝟別の手を引いて奥の一閒へ寝かせて了つた。蝶蝟別は夢現になつて、譯の分らぬ事を呶鳴つてゐる。其閒にお寅は松彦一行を叮嚀に導き、奥の閒へ伴れて來た。

お寅「あゝあ、油斷のならぬ悪い猫奴が徳利をこかす、杯をふみわる、なんのこつちやいな、エー工氣のつかぬ、魔我彦は何しとるのぢやいな。其閒に座敷を片付けてくれるかと思ひ、ワザと暇を入れて居つたのに……私がしたのだないから知らぬ……といふ様な他人行儀の魔我彦の仕方、エー工仕方のないものだ」  
と小聲で呶いてゐる。

松彦「お寅さま、大變大きな猫があると見えますなア。杯を踏みわるなんて、随分立派な物でせう」

魔我彦は次の閒から又ツと顔を出した。お寅は目に角を立て、

お寅「コレ、天上さま、氣のつかぬ方ぢやなア。これ程猫があばれてるのに、なぜ片付けないのだい。お客さまがお出でになつたのに、みつともないぢやないか」  
魔我「ハイ實の所は牡猫と牝猫が二疋やつて來やがつて、噛み合ひをやつたのですよ。牡の方は酒の好きな猫で、へべレケになり、一方はドテライ牝猫で而も寅猫でした。滅多矢鱈に咬合ふものだから、火箸でなぐらうと思つたトタンに、猫はなぐれず杯をなぐつて、此通りメチャメチャにして了うたのですよ」  
お寅「エーエ、何をさしても氣の利かぬ方だな、サア、早く片付けなさい、人様にザマが悪いぢやないかい」

魔我彦は苦笑ひし乍ら、  
魔我「ザマの悪い事は誰がしたのだ。へん馬鹿らしい」

と口の中で呟き乍ら、不精無精に座敷を片づける。松彦一黨は居間の入口に手持無沙汰な風をして立ちまちをして居る。魔我彦はあわただしく一間の掃除をなし、火鉢、鐵瓶、徳利、膳などの置場所を直し、座蒲團を七枚布き終り、魔我「サアえらうお待たせしました。末代日の王天の大神の生宮様、どうぞ正座

にお直り下さいませ」

松彦「天の大神も随分落ちぶれて居りました」

と言ひ乍ら、差圖する儘に正座に坐つた。

お寅「これはこれはよくマアお出で下さいました。上義姫様の肉の宮が大變にお

待受でムいますよ。神様だつて夫婦がなければ、誠の御神業は出来ませぬからな

ア

松彦「吾々にはそんな粹事はありません。お見かけ通りの木石漢ですからなア」

お寅はツツと傍へ寄り、松彦の手の甲をソツと押へて細目をし乍ら、

お寅「へへへ、うまい事を仰有いますな。流石姫殺だ。戀の上手はやつれてかか

るとか言ひましてな。本當に至れり盡せりだ。蝶蜷別オツトドツコイ……大分に

違ひますわい。此婆アだつて貴方の様な男らしい生神様だつたら、モウ二十年も

若かつたら一苦勞して見ますがなア。ホツホへへ」

松彦は澁をかんだ様な面付で、

松彦「どうぞ揶揄はやめて下さい。吾々は大切な御用のある身體、其寸暇を伺つ

てあなたのお勧めに任せ参つたのですから、下らぬ話をなさるのならば、最早お暇を致します」

と箱さしたやうなスタイルでキチンとすわつてゐる。

お寅「これはしたり、誠に失禮なことを申上げました。併しねえ、さう仰有つても、ヤツパリ人間には裏表がありますからなア」

松彦「ハ、ハ、ハ、」

魔我「末代日の王様の生宮様、よくマア御入來下さいました。神政成就の太柱様、どうぞあなたも身魂の因縁だから、他所へは行かずに、神政成就の曉迄、何卒ここに御逗留を願ひます」

松彦「それは聊か迷惑、半時ばかり御邪魔を致し、今度は是非共お暇を頂きませう」

魔我「何と仰有つても、身魂の因縁で引寄せられ遊ばしたのだから、そりや駄目でせう。マアゆつくりとして下さいませ」

松彦「ハイ有難う」

萬公まんこう「モシ義理ぎりてんじやう天上てんじやうさま、此このブラリ彦ひこは何時いつ歸かへつたら宜よろしいかな」

魔我まが「どうぞ貴方あなたの御隨意ごずいになさつて下くださいませ。御都合ごつがふが悪わるければ、今直いますぐに御おか歸かへりになりましても構かまひませぬ」

萬公まんこう「山竹姫やまたけひめの口くちから生うまれた生宮いきみやぢやないが、マンマンマン　ウマーと呆あきれざるを得えませぬわい。へん」

魔我まが「お前まへはウラナイ教けうを研究けんきうしましたか。ようそんな細こまかいことまで御存ごぞんじですな」

萬公まんこう「ハイ此中このなかでウラナイ教通けうつうと云いつたら、マア私位わたせらな者ものでせう。私わたしはお寅とらさまの内の入婿いりむこでしたからなア。何か因縁いんねんがあるので、神様かみさまが知しらして下くださいますわ。

山竹姫やまたけひめさまは馬うまが出來できたので、ビツクリして今度目こんどめに又また、天てんの大神様おほかみさまにお祈いのり遊あそばし、猪いのししを生うまれたでせう。それから又次またつぎに口くちから玉たまを生うみ出だし、其玉そのたまがへぐれ

て孔雀くじやくが生うまれたでせうがなア。其位そのくらゐなことはチャーインと此この萬公まんこうは知しつてゐるのですからなア」

魔我まが「成程なるほどコリヤ感心かんしんだ」



萬公「私の随意にこれから御暇を致しませうか」

お寅「コレコレ萬さま、お前、何時の間にそんな「おかげ」を頂いたのだい。それを聞くからは、歸のうとといったとて歸なしはせぬぞや。それではヤツパリお前の靈はブラリ彦ではなかつた。耕し大神の靈かも知れぬぞえ。なア魔我彦さま、どうも耕し大神の様ですなア」

魔我「メツタにタガヤ……シませぬぢやらうかな。私や疑やしませぬけれどなア。耕し大神にしてはチツと軽いやうな氣がしますがなア」

萬公「萬公は兩手を組み、目を閉ぎ「ウン」と飛上り、

萬公「コリヤ、魔我彦、其方は耕し大神の靈を何と心得て居る、そんなことで義理天上日出神の生宮と言へるかア。三千世界の事なら、隅から隅迄、何もかも知つて知つて知りぬいた此方だぞウ」

魔我「ハイ恐れ入りました」

お寅「これはこれは萬公、イヤイヤ耕し大神の生宮様、誠にすまぬことを致しました。コレコレお菊、教祖様がいつも言うてムつただらう、お前の靈は地上姫だ、

地上姫の夫は耕し大神の生宮と仰有つたぢやないか。サア早うこちらへ来て御挨拶を申上げないか」

と大きな聲で呼ばはつた。お菊は驚いて此場に走り來り、

お菊「お母アさま、耕し大神の生宮さまて、どなた？ 此お方ですか」

と松彦を指さす。萬公は包みきれぬ嬉しさと可笑しさを無理に笑ふまいと氣張つてゐる。成るべくコクメンな素知らぬ體を装うとしたが、どうしても堪へ切れなくなり、

萬公「パーハツハ、、、」

と吹出した。

お寅「ママアア耕し大神様の御機嫌のよいこと、ソラさうだろ、永らく地の底へ落ぶれてムつたのだもの、ここで肉の宮と肉の宮の御對面を、天晴と現はれてなさつたのだから嘸御満足でムいませう。コレお菊、耕し大神の肉の宮はあの萬公さまだよ」

お菊「エーエ好かんたらしい、あたしイヤだわ。あんな黒い禪しとつた男、それ

お母アさま、にえ茶を呑んでこけた時、あれ思ひ出すと、何ぼ耕し大神さまだつて、愛想がつかますワ」

五三「ウツフ、、、」

アク、タク、テク一度に「ワアハツハ、、、」

アク「何とマア都合のよい教だなア。俺も今日からスツパリとウラナイ教へ入れて貰はうか知らぬてなア。サア何と言つたらよからうかな。アクビ直し彦でもつまらぬし……ウンさうだ、同じアのつく天若彦になつてやらう。ウンウンウン」

ドスン……

「此方は悪にみせて善を働く天若彦であるぞよ」

お寅「オホ、、、」

魔我「アハ、、、」

お寅「おきやんせいなア。そんな受賣をしたつて誰が買ふものか。よいかげんに冗談もなさるがよい。悪垂彦命奴が」

アク「あゝあ、たうとう尻尾を見られて了つた」

お寅「心得なされや、私の前だからよいが、よそへ行つて、そんな山子をなさると、ドテライ恥をかきますぞや」

五三「ウツフ、々、々、たうとう悪の企みの現はれ口だ。口は災の門とは能く云つたものだな、無茶苦茶に口をアクとアカンことになるのだ、のうテク、タク、俺達の面よごしだ」

アク「萬公だつて、さうぢやないか、萬公の言ふことが通用して、俺のいふことが通用せぬといふ理屈がどこにあるかい」

五三「アリヤ萬がよいのだ。アハ、々、々」

松彦「肝腎の大廣木正宗さまは何處にゐられますか。私は正宗様に會うてくれと仰有つたので参つたのですが、御本人が居られぬとすれば仕方がありません。歸りませうかな」

お寅「ヤ、居られます。併し今御神懸の最中ですから、どうぞ暫く御待ち下さいませ。奥の間にお伺ひの最中でいます」

松彦「私も何となく氣がせきますから、そんなら私の方から伺ひませう」

とツツと立ち、行かうとする、お寅は酔ひつづれた蝶蜋別を見られては大變と、  
兩手を擴げ、

お寅「ママママ、待つて下さい。今貴方に行かれては、一寸都合の悪いことが  
ムいます」

五三「松彦さま、酒に酔うてムるのですよ。受付へ聞えとつたでせう、此お寅さ

まと酒に酔ひ、イチヤ付喧嘩をして、胸倉をとられたり、頭をコツかれたり、助

けてくれ……と叫んでゐられたでせう。杯を破つたのも猫ぢやありませんよ、皆

二人の意茶付喧嘩の産物です、シツカリせぬとゴマかされて了ひますで」

松彦「アハ、ハ、ハ、人さまの内のこととは言ふものぢやない。沈黙しなさい」

と云ひ乍ら再び元の座に着いた。隣の間に蝶蜋別が酒に酔ひつづれ、うつつに

なつて囁語を言ひ出した。其聲は次の間へ筒抜けに聞えて来る。

蝶蜋「あゝあ、エライことになつたものだ。つひ酒の勢で南瓜みたやうなお寅婆

アをなぶつたのが病み付で、こんな目に會はされたのだ。あゝあ之を思へば高姫

は親切だ。あゝあ高姫は如何して居るだらうなア。高姫―々々、會ひたいわいの

う。ウニヤ ウニヤ ウニヤ ウニヤ ウーン」

お寅とらの顔色かほいろは俄にはかに變かはつて來きた。

魔我まが「エへ、へ、お寅とらさま、お氣きのもめる事ことでせうなア」

お寅とら「アリア信者しんじやの病人びやうじんがあんなこと言いつてるのだよ。ここへ時々ときとき氣きのふれた者もの

が參まつて來くるから……厄介やくかいな事ことだ」

魔我まが「それでも教祖けうそさまの聲こゑにソツクリぢやありませんか」

お寅とら「サアそこが氣違きちがひだ。惡神あくがみが憑うつつて教祖けうそさまの聲色こゑいろを使つかつてるのだ。そんなこ

とが分わからいで、假令たとへ看板丈かんばんだけでも、副教祖ふくけうそが勤つとまりますか。すまないが此このお寅とらは教けう

祖そ様の……ウンではない……エ、二世にせの……だよ。お寅とらさまを差さしおいてツケツケ

と言いふものでない。スツ込んでゐなされや」

魔我まが「義理ぎりてんじやうひ天上日出神てんじやうひのかみもお寅とらさまにかかつては駄目だめですわい」

萬公まんこうは長ながらく手てを組くんでゐたが、足あしはしびれ、手てはだるくなつて堪こらえ切きれなく

なり、ワザとにドスンと飛とび上あがり、空呆そらとぼけた顔かほをし乍ながら、

萬公まんこう「あゝ、あゝ大變たいへんな夢ゆめを見て居をつた。綺麗きれいな別嬪べつびんさまと祝言しうげんの杯さかづきをしたと思おも

へば……何だ夢だつたかいな。オ、それぞれ其お菊とソツクリの女だつた。何と  
マア妙なことがあるものだなア」  
お寅「ナアニ、お菊と同じ美人と結婚をしたことが靈眼にうつつたのかな。オ、  
さうだろさうだろ、それで益々確實になつて來た。神様の仰有つたことは違はぬ  
ワイ……神様、有難うムいます、惟神靈幸倍坐世」  
と蝶螻別の腹立を忘れてお菊の爲に祈つてゐる。  
(大正一一・一二・一一 舊一〇・二三 松村眞澄録)

第二篇 惠の松露

第五章 肱鐵「一九五」

思はず酒に酔ひつづれ 前後も知らず喋り立て

つひ脱線の其擧句 お寅の前でうつかりと

高姫戀しい戀しいと 云つた言葉を聞咎め

酒つぎ居たるお寅さまは 烈火の如く憤り

胸倉とつて抑へつけ 前後も知らぬ正宗の

肉の宮をば打ちたたき 義理天さまの手をかつて

奥の一間に連れ込んで 布團の上に寝させおき

此場を繕ふ可笑しさよ 末代さまと崇めたる

松彦一行此居間の 亂れ果てたる有様を

眺めて不審の眉ひそめ 其入口に佇みて

魔我彦さまが棕櫚箒 持つて掃除の濟む間

阿呆待ちし乍らやうやうに 一間に入りて座につけば

隣に聞ゆる呻り聲 お寅婆さまはひどい奴

高姫殿が戀しいと 囁言ばかり竝べ立て



夢中になつて呻り居る  
お寅は皆つり上げて

面を膨らす折柄に  
萬公さまが手を組んで

俄に装ふ神懸り  
ウンウンウンウインドスドスン

一尺ばかりも飛び上り  
両手をキチンと胸に組み

此方は耕し大神だ  
潮時狙つて囁けば

お寅は吃驚仰天し  
萬公さまの肉宮は

矢張り耕し大神か  
そんなら靈の因縁で

お菊の婿になるお方  
あゝ有難い有難い

なぞと頻りに手を合せ  
蝶蝨別の腹立ちを

ケロリと忘れたあどけなさ  
松彦初め一同は

此場の有様打眺め  
實に迷信の集團と

呆れ果てたる折もあれ  
一人の娘が現はれて

これこれもうし義理天上  
日出神の生宮さま

上義姫さまがお前さまに  
俄に用が出来た故

お客様等に失禮して 一寸でよいから来て呉れと

仰有いましたよ逸早く 御いでなされと手を支へ

話せば魔我彦立ち上り 皆さま失禮致します

お寅婆さまやお菊さま 末代様や皆様を

大切にもてなし成されませ 暫くしたら又此處へ

歸つて來ますと云ひ乍ら 使ひの娘と諸共に

離れの館へスタスタと 肩怒らして進み行く。

別の館には松姫の居間があり間は狭けれど三間作り、飾りもなく白木作りで小  
ザツパリした家である。松姫は千代と云ふ十二三の小娘を小間使として此處に引  
籠りウライナイ教の實權を握つて居る。表面からは蝶螭別が教祖なれど實力は此松  
姫にあつた。それ故蝶螭別もお寅婆さまも一目を置いて内部では全部其頭使に甘  
んじて居た。無論此松姫はもとウライナイ教の取次で高城山に教主をやつて居た剛  
の女である。さうして三五教に歸順し玉照彦を奉迎して歸つた殊勳者である。松

姫は蝶蜋別一派がウラナイ教の殘黨を集め小北山に靈場を開き邪教を宣傳しウラ  
ル教式を盛に發揮してゐたので、言依別命が特に松姫に命じウラナイ教に差遣は  
し、教理を根本的に改正せしめむとなし給うたのである。それ故松姫は特別の神  
力備はり流石の蝶蜋別も一步を譲り徒に教祖の虚名に甘んじ、朝から晩まで神の  
お出入と稱して酒に浸り高姫の行衛を尋ね求めつつ酒に酔つて悶々の情を消して  
居たのである。

魔我「上義姫様、今お千代さまを以て私をお呼びなさいましたのは何の御用でム  
りますか」

松姫「別に折入つて用と云ふ事はありませんが、お前さま、私の事を今日限り云  
はない様にして貰はないと困りますから、一寸來て貰つたのです」

魔我「私が貴女に對し、何ぞお邪魔になる事を申ましたか」

松姫「貴方いつでも私に向つて、いやらしい事を仰有るぢやないか。今日迄一日  
のばしに色々と云つてお前さまの戀の鋭鋒を避けて來ましたが、今日はお前さま  
に、とつくり云うておかねばならぬ。今のお客様は松彦様と云ふお方でせうがな、

松彦様は誰方の生宮だと思つてゐますか」

魔我「末代日の王天の大神様の生宮ぢやありませんか」

松姫「さうでせう。さうだから末代様とは何うしても夫婦にならねばならぬ因縁

があるので、義理天上さまは私の事を只今限りスツパリと諦めて貰ひ度いのだ」

魔我「昔の神様は末代さまと上義姫さまと夫婦だつたでせう。然し乍ら今日は靈

とお成り遊ばし肉の宮が違つて居るのだから貴女と私と夫婦になつた處で滅多に

罰は當りますまい。何と仰有つても私は是まで影になり日向になり苦勞をして來

たのだから、藪から棒をつき出した様に、そんな事を仰有つても仲々承知致しま

せぬぞや」

松姫「これ義理天上さま、影になり日向になり私のために盡したとは、どんな事

をして下さつたの。お禮も申さねばなりません一寸聞かして下さい」

魔我「義理天上の生宮だけあつて私は義理固いものですよ。お前さまが三五教で

あり乍ら、うまく化けて這入つてゐたのは百も千も私は承知してゐるのだ。蠅

別さまも「彼奴あ怪しい、ヒヨツとしたら爆裂弾となつて來たのだらうから酒

にでも酔ひ潰して片づけてやらうか」と、お寅婆アさまと私と三人の處でソツと相談をなさつた事がある。それでも此の魔我彦はお前さまが可愛いものだから、何とか云つて助けておけば否應なしにウンと云ふだらうと思つたものだから、いとと辨解してヤツとの事に蝶螈別やあの「えぐい」お寅婆さまを納得させ、今ではお前さまがウライナイ教第一の權威者となり、蝶螈別だつてお寅さまだつて貴方を内證で先生と仰ぎ、何事も皆貴女の神勅を受けて處置する様にならしやつたのも皆魔我彦が幹旋の功でムりますよ。此魔我彦が居なかつたら貴女の生命は、とうの昔になくなつてゐるのだ。さア之でもいやと仰有いますか。松彦様が成程末代日の王様でムりませう。然し乍らそれは靈の御夫婦、私と貴女は肉體の夫婦の縁を結んで頂かねば此魔我彦の男が立ちませぬ。さあキツパリと返答を聞かして下さい。返答によつては此魔我彦にも考へがありますから」

松姫「ホ、ホ、ホ、考へがあるとは如何しようと思ふの。お前さまに考へがあれば此方にも亦考へがある。サア其考へを聞かして貰ひませう」

魔我彦は言葉につまり、

魔我「工………其考と云ふのは即ち感慨無量だと云ふのです」

松姫「ホ、ホ、ホ、感慨無量が如何したと云ふの。可笑しい事を仰有るぢや有ませぬか」

魔我「こんな問答はぬきにして手取り早く條約成立をさして下さいな」

松姫「何の條約です。治外法權、内地雜居、條約改正、機會均等の流行る世の中

窮屈な條約は結び度くはありません。總て國家でも相互の間に危險が迫つた時に

條約が成立するものだ。天津條約だとして、華府會議の條約だとして、決して天下太

平のために結ばれたのぢやありません。貴方と私との間に別に危險の要素が含ま

れて居るのぢやなし、何の爲の條約ですか。又其條文の趣は何んな事が問題にな

つて居りますか。それを聞いた上でなければ、さうやすやすと條約締結批准交換

も出来ぬぢやありませんか」

魔我「貴女の仰有る條約の條と私の仰有る情約の情とは情に於て天地霄壤の相違

があります。貴女の條はスズと云ふ字、私の情は青い心と云ふ情ですよ」

松姫「上義姫の上とは違ひますな」

魔我「そりや全然正反對です」

松姫「肝腎の條が正反對なれば條約したつて成立せぬぢやありませんか。無條件否無情漢だと思はずに、こんな提案は速に撤回して下さい。末代日の王様が今にお越しになつたら叱られますからな。ホ、ホ、ホ、あの末代さまは何うしてゐるのだらう。エーじれつたい。好きは來らず嫌は來る、本當に世の中は思ふ様には行かぬものだわ。これ千代さま、お前御苦勞だが早く末代さまに別館へ來て下さる様お招き申して來て下さい」

千代「はい、只今行つて参ります」

魔我「これ、お千代さま、一寸待つてくれ、今行つて貰つては大に困る。行つてもいい様になつたら此義理天上さまが指圖をするから」

千代「いえいえ、私は魔我彦さまの召使ひぢやありませんか。上義姫様の家來ですから貴方の仰有る事は聞く義務はあります。私は御主人様に全權委員を任されたのですから、自分の權利を執行すれば宜いのです。阿呆の天上さま、大きに憚りさま」

と云ひ乍らツツと立ち上り左の足でポンと疊を齧かしスタスタと表へ出て行かうとする。

魔我「こりやこりやお千代殿、何故長上の云ふ事を聞ませぬか。子供の癖に我が強い」

お千代「師の君の嚴の言葉を如何にして

魔我彦さまにまげらるべしやは。

村肝の心も腰も魔我彦が

戀の魔神にとらはれてゐる。

義理天上日出神とはおとましや

赤い顔して焰吹きつつ

魔我「こりやお千代、そりや何を吐す。義理天上日出神を何と心得て居るか。世界の根本の根本から何もかも知りぬいた誠一つの大和魂の生粹の生宮さまだぞ」



千代ちよ「ホ、ホ、不義理ふぎりの天上てんじやう、上義姫様じやうぎひめさまに弾はじかれて目めから火ひの出での神様かみさま、心こころも腰こしも曲まがつた魔我彦様まがひこさま、よう、まアそんな馬鹿ばかな事ことを仰おつしや有あられたものですわ」

松姫まつひめ「相生あひおひの松まつの縁みどりも高砂たかさごの

幹みきの根元ねもとに荒浪あらなみがうつ。

相生あひおひの松まつの縁みどりは千代ちよかけて

榮さかえ榮さかえて曲まがる事ことなし。

魔我彦まがひこが何程なにほど日の出ひでの神かみだとして

此松このまつのみは影かげもささせぬ。

松彦まつひこと松姫まつひめ二人ふたり竝ならばして

松まつの神世かみよの千代ちよを祝ことほぐ」

魔我まが「今日けふか明日あすか、何時いつ吉日きちにちが來きたるやと

まつ甲斐もなき魔我彦の胸。

さり乍ら日の出の神の魔我彦は

理を非に曲げても通さなおかぬ。

義理と云ふ事を知るなら上義姫

吾心根もちとは汲ませよ

松姫 山の井の底にも知れぬ水鏡

汲みとり難きふり釣瓶かな

魔我 〆ふり釣瓶いかにピンピン覆るとも

汲んで見ようぞ天上車井

松姫まつひめ 義理ぎりてんじやうくるま天上車てんじやうくるまに釣瓶つるべはかかるとも

片方かたはうは汲くめど片方かたはうからから。

竝ならべては少すこしも汲くめぬ山やまの井ゐの

釣瓶つるべを如何いかに濡ぬらす由よしなし〆

千代ちよ 義理ぎりてんじやうこひ天上戀てんじやうこひの破やぶれた悲かなしさに

首くびをつる瓶べとおなり遊あそばせ。

ホ、、、釣瓶つるべおろしにかけられて

沈しづみ給たまへり戀こひの深井ふかゐに〆

魔我まが 〆 まだ年としも行ゆかぬ癖くせして魔我彦まがひこに

何なにをつるつる水みづくさ臭くさい事こと云いふ〆

千代ちよ 如何どうしても末代まつだいさまの御前おんまへに  
行ゆかねばならぬ魔我まが左様さやうなら  
」

魔我まが 』さて暫しばし、そんな事ことなら俺おれが行ゆく  
子供こどもの飛とび出だす幕まくでないぞや  
」

松姫まつひめ 』義理ぎりてんじやう天上日ひの出での神かみの生宮いきみやに  
今日けふは改あらため一言ひとこと申まをす。

松彦まつひこ は此この松姫まつひめがその昔むかし  
相あひし知り合あうた珍うづの戀人こひびと。

戀人こひびとと聞きいて驚おどろき給たまふまじ  
神かみの許ゆるせし夫婦ふうふなりせば  
」

魔我まが 「何なんとまア悪あく性しやうな事ことになつて來きた  
こんな事ことなら救すくふぢやなかつたにに」

松姫まつひめ 「村肝むらきもの心こころの底そこぞ知しられける  
枉まがのすくひし魔我彦司まがひこつかさをを」

魔我彦まがひこは雙手もろてを組くみ、

「エーエ、雪隠せんちの火事くわじだだ」

松姫まつひめ 「オホおほ、、、」

千代ちよ 「イヒいひ、、、、阿呆阿呆阿呆あほうあほうあほう」

魔我まが 「エー、コメツチヨの癖くせに八釜やかましいわい。キき、、、、氣色きしよくが悪わるいわい。サツ  
パリ杓子しゃくしだ。源助げんすけだ、アアあ」

(大正一一・一二・一一 舊一〇・二三 北村隆光録)

第六章 唾忿（一一九六）

魔我彦の義理天上日の出の神の生宮がお千代に導かれ上義姫の館へ往つた後に  
は、松彦一行と、お寅婆アさま、お菊の八人が茶を汲み果物なぞを頼張つて道の  
話に耽つて居る。其所へ受付の文助爺さまが、ノソリノソリとやつて来て、  
文助「もしお寅さま、お廣前の方から貴女に来て頂き度いと、大變矢釜しう云つ  
て来ました。お客さまの央で濟まないが一寸往つて来て下さいな。私がそれ迄お  
相手して居ますから」  
お寅「又狂人の信者が、暴れ出したのだらう、あゝ仕方がない、一つ鎮めて来て  
やりませう。末代様一寸失禮します。落瀧つ彦がその代り話のお相手になります  
から」  
松彦「御苦勞です、どうぞゆつくり往つて来て下さい、ここで私はゆつくりと休  
まして頂いて居りますから」  
萬公「おい五三公、蠓蠓別さまは、俺の察する所、酒に喰ひ酔つて奥の間で寝て

居るのだよ。それに違ひないわ。そして彼のお寅婆アさまと癡話喧譁をやつたのだ。キツトそれに極まつて居るよ」

五三「何でも高姫々と云つて居られたぢやないか。三五教の高姫さまと何か關係があるのだらうかなア」

萬公「何とも知れないなア、併し高姫さまは昔の馴染だと云つて東野別命に一生懸命になり、眼迄釣つて自轉倒島から遙々齋苑の館迄お越しになつて居るぢやないか。此處の蝶螭別さまの云ふ高姫は同名異人だらうよ」

五三「さうだらうかな。同じ名も世界には澤山あるから、さうかもしれないなア。併し高と云ふ名のつく女には随分惚手が多いと見えるねえ」

文助「皆さま、今高姫さまが齋苑の館に居らつしやると云はれましたなア、それは本當ですかい」

萬公「ハイ本當ですよ、何でもウライナイ教とかを開いて居た方だと仄に聞きました。随分口喧しい宣傳使ですよ」

文助「ハテナ、そんなら大方蝶螭別の教祖様が探ねてゐる高姫さまかも知れない」

五三 「高姫さまと云ふのは黒姫と云ふ弟子があつたやうですよ。そして黒姫には高山彦といふ頭の長いハズバンドがあつたと云ふ事です」

文助 「それ聞く上は蝶螭別様の探ねてゐる高姫さまに違ひない、今齋苑の館に居られますかなア」

五三 「ハイ居られます。高姫さまも此處の教主と何か深い靈の因縁があつたのですかなア」

文助 「あつたともあつたとも靈の御夫婦だから、どうしても高姫様がゐらねば蝶螭別様の行状が直らないのだ。蝶螭別さまを改心さすのは高姫さまのお役だ、義理

天上様の生宮だ」

五三 「へー、魔我彦さまが義理天上日の出神と違ひますかな。さう二人もあつてはどちらが眞か偽か分らぬぢやありませんか」

文助 「實の處は高姫様の所在が分り、此處へお迎へする迄、一日も無くてはならぬ義理天上さまだから魔我彦さまがそれ迄代理を勤めてゐるのだ。魔我彦さまの

本當のお靈は道成行成さまぢやぞえ」



萬公まんこう「何なんと自由じいうのきく神様かみさまぢやなア」

蝶いもり蛸りわけ別わけは次つきの間まに酒さけに酔よひ潰つぶれ、お寅とらに擲なぐられた頭あたまの痛いたさをこらへ乍ながら、高たか姫ひめの話はなしを耳みみに入いれるや否いなや、俄にはかに酔よひもさめ、襖ふすまに耳みみをあて、一いち言ごんも漏もらさじと聞きいて居ゐた。そこへお寅とら婆ばアさまがスタスタと歸かへつて來きて、

お寅とら「皆みなさま、えらう待またせましたなア」

文ぶん助すけ「これお寅とらさま、お前まへさま怒おこつてはいけませぬよ。此この方かた々の仰おつしや有あるには、あの蝶いもり蛸りわけ別わけさまの酒さけの上うへで仰おつしや有ある高たか姫ひめさまが、齋いそ苑その館やかたに來きて居ゐられるさうです」と小こ聲こゑで囁ささやいた。お寅とらは怪け訝げんな顔かほをして、

お寅とら「ア、左さ様やうか」

と云いひながら、

お寅とら「末まつ代だい様さま誠まことにお待またせ致いたしました、どうぞ、上じやう義ぎ姫ひめ様さまに一いち度ど會あつて下ください。

さうすると貴あな方たの靈みたまの因いん縁ねん性しやう來らいがすつかり分わかりますから」

松まつ彦ひこ「上じやう義ぎ姫ひめとか、松まつ姫ひめとかチヨイチヨイ聞ききますが、どんな方かたですか」

お寅とら「エ、素しら々じらしい、さう照てらすものぢやありません。これお菊きくや、末まつ代だい様さまを上じやう義ぎ

姫のお館迄御案内申しなさい」

お菊「ハイ、さア末代様、私が御案内致しませう」

松彦「何はともあれ、それではお目にかかりませう」

と座を立ち往かうとする所へお千代は走り來り、

千代「もし末代様とやら上義姫様が大變お待ち兼ねです。何卒お一人さま入らし

て下さいませ、折入つてお話し申たいとの事でムいます」

松彦「然らば伺つて見ませう。お寅さま、其外の御一同、一寸失禮致します」

お寅「何卒シツポリと水も漏らさぬ情約締結を遊ばしませ」

と嫌らしく笑ふ。松彦は合點往かぬと思ひながらお千代に導かれ、此場を去つた。

お寅は蝶蝨別の身を氣遣ひ、そつと襖を引き明けた。見れば蝶蝨別は襖の際に

鉢巻しながら立つて居る。

蝶蝨「ヤアお寅か、吃驚した」

お寅「それや吃驚なさつたでせう。高姫様の所在を立ち聞きしてムつた處へ、お

氣に召さぬお寅婆が突然襖をあけたものですから、御尤もです」

と云ひながら、二の腕を力一ぱい抓つた。蠓蠓別は、

蠓蠓「エ、馬鹿にすない、いつとても打擲ばかりしよつて、貴様のお蔭で生創の

絶えた閒なしだ」

お寅「これ蠓蠓別さま、憎くつて一つも抓られませうか」

と云うて又抓める。

蠓蠓「エ、痛い、お客さまがあるぢやないか、見つともない」

と呟く。お寅は狂氣のやうになつて、

お寅「エ、見つともないとは能くも云へたものだ。あまり馬鹿にしなさるな。こ

の寅だつて馬鹿ぢやありませんよ。些は性根もありますからな」

蠓蠓「俺れやもう今日限りに此處を出て往く、後は何分頼む」

お寅「エ、何と仰有る、いやな私を振り捨てて夜鷹のやうな高姫の處へ往くので

せう、そんなら往きなさい。お別れに此の通り」

と云ひ乍ら、力一ぱい剛力に任せて鼻をねぢあげた。蠓蠓別はフラフラと目が眩

み、ドスンと其場に打ち倒れた。

此物音に驚いて、萬公、五三公、アク、テク、タクの五人はバラバラと一室に  
驅込み、

五三「これこれお婆さま、神様の道で居ながら何と云ふ手荒い事をするのだ」

お寅「ほんの些細の内證事、さう皆さまに来て貰ふやうな事ではありませぬ。ど

うぞ彼方で、ゆつくりとお茶を上つて下さいませ」

お菊「お母さま、蠓蝨別さまは目を眩して居られるぢやありませんか」

アク「何と手荒い婆さまぢやなア」

タク「本當に」

テク「ひどいなア、こんな事思ふと女はもう恐ろしくなつたわ」

五三「オイ萬公、随分お前の義理の親は侠客だけあつて強いものぢやなア」

お寅「ホ、ホ、ホ、猪喰つた犬は、どこかに違ふ所がありませんか。サア彼方

へ往きなさい。蠓蝨別さまはチョコチョコかう云ふ病氣があるのだ。これから私

が活を入れて呼び活て上げますから、あまり大勢ドヤドヤとして居ると靈が中有

に迷うて元の鞘に納まらぬと迷惑だから」

萬公まんこう「此この場ばはお寅とらさまに任まかして、俺達おれたちは次つぎの間までお茶ちやでも頂いただかうかい」

一同いちどう「ウンそんならさうしようかなア」

と次つぎの間まに立たつて往ゆく。

お寅とら「オイお菊きく、お前まへも小供こどもだてらこんな所ところにジツとしてゐるものぢやない、蝶いも

別りわけさまは私わたしが介抱かいほうしてあげるから」

お菊きく「あまり手荒てあらい事ことはしないやうにして下さいな」

お寅とら「何どうしようと、斯かうしようと此方こちらの勝手かたてだ。小供こどもだてら差出口さしでぐちをするもの

ぢやない。サア彼方あちらに往ゆきなさい」

お菊きく「それでも心配しんぱいでならないわ」

お寅とら「エ、執しつこい」

と突つき出だす、お菊きくは涙なみだぐみながら表おもてを指さして出いでて往ゆく。蝶いも別りわけは漸やうやく息いきを吹ふき返かへ

し、何なにかハツキリは聞きえないが、お寅とらと二人ふたりでブツブツと話はなしをやつて居ゐる。

タク「ア、何なんとまア、ウラナイ教けつは手荒てあらい事ことをする女をんなが居ゐるものぢやない。バ

ラモン教けつだつてあんな酷ひどい事ことは、まだしたのを見みた事ことはないがなア。最前さいぜんもウラ

ナイ教けうは天下てんか泰平たいへい上下一じやうげいつち致和合わがふの教をしへだ。三五あななひけう教けう、ウラル教けう、バラモン教けうのやうに喧譁けんくわ計りばかして居ある教をしへを信しんぜず、ウラナイ教けうに入はいれと偉えらさうに云いひよつたが、薩張さつぱり、口くちと行おこなひとは裏表うらおもてだ」

テク「それだから世よの中に誠まことの者ものは目薬程めくすりほども無いと神様かみさまが仰有おつしやるのだよ」

タク「本當ほんたうだねえ」

萬公まんこう「上うはべから見みれば尊たふとき神司かむつかさ

其内幕そのうちまくには大蛇住をろちすむなり」

五三いそ「本當ほんたうに愛想あいさうが盡つきたウラナイの

神かみの道みちにもやはり裏うらあり」

アク「あきれたよお寅婆さまの勢ひに  
蠓蝮別を捻伏せた所」

タク「それやさうぢや女白浪ばくちうち  
夜叉のやうなるお寅婆さまだ」

テク「テクテクと強い山道登り来て

思ひもよらぬ喧嘩見るかな。

あの婆は唯者ならじと思つたら

白浪女のなれの果てなる。

あの人<sup>ひと</sup>がウライナイ教の教祖かと

思へばたまげて物が言はれぬ。

小北山醜こぎたやましこの嵐あらしが吹き荒すさび

丑寅婆うしとらばさまが荒すさび狂くるへる。

ユラリ彦上ひこじやうぎ義ぎの姫ひめを祭まつつたる

小北こぎたの山やまは戀こひの埃捨ごみすて。

埃溜ごみために千歳ちとせの鶴つるの下おりたよな

松彦まつひこさまのお出でましまはれ。

お寅婆とらばば何なんぢやかんぢやと口先くちさきで

喧譁けんくわ見みせよと連つれて來きたのか

五三いそ 『やきもちをやいて俺等おれらに振ふれ舞まふと

一生懸命いっしやけんめいにやつて居ゐるのだ。

犬いぬさへも喰くはない様やうな喧譁けんくわして

見みせつけるとはこいつアたまらぬ。



悵りんき氣きして死しぬの走はしるの暇ひまくれと  
吐ぬかす嬢かかよりひどい婆はばうきき』

アク『アク迄までも戀こひの意い地ぢをば立たて通とほし

小こ北ぎたの山やまがこはれる迄まで往ゆく。

あのやうなアク性しやう女をんなに魅みられて

蠟いも蝋り別わけも噁さぞ困こまるだらう』

テク『それやさうぢや丑うし寅とら婆ばさまと云いふぢやないか

悵りんき氣きの角つのをふるは當たう然ぜん。

こいつア又また怪け體たいな所ところへ來きたものぢや

往いぬに往いなれず居をるに居あられず。

松彦まつひこの司つかさは何なにしてして△じぎるるだる

心許こころもちなし小北山風こぎたやまかせ□

斯かかる所ところへ蒼青まつさをな顔かほしてブラリブラリと入はいつて來きたのは魔我彦まがひこであつた。

萬公まんこう「よう魔我彦まがひこさま、些ちつと顔色かほいろが悪わるいぢやありませんか、何かなに又またナイスに油あぶらを取とられたのでせう□

魔我まが「チヨツ、イヤ何でもありません、恐おそろしいものでありますわい。本當ほんたうにチヨツ、ふげたの悪わるい、もう嫌いやになつて仕舞しまつた。エ、もどかしい、焦ぢれつたい、胸むね糞くその悪わるい、チヨツ【しんごく】ど奴め、エ、【あ】かんあかん、チヨツ因縁いんねんづくだ。

【ウ】ンザリして仕舞しまつた。チヨツ、【エ】、儘ままよ、【お】れもチヨツもう自暴や自棄けだ。カ、カ、カ、カ、構かまうものかい、チヨツ、【キ】、氣きに喰くはぬ、チヨツ、

【ク】、カ、カ、カ、糞くその餓鬼奴がきめ、チヨツ、【ケ】、カ、カ、カ、怪けつ體たいの悪わるいわ、コ、コ、コ、コ、ころりとやられて來きた。チヨツ、【さ】らしやがつたな、【し】んごくど奴め、チヨツ、【好す】かந்தらしい、【セ】、カ、カ、カ、雪隱蟲せんちむしめ。チヨツ、あ、あ、あ、【そ】ろそろ

と寢間へでも入つて休まうかな、【タ】、、忽ちだ、覺えてけつかれ【チ】ツとは性があるぞ、チヨツ、【ツ】き出しやがつて【テ】、てれ臭い、【ト】ツとらんぼり返りをさせやがつたな、チヨツ、【ナ】、情ない、チヨツ、【ニ】、にくらしい、【又】、、又ツと出て來やがつて、【ネ】、、根つから葉つから【の】ぞみが達しさうにもなし【ヒ】ドい目に遇はしやがつた。チヨツ、【フ】、太い事を【へ】い氣でやつてけつかるのだらう、【ホ】、ほんまに、欲の熊鷹だ。

【マ】、、、またが裂けるぞ、【ミ】、、見てけつかれ、【ム】、無茶でも、

【メ】、目をかけた以上は、【モ】、もう許さぬぞ

五三「コレコレ魔我彦さま、何獨り言を云つて居るのだ、テンと譯が分らないぢやないか。【ヤ】、ややこしい【イ】キサツが、ウルサイ程、【ユ】、湧出して居るのだろ、【エ】、遠慮なく五三公さまに【ヨ】、よく知らして呉れ【ラ】、らちもない事で無ければ、【リ】、立派に理由を、【ル】、縷述して方をつけたらよいぢやないか。大方【レ】、戀愛の失策だらう。【ロ】、ローマンスがあるのぢやないか、【ワ】、吾身の力に合ふ事なら、【イ】、いかなる事でも【ウ】、

受け合<sup>あ</sup>うて【エ】、縁<sup>えん</sup>を結<sup>むす</sup>び、【オ】、納<sup>をさ</sup>めてやるか、ホ、、、、、

魔<sup>ま</sup>我<sup>が</sup>「五<sup>い</sup>三<sup>そ</sup>公<sup>こう</sup>さま、實<sup>じつ</sup>の處<sup>ところ</sup>はパリぢや、パリはパリだが、サツパリだ」

五<sup>い</sup>三<sup>そ</sup>「ヘーン」

一<sup>いち</sup>同<sup>どう</sup>「ウフ、、、、ワハ、、、、何が何<sup>なん</sup>だか譯<sup>わけ</sup>が分<sup>わか</sup>らぬやうになつて來<sup>き</sup>たワイ、

分<sup>わか</sup>らいても矢<sup>や</sup>張<sup>はり</sup>をかしいワイ、ウハ、、、、イヒ、、、、」

(大正一・一二・一一 舊一〇・二三 加藤明子録)

## 第七章 相生<sup>あひおひ</sup>の松<sup>まつ</sup>(一一一九七)

ウラルの姫<sup>ひめ</sup>の系統<sup>けいとう</sup>と 生<sup>うま</sup>れ合<sup>あ</sup>ひたる高<sup>たか</sup>姫<sup>ひめ</sup>が

バラモン教<sup>けう</sup>やウラル教<sup>けう</sup> 三<sup>あ</sup>五<sup>な</sup>教<sup>けう</sup>の御<sup>み</sup>教<sup>をしへ</sup>を

あちら此<sup>こ</sup>方<sup>ちら</sup>と取<sup>とり</sup>交<sup>ま</sup>せて 變<sup>へん</sup>性<sup>じやう</sup>男<sup>なん</sup>子<sup>し</sup>の系統<sup>けいとう</sup>と

自稱し乍らフサの國

北山村に居を構へ

蠓蝮別や魔我彦や

高山彦や黒姫を

唯一の股肱と頼みつつ

ウライナイ教の本山を

立てて教を四方の國

宣べ傳へつつ三五の

神の仁慈にほだされて

全く前非を後悔し

神の御爲世の爲に

舍身の活動勵みつつ

今は全く三五の

教の司と成りすまし

生田の森の神館

珍の司となりにける。

後に残りし魔我彦は

蠓蝮別を教祖とし

北山村を後にして

坂照山に立ちもり

茲に愈ウライナイの

教を再び開設し

小北の山の神殿と

稱へて教を近國に

傳へ居るこそ雄々しけれ

蠓蝮別や魔我彦は

高姫仕込みの雄辨を

縦横無盡にふり廻し

彼方此方の愚夫愚婦を

將棋倒しに説きまくり

天下に無比の眞教と

隨喜の涙をこぼさせつ

螢の如き光をば

小北の山の谷間に

細々乍ら輝かす

さはさり乍ら常暗の

黑白も分ぬ世の中は

蠚螋別や魔我彦の

ねぢけ曲れる教をも

正邪を調ぶる智者もなく

欲にからまれ天国へ

昇りて死後を安樂に

暮さむものと婆嬋が

愚者々々集まりゐたりけり

浮木の村に名も高き

白浪女のお寅さま

どうした機みか何時となく

小北の山に通ひ出し

足しげしげと重なつて

蠚螋別に殊愛され

女房氣取りで何くれと

一切萬事身のまはり

注意到注意を加へつつ

あらむ限りの親切を

盡して教祖の歡心を

やつと求めて丑寅の

婆さまはニコニコ悦に入り  
小北の山を一身に

吾雙肩に擔うたる  
やうな心地で控えゐる。

蝶螭別は曲神に  
魂をぬかれて酒計り

夜と晝との區別なく  
あふりて心の煩悶を

慰め居れど時々  
心に潛みし曲鬼が

飛出し來り高姫の  
色香を慕ひ口走り

お寅の心を痛めたる  
其醜態は幾度か

數へ盡せぬ計り也  
お寅は無念を抑へつつ

勘忍袋をキツと締め  
こばり詰めてぞゐたりしが

大洪水の襲來し  
千里の堤防一時に

決潰したる計りにて  
悋氣の濁水汜濫し

人目もかまはず前後をも  
忘れて教祖の胸倉を

つかみ締めたる恐ろしさ  
かかる亂癡氣騒ぎをば

表に待ちし松彦の  
司の一行に隠さむと

心を痛めいろいと

此場の體裁つくるへど

隠し終うせぬ爛德利

土瓶の居ずまひわれた猪口

金切聲は屋外に

聞え來るぞ是非なけれ

お寅婆さまが此山に

來つて御用を始めてゆ

これ丈怒つた大喧譁

未だ一度もなかつたに

如何した拍子の瓢箪か

思ひもよらぬ醜状を

珍客さまの目の前に

曝露したるぞ神罰と

云ふもなかなか愚なり

あゝ惟神々々

御靈幸ひまませよ。

小北の山の別館に  
掌握しつつ朝夕に

潛みて教の實權を  
神素盞鳴大神の



おほみこころ 大御心を奉戴し  
 ほにちよろう 日日萬に言向けて  
 いもりわけ 蠨蛸別や魔我彦の  
 あななひけう 三五教の眞髓を  
 よびと 世人の爲に神徳を  
 いもりわけ 蠨蛸別の言ふままに  
 こころ 心ならずも春陽の  
 かみ 神に祈りて松姫が  
 こぎた 小北の山に祀りたる  
 まっだいひ 末代日の王天の神  
 いずれも 正しきものならず  
 たぶらか 誑されて魔我彦が  
 とくい 得意になりて宮柱  
 へぐレ 神社を立て立て並べ  
 ウラナイ 教の曲神を  
 こんぼんてき 根本的に改良し  
 みたま 身魂を立替立直し  
 りかい 理解せしめて道の爲  
 かがや 輝かさむと松姫は  
 じゃうぎ 上義の姫と稱へられ  
 はなさ 花咲き匂ふ時節をば  
 こころ 心の奥ぞ床しけれ  
 ひこ ユラリの彦の又の御名  
 そのほか 其外百の神名は  
 きつねめき 狐狸の神靈に  
 まこと 誠の神と思ひつめ  
 へぐレの へぐレのへぐレムシヤ  
 まよ 迷ひあるこそうたてけれ

あななひけつ 三五教の松姫も かやうな事に騙れて  
しんかう 信仰するよな者でない さは去り乍ら今すぐに  
げんかく いと厳格な審神をば なすに於ては蝶螭別  
そのほかも 其外百の神司 一度に鼎の湧く如く  
いかく 怒り狂ひて松姫の 身邊忽ち危しと  
さと 悟りたるより松姫は 素知らぬ顔を装ひつ  
けう ウラナイ教の實權を 何時の間にかは掌握し  
こぎた 小北の山の神殿は 殆ど松姫一人の  
しめい 指命の下に大部分 動かし得べき身となりぬ  
このうへ モウ此上は松姫も 何の遠慮も要るものか  
しやうたい やがてボツボツ正體を 現はしくれむと思ふ内  
むかしわか 昔別れし吾夫の 松彦さまが三五の  
かみ 神の司となりすまし 思ひも寄らぬ此山に  
お寅婆さまに導かれ 登り來りし其姿

居間の窓より覗きこみ

ハツと胸をば躍らせつ

俄に戀しさ身にせまり

たまりかねてぞなりければ

神勅なりと言ひくろめ

お寅婆さまを招きよせ

今來た人はユラリ彦

末代日の王天の神

尊き神の生宮ぞ

あの神様に歸なれては

五六七神政成就の

仕組はととも立たうまい

御苦勞乍ら一走り

お前は後を追つかけて

末代さまを是非一度

この館に連れ歸り

いと慇懃に遇して

いついつ迄も此山に

鎮座ましましウライの

神の教の目的を

立たさにやならぬお寅さま

これの使命を果しなば

お前はこれから此山の

最大の殊勳者と

おだてあぐればお寅さま

俄に元氣を放り出して

十曜の紋の描きたる

扇片手にひつつかみ

まつひめやかた  
松姫館を飛出して

オーイオーイと松彦を

よびもと  
呼戻したる其手腕

なみなみならぬ婆さま也

あゝ惟神々々

御靈幸ひまませよ。

いもりわけ  
蝶蜋別の片腕と

自分も許し人も亦

ゆる  
許す魔我彦副教主

蝶蜋別の託宣を

いち  
一から十迄鶉呑みして

善悪正邪の區別なく

ただありがた  
只有難い有難い

誠の神は此外に

ひろ  
広い世界にやあるまいと

心の底から歡喜して

しんり  
眞理を紊す教とは

少しも知らず朝夕に

ほねみ  
骨身を惜まず神前に

いとまめやかに仕へつつ

まよ  
迷い切つたる魔我彦は

蝶蜋別のなす事は

ぜんあくせいじや  
善悪正邪に係はらず

何れも神の正業と

めいしん  
迷信せるこそ愚なれ

かくも教に迷信な

ぼくちよくいちづ  
朴直一途な魔我彦も

若き男の選にもれず

戀に心を亂しつつ 吾れにかしづく女房は

甲に致そか乙にせうか 又々丙か丁戌か

なぞと集まる信者をば 女と見れば探索し

物色しつつ目が細い 色は白いが鼻低い

鼻は高いが目が細い 背丈が高い低いなど

朝な夕なに首かたげ 妻の選挙に餘念なく

心を悩ましむたる折 少しく年はよつたれど

花を欺く松姫が これの館に來りしゆ

二世の女房は松姫と 自分免許の妻さだめ

神の奉仕の其間は 萬事萬端氣を付けて

松姫さまの歡心を 買ふ事計りに身を俏し

吉日良辰到來し 連理の袖を翻し

合袞式をあげむぞと 樂しみゐたるも水の泡

思ひもよらぬ松彦が 此神館に現はれて

ウラナイ教の信徒が

唯一の主神と頼みたる

神徳高きユラリ彦

又の御名を尋ねれば

末代日の王天の神

珍の宮居と現はれて

突然ここに天降り

上義の姫の松姫が

霊の夫婦と聞きしより

気が気でならぬ魔我彦は

胸を躍らせりたりける

かかる所へ松姫の

侍女のお千代が現はれて

魔我彦さまへ上義姫

あが師の君が御用ぞと

聞いたを機に座を立つて

鼻うごめかし肘を張り

吉報聞かむと行てみれば

豈計らむや松姫は

打つて變つた其様子

犯し難くぞ見えにける

義理天上と自稱する

魔我彦、姫に打向ひ

思ひの丈をクドクドと

述べむとすれば松姫は

挺でも動かぬ勢で

魔我彦さまへ今日からは

お前に頼む事がある

松彦さまは吾夫よ

モウ之からは厭らしい

目付をしたりバ力な事

言はない様にしておくれ

二世の夫のある私

大に迷惑致します

松彦さまはユラリ彦

末代日の王天の神

私は妻の上義姫

遠き神世の昔から

切るに切られぬ因縁で

ヘグレのヘグレのヘグレ武者

世界隅なく道よひて

おちて居つたが優曇華の

花咲く春に相生の

松と松との深緑

千代の契を結び昆布

お前と私との其仲は

至清至潔の身の上だ

汚しもなさず汚されも

せない二人の神司

萬の物の靈長と

生れた人は何よりも

斷の一字が大切よ

戀の執着サツパリと

放かしてお呉れと手厳しく

不意に打出す肱鐵砲

呆れて言葉もないじやくり

言葉を盡し最善を 盡せど松姫承知せず

お千代に迄も馬鹿にされ 無念の涙ハラハラと

松彦司を恨みつつ シオシオ立つて元の座へ

顔の色まで青くして 歸つて見れば萬公や

五三公其他の連中が 力限りに嘲笑する

魔我彦さまは腹を立て 齒ぎしりすれど人の前

怒りもならず泣けもせず 煩悶苦惱の胸おさへ

俯むきゐるぞ憐れなる 少女の千代に導かれ

松彦さまは別館 進みて見れば此はいかに

日頃慕ひし松姫が 盛装凝らしニコニコと

笑顔を湛へて松彦が 手を取り奥へよび入れる

流石の松彦呆然と 言葉も出でず松姫が

面を眺めてゐたりしが あたり見まはし松姫は

ソツと其手を握りしめ 戀しき吾夫松彦よ



夜の嵐よる あらしに誘さそはれて 別わかれてから早はやととせ十年  
 餘あまりの月日つきひを送おくりました 雨あめの晨あしたや風かせの宵よひ  
 思おもひ出だしては泣なきくらし 思おもひ出だしては又また歎なげく  
 月日つきひの駒こまの關せきもなく 今日けふが日ひ迄までも吾夫わがつまの  
 行方ゆくへを探たづね神様かみさまに 祈いのりを上あげて一日いちにちも  
 早はやく會あはさせ玉たまへやと 祈いのりし甲斐かひもありありと  
 現あらはれ玉たまひし神かみの德とく 今日けふの集つどひの有あり難がたさ  
 何なにから言いうてよかるやら 話はなしは海山うみやま積つもれ共ども  
 其その糸いとぐちも亂みだれ果はて 解ほどきかねたる胸むねの内うち  
 推量すゐりやうなされて下くださんせ マアママ無事ぶじで御達者おたつしやで  
 私わたしも嬉うれしいお目め出でたい 貴方あなたに見みせたい者ものがある  
 どうぞ喜よろこんで下くださんせ 語かたれば松彦まつひこなみだ涙なみだぐみ  
 其手そのてをしかと握にぎりしめ お前まへは吾妻わがつま松姫まつひめか  
 ヨウまあ無事ぶじでゐてくれた お前まへに別わかれた其後そのちは

世を果敢なみてウロウロと　フサの國をば遠近と

巡り巡りて月の國　バラモン教の本山に

現はれ玉ふ神柱　大黒主の部下とます

ラン子將軍片彦が　司の神に見出され

神の柱や軍人　二つを兼ねてまめやかに

仕へ乍らも兩親や　兄の身の上汝が身を

思ひ案じて一日も　安く此世を渡りたる

時も涙にかきくれて　悲しき月日を送る折

尊き神の引合せ　河鹿峠の谷間で

戀しき兄に巡り會ひ　茲に心を翻へし

三五教に入信し　御伴に仕へまつりつつ

野中の森で夜をあかし　橋の袂に来て見れば

お寅婆さまの母と子に　思はず知らず出會はし

縁の綱に曳かされて　思はず知らず來て見れば

日頃慕ひし吾妻は  
ここに居たのか嬉しやな

結ぶの神の結びたる  
二人の仲は一旦は

右に左に別る共  
心に解ぬ戀の絲

解き初めたる今日の空  
嬉しさ胸に満ち溢れ

答ふる言葉もないじやくり  
神の恵を今更に

思ひ浮べて有難く  
身に沁みわたる尊さよ

旭は照る共曇る共  
月は盈つ共虧くる共

假令大地は沈む共  
誠の力は世を救ふ

眞心こめてひたすらに  
神の教を守りたる

二人の身をば憐れみて  
思ひもよらぬ此山で

會はし玉ひし天地の  
神の御前に感謝して

此行先は殊更に  
命を惜まず道の爲

心の限り身の限り  
仕へまつりて神恩の

萬分一に報うべし  
あゝ惟神々々

御靈幸ひましましてよ。

松彦「尊き神様の御恵みに依つて、永らくの間、互に在所の分らなかつた松と松との夫婦が、思はぬ此山で廻り合ふとは、何たる有難い事であらう。先づ其方も無事で、松彦も嬉しい、就ては私に見せたい物があると云つたのはどんな物だ、様子有りげなお前の言葉、グツと胸にこたえた」

松姫「ソリヤさうでムいませう。貴方にお別れた時に、私は身重になつて居つた事を覚えてゐらつしやるでせう」

松彦「確かに覚えてゐる。機嫌よく身二つになつただらうなア」

松姫「ハイ、アーメニヤを逃げ出す途中、フサの國のライオン河の畔で腹が痛くなり、たうとう妊娠八ヶ月で、可愛い女の子を生みおとしました」

松彦「そして其子は何うなつたのだ。早く聞かして呉れ」

松姫「途中の事として如何する事も出来ず、苦んで居る所へ、酒に酔うた男がブラリブラリと通り合せ、親切に吾家へつれ歸り、介抱をしてくれました。それが爲

に母子共に機嫌よく肥立ち、娘は其男に子がないのを幸ひ、貰つて貰ひ、私はフサの國北山村のウラナイ教へ信仰を致し、遂には拔擢されて宣傳使となり、自轉倒島の高城山に教主となつて御用を致して居りましたが、高姫様の三五教へ歸順と共に私も三五教へ歸順致し、言依別命様の内命に依つて、小北山へいろいろと言を設け、うまく入り込んで、神業の爲に、心を碎いて居ります。そして其娘はここに居る此お千代でムいます』

松彦『ヤアこれが吾娘か、ヨウマア大きくなつてくれた。親はなうても子は育つとは能く云つたものだな。コレお千代、私はお前の父親ぢや、養育を人手に渡して濟まぬ事だつたなア』

と涙ぐむ。お千代は始めて松姫の物語を聞き、松姫は自分の實の母で、松彦は實の父なることを悟つた。お千代は思はず嬉し涙にくれてワツと其場に泣倒れた。松姫も涙乍らにお千代を抱起し、頭を撫で背を撫でて齒をくひしめて忍び泣きしてゐる。

松彦 『たらちねの親はなくても子は育つ』

育ての親の恵み尊き。

吾子をば育て玉ひし兩親は

いづくの人が聞かまほしさよ』

松姫 『フサの國竹野の村のカーチンと

言つて名高き白浪男。

さり乍らカーチンさまの夫婦づれ

今はあの世の人となりぬる』

松彦 『一言のいやひ言葉もかはされぬ

育ての親の有難き哉。

吾娘、千代も八千代もカーチンの  
育ての恩を忘れまいぞや」

千代「有難き育ての親に悲しくも

別れて誠の親に會ひぬる。

たらちねの父と母とに巡り合ひ

嬉し涙の止めどなくふる」

松姫「母よ子よと名乗らむものと思ひしが

あたり憚り包み居たりし。

吾母と知らずに仕へ侍りたる

お千代の心いとしかりけり」

千代ちよ 吾母わがははと知らしず知らしずなつかに懐なつかしく

師しの君様きみさまと思おもひ仕つかへぬ。

どことなく温ぬくみのぬくるぬくます師しの君きみと

朝あさな夕ゆふなふしに伏拜ふしをがみけるに

松彦まつひこ 三五あななひの神かみの大道おほぢにいりしより

三日みっかならつままに妻つまにあひぬる。

妻つまとなをつとなり夫をとなつるも天地あめつちの

神かみの御水みい火きのこもるまにまに。

天地あめつちの神かみの御水みい火きにうまに生うれたる

吾子わがこは千代ちよに榮さかえ行ゆくらむに



千代ちよ 父母ちちはの恵めぐみのたまくら知らね共ども

何なんとはなしに慕したひぬる哉かな。

カーチンの父ちちの命みことを生うみの親おやと

慕したひて朝夕あさゆふ仕つかへ來きにけり。

朝夕あさゆふになでさすりつつ吾身わがみをば

育そだて玉たまひし親おやぞ戀こひしき

松彦まつひこ 〆さもあらむ、藁わらの上うへから育そだてられ

慈悲じひの温ぬくみに生おひ立たちし身みは。

われよりも育そだての親おやを尊たふとみて

とひ弔とむらひを忘わすれざらまし

松姫 〇 戀したふ、あが脊の君に巡り會ひ

嬉し涙のとめどなき哉

かく親子は歌を以て心の文を述べてゐる。館の外面より俄に聞ゆる瓦をぶちや

けた様な聲、

〇 グワハツ、、、イツヒ、、、

親子三人は此聲に驚き、あたりをキヨロキヨロと見廻した。怪しき笑ひ聲はそれつきりにて屋上を吹き亘る風の音ゾウゾウと聞えてゐる。此聲の主は魔我彦であつた事は前後の事情より伺ふ事が出来る。

(大正一一・一二・一二 舊一〇・二四 松村眞澄録)

第八章 小蝶(一一九八)

まつひこまつひめりやうにん  
松彦松姫兩人は いとし盛りの吾娘

ちよことも  
千代子と共に歌垣に たちて心の誠をば

かたをり  
語らひ居たる折もあれ 突然起る笑ひ聲

かはら  
瓦をぶちあげた其如く ガラガラガラといやらしく

きこきた  
聞え來れる其音色 嫉妬嘲笑交り來て

ふおん  
いとも不穩に聞えけり 娘のお千代は門口を

ひきあそとなが  
引開け外を眺むれば 豈圖らむや魔我彦が

りやうてのみみおさ  
兩手で耳を抑へつつ 腰を「く」の字に曲げ乍ら

さしあしぬきあしに  
差足拔足逃げて行く お千代は後を顧みて

しこ  
やさしき聲をふり絞り 紅葉の様な手をふつて

わら  
ホ、、、、と笑ひ出す お千代の聲に驚いて

あとふりかへまがひこ  
後振返る魔我彦は 眞赤な顔に團栗の

やうめむ  
はぢけた様な目を剥いて 舌を噛み出し腮しやくり

か  
イヒ、、、、イヒ、、、、 勝手な熱を吹きよつて

しつぱり泣いたがよからうぞ 之から俺は蝶蠅別

お寅婆さまの前に出て 一伍一什を物語り

二人の戀を何處までも 妨害せなくちやおかないぞ

覚えてゐよと云ひ乍ら お千代を睨めつけスタスタと

館をさして歸り行く お千代は又もや打笑ひ

「ホ、ホ、魔我彦が 曲つた心の戀衣

今は敢なく破れけり 破れかぶれの負惜み

立派な夫のある人を 神の教にあり乍ら

女房にしようとは何の事 横戀慕も程がある

枉の憑つた魔我彦は 戀に眼を晦ませて

善惡邪正の大道を 踏み外したる淺間しさ

父と母とは昔から 天下晴れての夫婦仲

誰に憚る事あるか 笑へば笑へ諺るなら

何程なりとも諺れかし 私と云ふものある上は

假令たとへ蝶いもり蛸りわけ別わかさまが  
何なんと云いはうとも構かまやせぬ

ウラナイ教けうのお道みちから  
云いうても父ちちはユラリ彦ひこ

末代まつだい日の王わうてん天てんの神かみ  
母ははの命みことは上じやうぎ義ひめ姫ひめ

誠まことの道みちから云いうたなら  
戯たはけた話はなしであるけれど

ウラナイ教けうの道みちとして  
何なんとか彼かとか神かみの名なを

つけて喜よろこんで居ゐる上うへは  
假令たとへ松まつ彦ひこ父ちち上うへが

ユラリの彦ひことなりすまし  
母ははの命みことは上じやうぎ義ひめ姫ひめ

神かみと神かみとの夫ふう婦ふぢやと  
云いつた處ところで何なに悪わるい

蝶いもり蛸りわけ別わかもお寅とらさまも  
とつくに承しやうち知ちの上うへぢやないか

何程なにほど魔ま我がさまがゴテゴテと  
曲まがつて來こやうが矢やも楯たても

二人ふたりの仲なかにたつものか  
ホ、、、あた可笑をかしい

父ちちと母ははとの久方ひさかたの  
睦言むつみことば葉はを外面そともから

立聞たちぎきなして妬やけ起おこし  
悋氣りんきの焰ほのほに包つつまれて

外聞ぐわいぶんの悪わるい門かど口ぐちで  
カ、、、カツと笑わらひ出だす

一丈二尺の禪をば 締めた男のすることか

恥を知らぬも程がある こんなお方が副教主

蝶螭別の片腕と なつてムると思うたら

佛壇の底めげぢやないけれど 阿彌陀が零れて来るぢやないか

オホ、、、オホ、、、 魔我彦さまのスタイルは

何と假令て宜からうか 溝に落ちたる瘦鼠

雪隠に落ちた鶏が 尾羽打枯らし腰曲げて

犬の遠吠え卑怯にも 笑つて逃げ行く淺間しさ

オツトドツコイ惟神 神のお道にあり乍ら

腹立ち紛れに魔我彦の 知らず知らずに悪口を

子供の身として述べ立てた 此世を造りし神直日

心も廣き大直日 道理を知らぬ年若の

娘の云つた世迷言 直日に見直し聞直し

悪言暴語の罪科を 何卒お許し下さんせ

父と母との身の上を  
思ひにあまつて思はざる

脱線振りを發揮した  
乙女心を憐れみて

許させ給へ三五の  
皇大神の御前に

慎み敬ひ詫奉る

松彦「千代子は外へ出たきり、何だか謠つてゐる様だな。うつかりした事を云つて魔我彦さまの機嫌を損つてはならないがな」

松姫「お千代は何分有名な侠客に育てられ、小さい時からスレツからしに育て上げられたものだから、肝玉も太く、年に似合はぬ早熟くさりで随分偉い事を云ひますよ。時々脱線振りをやつて蠚蠚別さまや魔我彦さまをアフンとさせ、ヤンチヤ娘の名を擅にして居ります。それ故私も名乗つてやり度かつたなれど、故意とに隠して居りました」

松彦「お千代には如何云ふ機でお前は會うたのだ」

松姫「あのお寅さまが連れて來たのですよ。同じ侠客同志で心安かつたと見えて、

親も兄弟もない娘だから、ここで立派に育て上げ度いと云つて親切に連れて来たのです。それから私が様子を考へて居れば全く私の娘と云ふ事が分り、矢も楯も堪らず嬉しうなつて来ました。今名乗つては、あの子の爲めによくはないと思ひ、今日が日までも隠して居りました。本當に子供と云ふものは教育が大切ですな。親のない子が泥棒になつたり、大悪人になるのは世間に澤山ある習ひですから、これから十分に氣をつけて教育をしてやらねばなりません。十二や三で婆の云ふ様な事云ふのですから困つて了ひますわ」

松彦「さうだな。子供は教育が肝腎だ。子供と云ふものは模倣性を持つてゐるかから見聞いた事を自分が直に實行したがるものだ。子供は親の眞似をして遊びたがるものなり、大人は亦白い石や黒い石を竝べて子供の眞似をしたがるものだ。これもヤツパリ因碁だらうよ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

松姫「私だつて、貴郎だつて今こそ神様のお道に仕へて人に崇められて先生顔をして居りますが、あの子の出来た時分は随分なつて居ませぬでしたな。あの時の魂で宿つた子だもの、碌な子が生れさうな事がありませぬわ。まだまア不具に生



れて來なんだのが、神様のお恵みですよ」

松彦「然しお千代は何時迄も外に立つて魔我彦だとか、何とか謠つてるぢやないか。困つたものだな。どれお千代を呼んで來う」

と云ひ乍ら松彦は立つて門口の戸を開き外を覗き込んだ。お千代はイーインをしたり、目を剥いたり拳骨を固めて何だか人の頭でも殴る様な眞似して、空中を殴つてゐる。

松彦「これこれお千代、お前、そりや何をして居るのだい」

千代「はい、これはこれは末代日の王天の大神様、上義姫との御再會を祝するため「きつく」姫が岩戸の外で神樂を奏げて居りますのよ。何ぼ娘だつて御夫婦の

久し振りの御對面に御邪魔になつては、ならないと氣を利かして居りますのよ。

今の中にお母アさまと、とつくり泣いたり笑うたり、力一杯お芝居を成さいませ。

お父さまやお母さまのお楽しみのお邪魔になつてはなりませんからな」

松彦「何と呆れたお轉婆だなア。これ、千代サン、そんな斟酌は要らない、「と

つと」と入つておいで」

千代「もう暫くここで遊ばして下さいな」

松彦「遊ぶのはいいが魔我彦が何うだの斯うだのと憎まれ口を叩いちやいけない

よ」

千代「だつてお父さま魔我彦さまは仕方のない男だもの。チツと位恥をかかして

やらねば後の爲めになりませぬわ。男の癖に間がな隙がな、お母アさまの居間へ

やつて来て、味噌ばつかり摺るのですもの、好かぬたらしい。あたい腹が立つて

堪らぬのよ。今日まで辛抱して居つただけれど、お父さまとお母さまが分つた

からは、もう大丈夫。魔我彦位が何ぼ束でやつて来ても大丈夫ですわ。親の光は

七里光ると云ふぢやありませんか。永い間親なしぢや親なしぢやと云つて軽蔑さ

れ、悔し残念を今まで耐つて居つたのですよ。其中でも魔我が一番私を軽蔑した

の。さうだから日頃の鬱憤が破裂して一人口から悪罵が破裂するのですもの。チ

ツとは云はして下さいな。まだこれ位云つた處で三番叟ですわ」

松彦「お前の心になれば無理も無からうが、そこを辛抱するのが神様の道だ。さ

うズケズケと云ひたい事を云つて人に憎まれるものではない。子供は子供の様に

して居ればいいのだよ」

千代 「魔我彦に憎まれたつて構はぬぢやありませんか。お父さまとお母さまに可愛がつて貰ひさへすれば宜しいわ、ねえ」

松彦 「兔も角お母さまが待つてゐるからお這入りなさい」

お千代はニコニコとして松彦の後に従ひ這入つて來た。

松彦 「お千代は随分スレッツからしになつたものだ。困つた事だな」

松姫 「本當に困りますよ。これが私の娘だと大きな聲では云はれないのですもの。

本當に困つちまいます。こんな子が成人したら又博奕打ちの親方にでもなりやせ

まいかと思へば末が恐ろしうムいますわ」

千代 「お母さま、私侠客になるつもりなのよ。弱きを助け、強きを挫き、大きな

荒男を頭で使ひ女王氣取りになり、姐貴姐貴と稱へられて名を遠近に轟かすのが

人生第一の望ですわ。お寅婆アさまを見なさい。侠客だつたお蔭で蝶蜋別さまの

お氣に入りになつて居らつしやるぢやありませんか」

松姫 「これお千代、お前はお寅婆アさまの様になりたいのかい」

千代「あたゐ、お寅婆アさまの様な中途半の女侠客は嫌ひよ。波斯の國、月の國  
きつての大親分にならうと思つてゐるの」

松彦「困つたな、偉いものを生んだものだ。やつぱり種子は争はれぬものかいな」

千代「ホ、ホ、ホ、茄子の種子は茄子、瓜の種を蒔けば瓜の苗が生えます。私はお

父さま、お母さまのヤンチャ身魂から此世に生れ、其上侠客の手に育てられたも

のだもの、斯んな心になるのは當然ですわ」

松彦「お前は神様の宣傳使になるのが宜いか、侠客になるのが宜いか」

千代「神様の宣傳使なんて氣が利かぬじやありませんか。譯の分らぬ婆嬢や時代

遅れの老爺さまや、剛欲の人間や、盲や啞に、不具に病身者、一人だつて満足の

ものが神様の處へ寄つて來ますか。たまたま體の丈夫な男女が來たと思へば精神

上に缺陷のある人間ばかり、そんな人に崇められたとて何が面白うムりませう。

理解の上に崇められたのなら愉快ですが、無理解者から持て囃されたつて何が光

榮ですか。本當に馬鹿らしく消え度くなつて了ひますわ。それよりも侠客になつ

て御覽なさい。裸百貫の荒男、靈肉ともに缺陷のない、男の中の男が集まつて來

て義に勇み、誠を立て、悪人を懲し、まるで神様の様な欲のない、宵越しの錢を使はぬ綺麗薩張りした人間ばかりに姐貴々々とたてられて、此世を送るほど愉快な事がありますか。あたいは何處迄も女侠客になるのが望みです」

松彦「ハ、ハ、ハ、困つたな。親は宣傳使、子は女侠客、どうも反が合はぬ様だ」  
千代「お父さま、大工の子は大工を営み、醫者の子は何處迄も醫者をやらねばならぬと云ふ規則はありますまい。各自に人間には、それ相應の天才があつて凡ての事業に適不適があるものです。自分の天才を十二分に發揮するのが教育の精神でせう。壓迫教育を施して兒童の本能を傷つけ、耕できり揃へた様な團栗の背競べの様な人間ばかり作り上げる様な現在の教育では大人物は出来ませぬぜ。植物だつて、枝を曲げたり、切つたり、針金で括つたり、いろいろと干渉教育を施すと、床の間の置物よりなりますまい。山の谷で自由自在に成育した樹木は成人して立派な柱になりませう。さうだから人間は如何しても天才を完全に發揮させる様に教育させなくては駄目ですわ」

松彦「松姫、お前の云つた通り、何とまあこましやくれた娘だな。随分社會教育

を受けたと見えるな」

松姫 「到底私の手には合はない娘ですよ」

松彦 「さうだな。いや却て干渉せない方がよいかも知れない。一六ものだ。大變

な善人になるか、悪人になるか、先を見て居らねば分るまい。到底親の力では駄

目だ。神様にお任せするが一等だ」

千代 「それが所謂惟神教育ですよ。貴方だつて、いつも惟神々と仰有るのです

もの」

松彦 「アハ、ハ、ハ、ハ」

松姫 「オホ、ハ、ハ、ハ」

千代 「惟神に任せば自ら

松の縁は千代に榮ゑむ

相生の松の下露日を受けて

生え出でにけり味良き茸は」

(大正一一・一二・一二 舊一〇・二四 北村隆光録)

第九章 賞詞(一一一九九)

蛇は寸にして人を呑み、梅檀は嫩芽より香ばしとは宜なるかな。

十二の冬を迎へたる 俠客育ちの乙女子は

修學院の小雀が 千代々々轉る蒙求の

聞き覺えたる白浪言葉 今は包んで云はねども

どことはなしに小ましやくれ 此世の風にもまれたる

老人さへも舌を巻く 水も漏らさぬ言葉つき

末頼もしく又恐ろしく はかりかねてぞ見えにける

八尋の殿に詣でむと お千代は父母の許し得て

ニコニコしながら階段を 氣もいそいそと下りゆく。

後見送りて松彦は 妻松姫に打ち向ひ

「末恐ろしき吾娘 如何なる者となるぢややら

體は生みつけたればとて 魂計りは人の身の

力に生れしものでなし 皆天地の神様の

御息をかためて人となり 此世に生れて來し上は

神のまにまに成人し 思ひの儘に魂の

向ふ處に進ましめ 打ち遣りおくに如くはなし

性にも合はぬ世の中の 業を習はせ麗しき

柱になさむと焦るとも 魂計りは人の身の

左右し得べき事ならず あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして お千代の體靈をば

厚く守らせ給ひつつ 神の御爲め世のために

太しき功績を現はして 此世の中の熱となり



光ともなり鹽となり  
花ともなりて世を救ふ

神のみのりをたわたわに  
結ばせたまへ惟神

三五教を守ります  
皇大神の御前に

夫婦二人が謹んで  
畏み畏み願ぎまつる

朝日は照るとも曇るとも  
月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも  
三千世界の世の中に

子に勝りたる寶なし  
況してや愛しき一人子の

行末思ひ煩ふは  
親の身として當然よ

あゝ松姫よ松姫よ  
汝と吾とはひたすらに

神の御言を畏みて  
吾子の事に心をば

案じ煩ふ事もなく  
神の御前に打ちまかせ

夫婦の息を合せつつ  
世人を救ひ守るべく

心の限り身の極み  
誠一つを立て通し

此世の花と謳はれて  
神の御名を世に照らし

名を萬世に照らすべし

思へば思へば有り難や

親子夫婦の廻り會ひ

小北の山に曲神が

住まうと聞きて来て見れば

思ひも寄らぬ今日の首尾

善惡不二の世の様を

今更思ひ悟りける

醜神達に囚はれし

蠚蝮別や魔我彦も

神の御目に見たまへば

吾等も同じ神の御子

愛憎の區別あるべきや

人の身として同胞を

惡みつ審判きつ惡態に

罵り合ふは天界の

尊き神の御心を

悩ましまつる醜業ぞ

いざこれからは吾々は

蠚蝮別の神柱

魔我彦さまやお寅さま

其外百の司等に

天地の道理を説き明し

言葉を盡し身を盡し

いと穩かに正道を

勧めて神の御恵に

醜の御靈を救ひ上げ

助けにやならぬ吾使命

神の御稜威を蒙りて 心静に司等に  
生言靈の神力を 完全に委曲に味はせつ  
仁慈無限の御教に 仕へまつらむ吾心  
諾ひたまへ天地の 畏き神の御前に  
謹み敬ひ願ぎまつる あゝ惟神々々  
御靈幸倍ましましてよ

と一生懸命に祈つて居るのは松彦である。お千代は階段を下りながら又もや歌ひ出したたり。

常磐堅磐に限りなく 榮ゆる松の松彦や  
緑したたる松姫の 仲に生れた千代の松  
ライオン川の川の邊に 生み落されて産聲を  
上げたる事のゆかしさよ 獣の中の王と云ふ

獅子ししの名なを負おふ川かはの邊へで 産うぶ聲こゑあげしも神かみ様さまの

深ふかい仕し組ぐみがあるのだらう 假たとへ令いづ何れの道みちにせよ

頭かしらとなつて世よの中なかに 心こころの光ひかりを照てらしつつ

普あまねく世よ人びとを救すくふべし 人ひとには百ももの業わざあれど

いとも尊たふとき神しん業げふは 憂うきせ瀨せに落おちて苦くるしめる

憐あはれな人ひとや鳥とり獸けもの 救すくふに勝まさりし事ことはなし

今いま父ちちは母ははの御おん前まへで 白しら浪なみ女をんなになり度たいと

答こたへて父ちちの御み心こころを 探さぐつて見みれば有あり難がたや

汝なれが心こころの向むかふまに 此この世よを渡わたれと嬉うれしくも

宣のらせ玉たまひし言ことの葉はに 情なさけの雨あめは降ふりしきり

嬉うれし涙なみだに吾わが袖そでは 絞しぼるが如ごとくなりにけり

斯かくも開ひらけた父ちちは母ははの 仲なかに生うまれし吾われこそは

三さん千ぜん世せ界かいの世よの中なかに いと勝すぐれたる幸かう福ふく者しや

神かみの恵めぐみと父ちちの恩おん 如何いかでか忘わすれむ千ち代よ八や千ち代よ

ミロクみろくの御代みよの末迄すゑまで

深ふかき惠めぐみを嬉うれしみて

瑞みづの御靈みたまの大神おほかみの

願ねがふ心こころを些まづぶ細さに

神かみの御前みまへに願ねぎまつる

御靈みたま幸倍さちましませよ

月つきは盈みつとも虧かくるとも

曲まがに心こころを曇くもらさぬ

松まつの梢こずゑに宿やどる月つき

氣け高たかき姿すがたを神かみの前まへ

照てらしまつらむ惟神かむながら

山やまより高たかく海うみよりも

神かみと親おやとによく仕つかへ

御旨みむねに叶かなひまつるべく

諾うべなひたまへ惟神かむながら

あゝ惟神かむながら々々

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

星ほしは空そらより落おつるとも

吾魂わがたましひは永久とこしへに

千代ちよの齡よはひの鶴つる巢すくふ

父ちちと母ははとの御前おんまへに

御靈みたま幸倍さちましませよ

と歌うたひながら下くだつてゆく。松彦まつひこ松姫まつひめは窓まどの中なかより涼すずしき此歌このうたを聞きいて初はじめて娘むすめの本心ほんしんを悟さとり、夫婦ふうふうは互たがひに顔見合かほみあはせ嬉うれし涙なみだに暮くれて居ゐる。

松彦 思ひきや氣儘な娘と思ひしに

悟りけるかな誠心を

松姫 皇神の恵の露の露ひて

松の緑も榮え行くらむ

松彦 相生の松の生みてし御子ならば

千代も八千代も榮えますらむ

松姫 小北山尾上に榮ゆる常磐木は

朝日をうけて色勝りゆく

松彦まつひこ 松が枝まつえに千代ちよの眞鶴まなづる巢すをくみて  
八千代やちよの春はるを祝いはふめでたさ

松姫まつひめ 天地あめつちの恵めぐみの露つゆを浴あびながら  
風かぜにたわまず水みづにおぼれず

松彦まつひこ 雨あめに濡ぬれ風かぜに吹ふかれて常磐木ときはぎの  
色いろ優まさりゆく千代ちよの松まつが枝え

松姫まつひめ 妹いもと背せの吾背わがせの君きみに相生あひおひの  
月日つきひ重かさねて松姫まつひめの胸むね。

吾子よと名乗りもあげず小北山

峰の嵐にまかせ居しかな。

さりながらどことはなしに可憐子の

胸にうつるか吾を慕ひし

松彦「垂乳根の父と母とに廻り會ひ

心いそいそ笑み榮えける。

榮え往くまつの神代は千代八千代

恵の風に靡く百草。

魔我彦の司にいつも親なしと

擲掬れたる子ぞ可憐らしき。

年月を忍び耐へし胸の中

破れて魔我の言靈をのりし。



千代子とて朝な夕なに心をば

父と母とにうつしゐたれば。

父母の行衛を求め迷ふ子の

心の奥ぞ哀れなりけり

松姫 名乗らむと思ひし事も幾度か

あれど後先思ひ浮べて。

年に似ぬ賢しき娘の成す業を

見る度ごとに心迷ひぬ

松彦 頑是なき乙女なれども神思ひ

親を思へる心めでたき。

魔我彦の醜の罵り耐へ忍び

來りたるこそ雄々しかりけり。

吾子をば褒めるは馬鹿の骨頂と

人は云へども褒めたくぞなる

松姫 一粒の種と思へば殊更に

いとなつかしく愛らしきかな。

兩親の此歌ごとを聞くなれば

笑み榮えなむ千代の心は。

親となり子と生るるも先の世の

奇きゆかりのあるものと知る。

天地の神の御子を預りて

育て参らす事ぞ樂しき。

吾が生みし子にしあれども天地の  
靈の籠りし珍の生宮

松姫 小北の山の松風は

いと穩かに吹き起り

フサの御國は云ふも更

月の國をば隅もなく

恵の雨を送りゆく

さはさりながら産土の

神とあれます神柱

皇大神の御息を

送らせたまふ御ためぞ

高姫司の開きたる

これの教はさかしけど

怪しき枝葉を切り棄てて

若芽をはやし新鮮の

空気を吸ひて永久の

春の陽氣にまかせなば

再び開く春の花

珍の聖場となりぬべし

蝶蜋別や魔我彦の

心に潜む曲神の

巖の言靈打ち出し

夫婦心を合せつつ 末代日の王天の神  
 上義の姫の名をかつて 誠の教を説き諭し  
 これの靈を天國に 堅磐常磐に救ひ上げ  
 生きては此世の神となり 靈主體從の正業を  
 豊葦原の國中に 宣傳せしめ三五の  
 御稜威を四方に輝かし 此地の上に天國を  
 立てずばおかし惟神 神の御前に相生の  
 松の夫婦が謹みて 千代に八千代に願ぎまつる  
 あゝ惟神々々 御靈幸倍ましませよ

(大正一一・一二・一二 舊一〇・二四 加藤明子録)

第三篇 裏名異審判

第一〇章 棚卸志〔一二〇〇〕

戀こひに破やぶれし魔ま我が彦ひこは 曲まがつた腰こしをピヨコピヨコと  
前後ぜんご左右さいうに振ふり乍ながら 右めで手にて額ひたひを打うち叩たたき  
左ゆんで手の手てのひら上うへに向むけ 乞こじき食きが物ものを貰もらうよな  
其その腰こし付つきも面おも白しろく 腹はら立だたしさと阿あ呆ほうらしさ  
お千代ちよの小女こめ郎らうに笑わらはれて 己おのれクソとは思おもへ共ども  
子供こども上あがりの女をんなをば 相あひて手にするのも氣きが利きかぬ  
大人おとな氣げないと笑わらはれちや 魔ま我が彦ひこ司つかさの男をとこぶり  
箔はくがサツパリ剥はげるだる 勘かん忍にんするのは無ぶ事じ長ちやう久きう

怒るは自滅を招くぞと 蝶鰯別さまが仰有つた

俺も男ぢや腹帯を 確り締めてきばらうか

イヤ待て暫しまて暫し 善と悪との境目だ

腹の蟲奴がムクムクと おこれおこれと教唆する

此仲裁は中々に お寅婆アさまの侠客も

一寸容易に治まらぬ あゝ是非もない是非もない

善と悪とのまん中を 進んで行かうか才、さうぢや

それなら蟲がチと計り 得心致すに違ない

なぞと小聲に囁きつ 豊けちらし棕櫚箒

足に引かけエ、邪魔な 俺の進路を妨げる

戀ふき拂ふ此箒 頼みもせぬに横たはり

箒に箒に憚りさま 俺には俺の覺悟ある

松姫計りが世の中に 決して女ぢやあらうまい

此神殿に集まつた 老若男女の其中に

俺おれの眼まなこに叶かなひたる ナイスが居をるかも分わからない

首實くびじつけん検ささやと囁ささやきつ 演壇えんだんめがけてスタスタと

息いきをはづませ驅かけ上のぼり エヘンとすました咳せき拂ばらひ

コツプの湯ゆをばグツと呑のみ 片手かたてに白扇はくせんひにぎり

卓たくを二三度にさんど叩たたきつつ 一統いっとうの信者しんじやを打うちながめ

眼まなこを光ひからす折をりもあれ 後うしろの方に扣ひかえたる

二八餘にちあまりの優姿やさすがた 一寸美ちよつとうるはしう見みえてゐる

女をんなに視線しせんを集注しふちうし 首くびをかたげて打うちまもる

其そのスタイルは夏なつの蛇へび 蛙かはうを狙ねらふ如ごとくなり

異様いやうの姿すがたに一同いちどうは 合點がてん行ゆかずと打仰うちあふぎ

思おもはず視線しせんは魔我彦まがひこに 一度いちどにドツと集注しふちうし

面おもてをてらし迫せまれ共ども 以前いぜんのナイスは何故なにゆゑか

顔かほをかくしてうづくまり 根ねつから視線しせんを魔我彦まがひこに

向むけよとせないもどかしさ 又またもやエヘンと咳せき拂ばらひ

コツプの湯をばグツと呑み 講談師氣取で扇にて

パチパチ卓を打ち乍ら 皆さま能うこそ御参詣

ウラナイ教の神様の 血縁深き方々よ

此魔我彦が説教を 謹みお聞き遊ばせよ

同じ一堂に集まつて 尊き神の御教を

説かして頂く魔我彦も 又聞きなさる皆さまも

仁慈の神の引合せ 深い御縁があらばこそ

同じ時代に生れ来て 同じ地上に住み乍ら

血縁なくば一言も 尊き神の御教が

聞かれず一生送るもの 何程あるか知れませぬ

之を思へば皆さまは 私と共に神様の

御霊の因縁性来で 集まり来たのに違ない

一樹の蔭の雨やどり 一河の流れを汲むさへも

深いえにしと聞きまする 大慈大悲の神様の



集まり玉ふ聖場で  
げに暖き御恵み

ピヨピヨピヨと雛鳥が  
親の羽がひにつつまれて

一蓮托生勇み立ち  
生育するよな有難き

皆さま御恩を忘れずに  
信と愛との正道を

お盡しなされ神様は  
必ず吾等の靈をば

愛して救ひ玉ふべし  
夫婦の道も其通り

因縁なくは何うしても  
神の生宮造り出す

尊き神業出来ませぬ  
此魔我彦も獨身者

未だ女房はなけれ共  
いよいよ時節が到来し

妹となるべき御信者が  
ここにも一人現はれた

好きでも厭でも神様が  
お定めなさつた縁ならば

決して反きは出来ませぬ  
皆さまそこを合點して

今魔我彦が引はなす  
白羽の征矢が立つた人

否應なしに神様の  
其御心に服従し



どなたに限らず喜んで お受けなさるが神様に  
對して孝行といふものだ あゝ惟神々々  
神に誓ひて魔我彦が 誠の道を傳へおく  
私は之から降壇し 次のお先生はお寅さま  
尊き話をトツクリと 聞いてドツサリ神徳を  
頂きなされや皆の人 なぞと口から出放題  
戀の野望を達せむと 神を松魚節に引出して  
説きまくるこそづうづうしけれ。

蝶蜋別と奥の間で 犬さへ喰はぬ癡話喧譁  
心ゆくまで意茶ついて 腕を抓る鼻ねぢる  
ドスンと倒れて目をまはす 前代未聞の大珍事

亂癡氣騒ぎをやり乍ら  
そ知らぬ顔をよそほひつ

衣服を着飾り襟正し  
神官扇を右手に持ち

紫袴をバサバサと  
音させ乍ら廣前を

臭い顔して悠々と  
進み來るのはウラナイの

第一番の熱心者  
内事の司と選まれし

良婆サンの御登壇  
お寅は悠々壇上に

つつ立ち眼下の群集を  
隅から隅迄見まはして

オホンと一聲咳拂  
錫の瓶から水をつぎ

左手にコップをひつつかみ  
グツと一口呑みほして

今度はエヘンと咳拂  
お寅は口をあけて云ふ

皆さま能うこそ御参詣  
さぞ神様もお喜び

遊ばしまして御神徳  
ドツサリ渡してくれませう

蝶蜋別の教祖さま  
登壇遊ばすところなれど

神界御用が御多忙で  
數多の神の御入來

お酒さけの接待せつたい忙いそしく あつちや向むいてこつちや向むくひまもない

さうだと申まをして神様かみさまの 定めさだめおかれた説教せつけう日び

缺席けつせきするの如何いかなり お寅とらよお前まへは御苦勞ごくらうだが

私わたしに代かつて一席いつせきの 尊たふとき神かみのお話はなしを

一同いちどう様にねもごろに 聞きかしてくれよと御託宣ごたくせん

否いなむに由よしなく此婆このばばも 無調法者ぶてうはふものとは知しり乍ながら

何なにを言いうても神柱かむばしら 蝶いもり蠅わけ別の御命令ごめいれい

お受うけ申まをして今いまここに 登壇とうだんしたよな次第しだいです

抑そもそも神かみの御道おんみちを 信仰しんかうするのは人間にんげんの

僅わづか百年ひゃくねん二百年にひゃくねん 三百年さんびゃくねんの生命せいめいを

安全無事あんぜんぶじに暮くらさうと するよな小ちひさいことでない

萬劫末代まんごふまつだい生き通とほし 夜よるなく冬ふゆなき天界てんかいの

神かみのまします霊れいの國くに 天人てんにん共どもが永久とことはに

不老ふらうと不死ふしを樂たのしんで 榮さかえて暮くらす天國てんごくへ

此世このよを去さつた其その後のちは 直ただちに救すくはれ導みちびかれ

五風ごふう十雨じふうの序ついでよく 風かぜは自然しぜんの音楽おんがくを

無限むげんに奏かなで山やまや野のの 草木くさきは自然しぜんの舞踏ぶたふをば

樂たのしみくらすパラダイス 其その天國てんごくに救すくはれて

千代ちよに八千代やちよに永久とこしへに 時間じかん空間くうかん超越てうえつし

限りも知しらぬ樂たのしみを 受うくるが爲ための信仰しんかうぞや

蠓いもり別わけの教祖けうそは 高天原たかあまはらの靈國れいごくの

神かみの遣つかはせしエンゼルよ 此このエンゼルの言ことの葉はは

此世このよを造つくり玉たまひたる 誠まことの神かみのぢきぢきの

其そのお言葉ことばも同おなじこと 必かならず疑うたがひ遊あそばすな

智慧ちゑなき人ひとの身みを以もつて 尊たふとき神かみの言ことの葉はを

審判さばきするこた出で來きませぬ 假令たとへ蠓いもり別わけさまが

山やまさか逆さかさまに登のほれよと 無理むりなことをば云いはれても

決けつして反そむいちやなりませぬ 只何事ただなにごとも信仰しんかうが

最第一の助け船

此世の泥に漂へる

賤しき吾々人間は

何と云つても神様の

救ひの御手に助けられ

一寸先の見えわかぬ

夢のうき世を安々と

渡り行くのがウラナイの

神の信徒の務めです

どうぞ皆さま此婆の

今云ふことを疑はず

神の教を喜んで

此世に生きて御子を生み

又天國に昇りては

常世の春の榮えをば

樂しむやうに信仰を

強くお勵みなされませ

不束者が現はれて

譯の分つた皆さまに

脱線だらけの説教を

申上げたはすまないが

心をひそめ胸に手を

あてて考へなされるなら

どこか取るべき所がある

老婆の話と却けず

直日に見直し聞直し

大神徳を身と魂に

十分お受けなされませ

くにはるたち  
國治立の大御神

みろくじゃうじゆ  
五六七成就の大御神

あさひ  
旭の豊榮昇姫

ひだり  
左の脇立ユラリ彦

そのつまがみ  
其妻神の上義姫

つづ  
それに續いて義理天上

ひのでのかみ  
日出神は云ふも更

おほみかみ  
リントウビテン大御神

きそよしひめ  
木曾義姫の大御神

おほみかみ  
生羽神社の大御神

いはてるひめ  
岩照姫の大御神

おほみかみ  
日の丸姫の大御神

だいしやうぐん  
大將軍や常世姫

おほみかみ  
ヘグレ神社の大御神

たねものじんしや  
種物神社御夫婦の

みまへ  
御前に謹み良が

たふと  
尊き教を皆さまに

おんれい  
無事に傳へた御禮を

かしこ  
畏み畏み申します

ごいちどうさまさやう  
御一同様左様ならと

ちよつと  
一寸會釋を施して

しんくわんあふぎ  
神官扇を斜にかまへ

くち  
口をへの字に結びつつ

きぬずれ  
ツンとすまして衣摺の

おと  
音サワサワと歸りゆく。

か  
斯かる所へスタスタと

き  
やつて來たのはお千代さま

つぼみ  
蕾の花の優姿



白装束しろしやうぞくに緋ひの袴はかま ぶり分けわ髪がみを背せにたらし

小さき扇あふぎを右手めてに持もち おめずおくせず演壇えんだんに

悠悠いういう登りテールの 下したから顔かほを突つき出して

紅葉もみぢのやうな手てを合あせ 神かみに祈願きぐわんをこめ終をはり

一同いちどうの信者しんじゃに打向うちむかひ コマしやくれたる口元くちもとで

神かみの教をしへを説とき始はじむ 其有そのありさま様の愛あいらしさ

老若男女らうにやくなんによは肝きもつぶし 目めを見みはりつつ乙女子をとめごの

口くちの開ひらくを待まちゐたり 満座まんざの信者しんじゃ一同いちどう様

私わたしは神かみの神徳しんとくを 力ちからに一口ひとくちお話をはなし

覺束おぼつか乍ながら皆様みなさまに 言ことときさして貰もらひます

此世このよの中なかで一番いちばんに 尊たふとい者は神かみの愛あい

それに續つづいて親おやの愛あい 愛あいがなければ世よの中なかは

殺風景さつふうけいの修羅場しゆらぢやうり裡 地獄ぢごく畜生ちくしやう餓鬼がき道だうが

忽たちまち出現しゆげん致いたします 我わたしは不運ふうんな生うまれつき

父と母との行方をも

知らずに十二の今日迄も

人の情に助けられ

此世を送つて参りました

山より高き父の恩

海より深き母の恩

育ての親の高恩は

これにもましていや高く

ますます深きものですよ

ウラナイ教の神様に

お参りなさるお寅さま

いと親切に私を

これの聖場に導いて

尊き神の御教を

心に刻んで下さつた

其お恵みは吾身をば

生み玉ひたる父母に

百倍まして有難い

御恩と仰いで居りまする

茲に竝んだ皆様も

父と母との御恩をば

いと有難く思ふなら

それにもましていや高く

ますます深き神の恩

お悟りなさるに違ない

さは去り乍ら神様に

如何なる愛がゐます共

如何なる力がおはす共

其神徳を吾々に  
取次ぎ遊ばす神司

なけねば縁は結ばれぬ  
之を思へばウラナイの

蝶蜷別の教祖さまは  
吾等を神に導いた

御恩の深き神柱  
如何なることをなさつても

親と主人は無理をいふ  
ものだと諦めをればよい

とは云ふものの教祖様を  
大事と思ふ人あらば

面を冒して教祖さまを  
一つ改心なさるよに

にがい言靈打出し  
御恩を返して下さんせ

それが誠の信者さまの  
神にささぐる務めぞや

私がかんなこといへば  
至仁至愛の教祖さまを

悪口申すと思召せど  
決してさうではありませぬ

天地の神が澤山に  
肉のお宮に出入りを

なさると甘い理屈つけ  
朝から晩までドブ酒を

呑んで胃腸を損害し  
顔の色まであせはてて

青白うなつて居りまする お酒を呑めば顔色が

赤くなるのが當前 蝶蜋別の神さまは

呑めば呑む程青くなる これは全くアル中の

證兆なりと見なすより 外に判断つきませぬ

酒ほど悪いものはない 徳利は踊る膳はとぶ

ふすまはこける杯は 木端みぢんにふみ砕く

らんちき騒ぎが起るのも 酒と悋氣のいたづらだ

蝶蜋別は云ふも更 魔我彦さまやお寅さま

口の先ではエラ相に 立派なことを云うたとて

言行一致でない上は どうして權威がありません

知らぬお方のお耳には 殊勝らしくも聞えませうが

其内幕を知悉した 私に層一層

滑稽至極に聞えます あゝ惟神々々

神が表に現はれて 善を表に標榜し

ひそかに悪を敢行し  
此世を欺く曲人を

大鐵槌を下されて  
いましめ玉へ天地の

恵の神の御前に  
謹み敬ひねぎまつる

朝日は照る共曇る共  
月は盈つ共虧くる共

星は天より墜つる共  
神の教は皆さまよ

決して捨てちやなりませぬ  
假令教祖の行ひが

神の心に反く共  
曲津の器であらう共

此世の元の神様に  
決して變りはありません

此世に形を現はした  
人をたよりになさらずに

肉眼にては見えざれど  
確にゐます主の神を

敬ひ愛し且つ信じ  
たゆまず屈せず信仰を

勵ませ玉へと乙女子の  
をさなき身をも省みず

一同に傳へまゐらせる  
あゝ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ。

とお千代は兩親に會つた嬉しさに勇氣百倍し、小ざかしくも思ひ切つて、大膽に無遠慮に日頃の所感を残らずさらけ出してしまひ、悠々として壇を降り、一同に輕き目禮を施し乍ら、松姫の館を指して徐々歸り行く。

お千代の乙女の口から遺憾なく曝露された蠚蠚別教祖の醜體を始めて耳にした信者も少くなかつた。何れも案に相違な面持で、ガヤガヤとぞよめき渡り、蠚蠚別、お寅婆アさま、魔我彦、お千代などの人物比較論に花を咲かした。群集の中より赤ら顔の四十男ムツクと立上り、

「皆さま、私は酔どれの熊公といはれ、ウラル教の信者でムいました。そした所、ウラル教は御存じか知りませぬが、呑めや騒げよ一寸先や暗よ……といふおつな教でげす。随分朝から晩までデツカンシヨ デツカンシヨで山を呑み、先祖ゆづりの田畑を呑み、家を呑み、倉を呑み、何もかもスツカリコンと未練の残らぬ様に、胃の腑のタンクに格納して了つたのです。餘り酒を呑むので、女房は子供をつれて、親の里へ歸り、酔どれの熊公も獨身の淋しさ、フトしたことから、人に誘はれてウラナイ教に入信致しました。ウラナイ教は誠に行ひのよい教で、天下

太平上下一致、争ひもなく恨もなく、又教祖様はお酒が好きださうだが、少しも辛抱しておあがり遊ばさず、自分の口へ入れても皆神様がおあがりになり、自分は一滴もおあがりにならぬものと聞いてみました。そして所が豈圖らむや、今のお千代さまのお話に承はれば、朝から晩迄神様を出汁にズブ六に酔うてムるといふ事です。子供は正直だから、滅多に間違はありますまい、エ、馬鹿らしい今までだまされて居つたと思へば腹が立ちますわ、私は別に人間を信仰してるのでないから、神様を信じて居れば能いといふ様なものの、神の御取次たる教祖其他の幹部の役員が、朝から晩迄、人の膏血を絞つて、酒にくらひ酔つてゐるとは誠に怪しからぬではムらぬか、これでもあなた方は此教を信仰致しますか。口で何程立派なことを云つても、行ひの出来ぬ先生を手本とすれば、ヤツパリ品行が悪うなります。お前さま達も大切な息子や娘をお持ちでせうが、こんなこと教へられうものなら、其害の及ぶ所、一家は申すに及ばず、天下の害毒になりますよ。と奥の間に聞えよがしに大聲に呶鳴り立ててゐる。お寅は此聲を聞つけ慌ただしく走り來り、

お寅「モシモシ熊さま、お腹立は御尤もだが、何を云つても子供の申したこと、取上げるといふことがありますかいな。あんたハンも立派な男でゐ乍ら、あんな小娘の云ふことを眞に受けて怒るなんて、へへへへ、本當にやさしい方だなア、こんな優しい男だつたら、私もちと若ければ一苦勞するのだけれどなア、本當に憎らしい程可愛いワ」

と平手でピシヤピシヤと頬邊をなぐりつける。

熊公「コリヤ、ナ、何をさらす、失禮でないか、俺の頬邊を叩きやがつたな」

お寅「ホへへへ、餘り意氣な男だから、可愛さ餘つて憎さが百倍、知らぬ間に手が出たのよ、サアそんなことを言はずに、蠚蠚別様の所へ来て下さい。そすりや神様がお上り遊ばすのか、教祖がおあがり遊ばすか、分りませう。其上で皆様に證明して上げて下さい。お前さまも酒に苦勞したお方だから、一寸御覽になつたら、忽ち眞偽がお分りませう」

熊公「ウン、さう言へば分つてる、よし、そんなら調べて來う。ヤア皆の信者さま、どうぞゆつくりとおかげを頂きなさいませ。今熊公が申上げたこと、間違つ



てゐるかゝらないかといふことを、今お寅さまに従いて教祖の居間へ進み、検査をした其上で、もしも私の云つたことが間違つてゐたら取消しますし、間違つて居らなかつたら、信仰をおやめなさつたが宜しからう、併し乍ら信仰は、貴方方の自由だから、強要は致しませぬ」

お寅「コレ熊さま、野暮なことをいふものだない。サアゆきませう」  
と怪しき視線を熊公に注ぎ、手首を一そ力入れてきつと握り、引たくるよにして、サツサと此場を立つて行く。あとには數多の老若男女、口々にザワザワとぞよめき立つてゐる。

(大正一一・一二・一二 舊一〇・二四 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・一一 王仁校正)

教主の間には蝶螭別、魔我彦、お寅、熊公の四人は胡坐をかき、無禮講の體でグブリグブリと酒汲み交はして居る。無性矢鱈にお寅は熊公にきつい酒をすすめる。下地は好きなり御意はよし、何條以て斷るべき、喉の蟲がクウクウと催促して堪らない。猫が鯉節に飛びついた様、初めの權幕何處へやら、俄に惠比須顔となつてグイグイと、會うた時に笠脱げ式でやり初めた。熊公が群集の中で大聲を出し蝶螭別の酒を攻撃したのも、心の底は何とか云つて甘酒にありつかうと云ふ算段だつたから渡りに舟、得手に帆と云ふ好都合だ。熊公はソロソロ舌が纏れ出し銅羅聲を出して唄ひ出した。

飲めよ騒げよ一寸先や暗よ 暗の後には月は出る

つきはつきぢやが酒づきぢや チヨビチヨビ飲むのは邪魔臭い

土瓶の口からデツカンシヨ 胃の腑のタンクへ直輸入

直に雪隠へ卸賣 面白うなつておいでたな

酒は酒屋に、よい茶は茶屋に 若いナイスは此館

お寅<sup>とら</sup>婆<sup>ば</sup>さまぢや一寸<sup>ちよつと</sup>古い  
 それでも蠓<sup>いもり</sup>蠓<sup>わけ</sup>別<sup>べつ</sup>さまが  
 細<sup>ほそ</sup>い目<sup>め</sup>をして抱<sup>いだ</sup>きつき  
 吸<sup>す</sup>ひつき泣<sup>な</sup>きつき獅<sup>し</sup>噛<sup>が</sup>みつき  
 笑<sup>あつ</sup>壺<sup>ぼ</sup>に入<sup>い</sup>つてム<sup>こ</sup>るのだ  
 ドツコイシヨ、デツカンシヨ  
 應<sup>おう</sup>對<sup>たい</sup>づくなら仕<sup>し</sup>様<sup>やう</sup>がない  
 酒<sup>さけ</sup>を飲<sup>の</sup>むなと神<sup>かみ</sup>さまが  
 野<sup>や</sup>暮<sup>ぼ</sup>の事<sup>こと</sup>をば仰<sup>おつ</sup>有<sup>し</sup>るまいぞ  
 御<sup>お</sup>神<sup>み</sup>酒<sup>き</sup>上<sup>あ</sup>らぬ神<sup>かみ</sup>はない  
 此<sup>この</sup>熊<sup>くま</sup>公<sup>こう</sup>も之<sup>これ</sup>からは  
 蠓<sup>いもり</sup>蠓<sup>わけ</sup>別<sup>べつ</sup>のお側<sup>そば</sup>づき  
 お酒<sup>さけ</sup>の御<sup>ご</sup>用<sup>よう</sup>なら何<sup>い</sup>時<sup>つ</sup>迄<sup>まで</sup>も  
 天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>の神<sup>かみ</sup>は云<sup>い</sup>ふも更<sup>さら</sup>  
 八<sup>や</sup>岐<sup>また</sup>大<sup>を</sup>蛇<sup>ろち</sup>や醜<sup>しこ</sup>狐<sup>ぎつね</sup>  
 鬼<sup>おに</sup>でも狐<sup>きつね</sup>でも狸<sup>たぬき</sup>でも  
 何<sup>なん</sup>でも構<sup>かま</sup>はぬやつて來<sup>こ</sup>い  
 お前<sup>まへ</sup>の代<sup>か</sup>りに俺<sup>おれ</sup>が飲<sup>の</sup>む  
 假<sup>た</sup>令<sup>と</sup>狐<sup>ぎつね</sup>が飲<sup>の</sup>んだとて  
 矢<sup>や</sup>張<sup>はり</sup>俺<sup>おれ</sup>が喉<sup>のど</sup>通<sup>とほ</sup>る  
 其<sup>その</sup>時<sup>とき</sup>や俺<sup>おれ</sup>も甘<sup>うま</sup>いぞや  
 デツカンシヨ　　デツカンシヨ  
 『

魔<sup>ま</sup>我<sup>が</sup>『こりやこりや熊<sup>くま</sup>さま、そんな大<sup>おほ</sup>きな聲<sup>こゑ</sup>で唄<sup>うた</sup>ふものぢやない。  
 大<sup>おほ</sup>廣<sup>ひろ</sup>前<sup>まへ</sup>へ聞<sup>き</sup>え  
 るぢやないか。チツと氣<sup>き</sup>を利<sup>き</sup>かしたら如何<sup>どう</sup>だ』

熊公「折角機嫌よう飲んだ酒を何ゴテゴテ云ふんでえ、黙つて盗んで酒を呑む様にチヨビリチヨビリと飲んだつて何が面白い。酒を飲めば酔ふにきまつてる。酔うたら騒ぐにきまつてる。お前は結構な酒を殺して飲めと云ふのか。エーン、なア蠓蠓別さま、熊公の云ふ事が違ひますかな」

蠓蠓「アハ、ハ、チツとも違ひはせぬ」

熊公（大聲）「それ見たか魔我彦、教祖様が違はぬと仰有つたぢやないか」

魔我彦は青くなり、

魔我「これ、熊さま、何ぼどうでも體裁と云ふ事を考へて呉れなくちや此城がも

てぬぢやないか」

熊公「酒に酔うたものに體裁も糞もあるものかい。體裁を作らうものなら酒を飲まれぬぢやないか、さうすりやウライ教には裏がないと云つたが矢張裏があるのだなア。表には鹿爪らしい事を吐き乍ら何でい。奥へ這入れば朝から晩まで甘酒に酔ひつづれ、神の教は其方除けにして肝腎の教祖さまからお寅婆アさまと意茶つき喧嘩をしたり、抓つたり叩いたりするのだからな、呆れたものだ」

お寅とら「これ熊くまさま、お前は悪酒わるざけだから本當ほんたうに困こまつて了しまふよ。チツとは教祖けうそ様の御ご心中んちゆうも察さつし俺わしの心こころも酌くんで呉くれたら如何どうだい。結構けつこうな酒さけを頂いたき乍ながら、ここの迷惑めいわくになる様やうの事ことを云いつても宜よろしいのか。チツとは義理ぎりと云いふ事ことも考かんへて下くださいな」

熊公くまこう「ワツハ、、、そらア、何なにを吐ぬしゃがるんだい。不義理ふぎりの天上てんじやう、日出ひ出で神様のかみさまの御入來ごじゆらいだ。エーン、こりやお寅とら、貴様きさまも大分だいぶんに老耄おいぼれたねえ、浮木うきぎの森もりの女俠客をんなけふかく、丑寅うしとらと云いつたら一時いちじは飛たつ鳥とりも落おつ様やうな豪勢かうせいな勢いきほひだつたが、何時いつの閒まにやらウラナイ教けうに沈没ちんぼつしてフニヤフニヤになつて了しまつたぢやないか。こりやお寅とら、昔むかしの事ことをまだ忘わすれては居ゐめえな。エーン、此熊公このくまこうはお前まへに對たいしては十分じふぶん駄々だを捏こねるだけの權利けんりが具備ぐびしてるのだ。蝶螭いもりわけ別の前まへだから素破すつぱ抜ぬくのは廢よしとくが、ここ迄まで云いつたら蝶螭いもりわけ別わけだつて馬鹿ばかでない限りかぎは大抵たいてい合點がてんが行ゆくだらう。此熊公このくまこうが信者しんじやの中なかへ紛まぎれ込み、お寅とらの行衛ゆくゑをつきとめむと腕うでに擦よりをかけ待つて居ゐるのも知しらずに聖せい人面じんづらを列つらねて、よくもまア演壇えんだんに立たちやがつたな。虎狼野干とらほかみやかんは化くわして卿相雲客けいしやううんかくとなるとは、よく云いつたものだ。世よの中なかは比較ひかく的に馬鹿者ばかもの多おほいものだなア。アツハ、、、」

お寅「これこれ熊さま、あまりぢやありませんか。云ひ度い事があるなら後でしつぽり聞かして下さなせ。蠓蝨別の前ぢやムいませぬか」

熊公「アハ、ハ、ハ、チツと都合が悪いかの。其方に都合が悪けりや此方に都合がよい。其方に都合が好けりや此方の面工が悪い。何でも彼でも世の中の事は上つたり下がつたり唐臼拍子に行くものだ。二世を契つた此熊公が、それ丈け煩さいのか。うんよし、大方貴様は蠓蝨別と太え事をやつてゐやがるのだらう。サア有態に白状せい此儘には歸らないぞ、エーン」

蠓蝨「熊さま、何卒お寅さまを貴方の御自由に連れて歸つて下さい。決して私には未練はありませんからナア」

お寅「これ蠓蝨別さま、貴方は何と云ふ水臭い事を仰有るのだ。私にも量見がありますぞや。又鼻を捻て上げませうか」

と立ち上り強力に任せて蠓蝨別の鼻を捻やうとする。蠓蝨別はお寅の鼻掴みには懲々してゐるから両手で顔を隠し俯向いて疊にかぶりついたまま、

蠓蝨「熊さま助けて呉れえ助けて呉れえ」

と恥はぢも外聞ぐわいぶんも忘れて叫さけんでゐる。熊公くまこうはお寅とらの首筋くびすぢをグツと握にぎり後うしろへ引ひいた。途とた端んにお寅とらはドスンと尻餅しりもちを搗つく。

お寅とら「アイタ、何なんとひどい事ことをする男をとこだ事こと、これ、熊くまさま、お前まへここを何なんと心得こころえて居ゐる。ここは神様かみさまのお集あつまり遊あそばす聖場せいぢやうでムんすぞえ、斯かやう様な處ところで吠鳴どなつたり、人ひとを轉こかしたり、そんな亂暴らんぼうをなすつちや濟すみますまい。チツと心得こころえて下くださんせえな。これ魔我彦まがひこ、何なにをグツグツして居ゐるのだ。早はやく末代まつだい様に此この事を申まをし上げ熊くまさまの亂暴らんぼうを喰くひ止め追おつ歸かへして下くださいな」

熊公くまこう「アハ、お寅とらの奴やつ、到頭とうとう弱よわりよつたな。蠚いもり蠚り別わけと朝あさから晩ばんまで意茶いちやつき喧譁けんくわをして居ゐる癖くせに、こんな聖場せいぢやうで喧譁けんくわする事ことアやめて呉くれえなんて、ケ、ケ、ケ、尻けつが呆あきれるわい。いや、チヤンチヤラ可を笑かしいわい。ワツハ、ケ、ケ、ケ、」

お寅とら「これ熊くまさま、頼たのみだから機嫌きげんようお酒さけを飲のんで、今日けふは歸かへつて下くださいな。そして又またお酒さけが飲のみたくなつたら來きて下ください。さうしておとなしう飲のんで下くださつたら酒位さけくらゐは何程いくらでも振舞ふるまつてあげますから」

熊公くまこう「振舞ふるまつてくれるとは、そりや怪けしからぬ、夫むつとが女房にようぼうの處ところへ來きて振舞ふるまふも、

振舞はぬもあつたものかい。貴様は俺を置去りにして浮木の森迄逃げ失せ、柄にもない女侠客となり澤山な野郎共を飼ひやがつて、虚勢を張つてゐよつただないか。俺は貴様に宅を飛び出され、浮木の村に間誤つてゐる時、幾度門口へ行つたか分らない。その時も腐つた様な親爺を持ち、此熊さまを多勢の力を借つて袋叩きに致した事が幾度もあるぢやないか。貴様の亭主としてゐた田子公の奴、俺の當身を喰つて、それが病み付となり脆くも國替をしたと、噂に聞いた時の嬉しさ、いや愉快さ、溜飲が三斗ばかり下りた様にあつたわい。ウワツハ、、、も今日となつては貴様も世の末だ。婆嬢や子供を相手に致し、お寅婆サンと威張つてゐる様では此熊公に指一本觸える事も出来やしめえ。俺も男だ。女房に肱鐵を喰らはされて再び女房になれとは云はねえ。いや頼まれても此方からお断りだ。然し乍ら魚心あらば水心だ。何とか挨拶をして貰ひ度えものだなア

お寅「挨拶をせえと云ふのはお金でも強請らうと云ふのかい。お金なんか、神様の道にありやせないわ」

熊公「アハ、、、惚けな惚けな、これ丈け太え屋臺骨をしゃがつて何程ないと云



つても金の千兩や萬兩は目を剥いて居る筈だ。手切れに綺麗薩張と出して貰ひませうかい。蠓蝮別だつて俺の女房を自由にしたかせぬか知らぬが斷りなく使つて居るのだから、否應は云えまい」

と兩肌を脱ぎ入墨だらけの腕を振りまはし、生地を現はして白浪言葉を頻りに連發しだした。

魔我「お寅さま、斯うなつちや容易に片づきますまいぜ。吝な事云はずに、それ、あの一萬兩の金を渡したら如何です。常時こんな事云つて來て貰うては煩いぢやありませんか」

お寅「これこれ魔我彦、お前夢でも見たのか。何處にそんな大した金がありますか。萬兩と云つたら庭先に赤い實のなつてる植木位なもんだよ。しやうもない事云つて困るぢやないか。慎みなさい。假令あつた處でここは蠓蝮別のお館だ。私の自由になりますか」

熊公「アハ、ハ、ハ、到頭一萬兩の所在を見つけて出した様なものだ。サアもう斯うなる上は、一萬兩だ、非が邪でも一萬兩だ。此熊さまを追拂ふのもヤツパリ一萬兩

だ。煩さい因縁を切つて貰ふのもヤツパリ一萬兩だ」

お寅「これこれ熊さま、一つ云ふては一萬兩、一つ云ふては一萬兩とそりや何を

云ふのだい。あんまり馬鹿にしなさんな、最前からお前の云ふ事を聞いて居りや

五萬兩も要るぢやないか。お前に一萬兩でも一錢でもあげる金があれば、八幡さ

まに奉納致しますわいな。そんな欲な事を考へてをると八萬地獄に落ちますぞや

熊公「八萬地獄所か十萬億土の旅立を喜んで居る此熊公だ。熊公と思や正真正銘

の悪魔公だよ。悪魔拂ひに一萬兩は安いものだ。サアサアキリキリ拂うたり拂う

たり拂ひ給へ、清め給へだ」

お寅「そんなヤンチャを云はずにトツと歸つて下さい。お頼みだから」

熊公「そんなら五萬兩は割引して一萬兩にまけておく。一萬兩は安いものだらう

お寅「好かぬたらしい。これ熊さま、何を云ふのだい。俺が此ウライナイ教へ入信

した時、貯めて置いた一萬兩の金で此通り立派なお宮を建てたのだ。其一萬兩が

欲しければ、あの石の宮さまを懐へ入れてなつと、擔いでなつと勝手に歸んで下

さい。お金なんぞ、ありやせないよ」

蝶蝮別は、小さい聲で舌をもつらせ乍ら、

蝶蝮「おいお寅、煩いから有る丈け持つて歸なしたらどうだ。そして今後は文句は云はないと書付けをとつておくのだな」

お寅「これ蝶蝮別さま、何と云ふ氣の弱い事を仰有るのだ。生命と懸替の、あの一萬兩を渡す位なら死んだがましぢやないか。何うしてお前さまと私と此先やつ

て行くのだい。黙つて居なさい。溝壺へ捨てる金が有つても熊さまなんかへ渡す金はありませんぞ。こんな處へ又ツケリコとやつて來て思はぬ苦勞をかけやがつ

て、これ熊公、此お寅さまを何と心得てる。浮木の森の女侠客丑寅サンと云つたら、へん、憚り乍ら此姐さまだ。お前達の様な一羽鷄に脅かされて屁古垂れる様

な姐さまぢやありませんぞや」

と棄鉢氣分になり、入墨のした腕をグツと捲り、一方の足を立膝し乍ら泡を吹き飛ばし唼鳴りつけた。熊公は猛り狂うてお寅婆の髻を引つ掴み力限り引張りまは

す。蝶蝮別、魔我彦は此權幕に肝を潰し、奥の間の長持の中へ身を隠し、慄ひ戦いてゐる。此聲を聞きつけて萬公、五三公、アク、タク、テクの五人はドヤドヤ

と走り來り、

萬公「待つた待つた、待てと申せば待つたが宜からうぞ」

五三「何事の纏れか知らねえが、此場の仲裁は此五三公が預かりやせう」

と故意とに白浪言葉を使つて嚇しにかかる。

熊公「アハ、小童子野郎が斯んな處へ飛び出し、俺達の喧嘩を仲裁するとは

片腹痛え、彌之助人形の空威張り、そんな事に屁古垂れて、酔泥の熊公のお顔が

立つと思ふかエーン、小童子武者の出る幕ぢやない。すつこんでムれ」

アク「あいや酔泥の熊公とやら、暫く待つたがよからうぞ。吾こそはバラモン教

の大目付片彦將軍でムるぞ。何を血迷うて斯様な處へ亂暴にやつてうせたか、怪

しからぬ代物だ。おい家來共、大自在天より授かりし金縛りの妙法を以て此亂暴

者を手痛くふん縛れ」

五三「もしもし片彦將軍様、お腹立ちは御尤も乍ら様子も聞かず、ふん縛るとは

無慈悲と申すもの、何卒イルナの俠客五三公サンに此場はお任し下さる譯には行

きますめえか」

アク「飽迄憎き奴なれど、當時賣出しの侠客の其方が申す事、無下に斷る譯にも行くまい。そんなら其方に此場の解決を一任する。萬一ゴテゴテ吐すに就いては容赦はならぬぞ」

五三「ハイ、委細承知仕りやした。私も當時賣出しの侠客、命に代へても此場の落着をつけて御覽に入れやせう。萬々一行かねば此場で割腹致して見せやせう。さすれば貴方の御自由に御成敗遊ばしやせえ」

アク「然らば暫く別間に控へて居る。萬公、タク、テク、餘が後に從つて來い。五三公親分、さらばでムる」

と肱を張り悠々として笑ひを忍び乍ら大廣間さして立つて行く。

お寅「これはこれは片彦將軍様、尊き御身を以て入らせられました。これと申すも神様の御神徳、いやもう有り難うムいます」

五三「ハルナの國に時めき給ふ大黒主の右守の司と聞えたる鬼春別將軍の部下、片彦將軍は、今や數萬の軍勢を引き率れ齋苑の館へ進軍の途中、小北山の神徳、

【いやちこ】なりと聞き戦勝祈願のため、浮木の森に軍隊を留め、少しの部下を

ともな 伴ひ参詣致したものの、神のお示しによればアバ摺れ男の熊公なるもの、神の司の  
いもりわけどの 蝶蜋別殿、其他お寅殿に向つて無體の脅迫を試みしと聞き、取るものも取り敢ず、  
ここ 此處に来て見れば、不都合千萬な此始末、と片彦將軍様が靈を以て此五三公が靈  
につた 傳へ給うた。片彦將軍の御身魂が宿つた此五三公様が仲裁に立つても、よもや  
ふそく 不足ぢやあるめえ、のう、熊公とやら  
くまこう 熊公「ハイ、貴方の如き尊きお方に仲裁の勞を煩はし、誠に光榮に存じます。い  
やもう今日限りスツパリ心を改め、今後は決して此館へ足踏みを致しませぬ。何  
ぞごあんしんくだ 卒御安心下さいませ」  
いそ 五三「早速の納得、いや片彦將軍の神靈も五三公の哥兄もズンと満足いたした。  
つ 就いてはお寅殿、蝶蜋別殿、わつちも侠客だ。片手落ちの事はやられねえ。當座  
わらぢせん の草鞋錢だと思つて此熊サンに一千兩の金をスツパリとお渡しなせえ。蝶蜋別さ  
まもこれで解決つくならば安いものだらう。ほんの掴み錢だ。アハ、ハ、ハ、」  
とら お寅「親方さまの御仲裁、何しに背きませう。私も、もとは女侠客、侠客の意地  
はよく呑み込んで居ります。そんなら貴方のお顔に免じて千兩の金を渡しますか

ら、今後は熊さまが何にも云つて来ない様にして下さいませ」

五三「いや承知致しやした。流石は姐貴だ。スツパリしたものだ。おい熊公、如何だ。これで文句はあるめえな」

熊公「いやもう有難うムります。千兩の金さへあれば五年や十年の甘え酒が頂けます。いやもう有難うムりやした」

お寅は次の間から小判を千兩とり出し、

お寅「さあ五三公の親分さま、これを引替へに證文を取つて置いて下さいませ」

五三「アハ、證文をとるのは未來の人間のする事だ。男が一旦約束をした事は萬古末代磐石の如く決して動くものぢやねえ。熊公如何だ」

熊公「はいはい、私も男です、如何してゴテゴテ申しませう。おい、お寅、安心して呉れ。有難え、お前が、ありや、こりや無けりや、こりや、うまいお酒が飲めるのだ。ちヨイ ちヨイ ちヨイの頂戴だ」

と兩手を合せ掌を仰向けにして上下へ揺つて居る。

五三「それ、千兩だ。確に受取れ」

熊公くまこう「ハイ、有難ありがたう。萬古末代まんごまつだい、あんたの御恩ごおんは忘れわすませぬ。そしてお寅とらの事ことは只今ただいま限り忘れわすれます」  
と云いふより早くはや懐ふところに捻ねぢ込み長居ながあは恐れおそと言いはぬばかりトントントンと坂道さかみちを矢やを射いる如ごとく歸かへり行ゆく。

(大正一・一二・一二 舊一〇・二四 北村隆光録)

第一章 喜苔歌きたいか (一一二〇二)

小北こぎたの山やまの聖場せいぢやうは 月次祭つきなみさいも相濟あひすんで  
腰こしの曲まがつた魔我彦まがひこは 先頭せんとういち一いちに登壇とうだんし  
澄すました顔かほで神德しんとくの 話はなしをべらべら述のべ終をはり  
意氣揚々いきやうやうと下くだりゆく 後あとへ登のぼつたお寅とらさま



懸河の辨舌滔々と 矢玉の如くまくしたて

蝶蝮別の行を 神にまかして辨護なし

信徒達の疑を 晴らさむものと村肝の

心を盡し言靈の 車を甘く迂らして

悠悠壇を下りゆく 後に續いて乙女子の

凜々しき姿壇上に 轟と立つを眺むれば

思ひも寄らぬお千代さま 紅葉のやうな手をうつて

神に祈りをかけまくも 畏き神の御恵の

おろそかならぬ事の由 一應詳しく述べ終り

蝶蝮別や魔我彦や お寅の行状悪くとも

決して神の大道を 捨ててはならぬ神様と

人とを別に立て別けて 信仰なされと圓滑に

生言靈を打出せば 數多の信者は手をうつて

喝采場裡に降壇し 小さい姿をかくしけり

此時このとき信者しんじやの眞中まんなかに 仁王にわうの如ごとく突つつ立たつて

唼ど鳴なりかかけたる男をとこあり ウラナイ教けうの内ない幕まくを

聲こゑを限かぎりにままくしたて 曝ばく露ろななさむと狂くるひ立たつ

其その聲こゑ高たかく教けう祖そ殿でん 螻い蝮り別わの耳みみにいり

お寅とびも驚おどろきかかけ来きたり 猛たけり狂くるへる荒あ男らをとこ

ためためつつすかかしつ手てを曳ひいて 己おのが居ゐ間まへと連つれ歸かへり

酒さけや肴さかなを澤たく山さんに 前まへに竝ならべて振ふる舞まへば

男をとこは忽たちち目めを細ほそめ 右め手てに額ひたひを打うちなながら

グイグイグイと飲のみ干ほしぬ 醉よひが廻まつてそそろそろと

白しら浪なみ言こと葉ばの卷ま舌じたで 此この方かたを

どなたと思おもうて居ゐやがるか 音おとに名な高たかき熊くま公こうだ

貴き様さまは俺おれを振ふりすすてて 浮う木きの里さとに身みをかくし

性しやうにも合あはぬ侠けふ客かくと ななつて賭と場ばをば開かい帳ちやうし

數あ多またの乾こ兒ぶんを引ひき具ぐして 羽は振ぶりを利きかして居ゐやがつた

白浪お寅であらうがな

餘り馬鹿に致しよると

貴様の内幕素破抜こか

俺は貴様に酌させる

権利は十分具備してる

蠨蛸別と手を曳いて

こんな處に神様を

表に榮耀榮華をば

盡して人の膏血を

絞つて居やがる曲津神

サアこれから熊公が

挺でも棒でも動かない

何とかほどよい挨拶を

やつて呉れねば納まらぬ

如何に如何にと詰めよれば

蠨蛸別は仰天し

慄ひ戦き居たりける

お寅は柳眉を逆立てて

こりやこりや熊さま何を云ふ

お前のやうな酒泥棒

誰が相手になるものか

放蕩無頼の男だと

愛想盡かして逃げたのだ

男が女に捨てられて

外聞悪いとも思はずに

よこのこのこと來られたなア

サアサア早ういになされ

神のお道の邪魔になる

早く早くと促せば 熊公は膝を立て直し

一萬兩の金を出せ それが嫌なら何時迄も

此熊公の蟲が癒えぬ これ程立派な家立てて

金の萬兩や五千兩 ないと決して云はさぬぞ

早く渡すか さもなくば 俺の女房になるがよい

お寅返答は如何にぞと 喚く折しも萬公や

五三公、アク、テク、タク五人 この物音に驚いて

足音せわしくはせ來り 何れの方が知らねえが

俺は此頃名を賣つた 白浪男の五三公だ

此場は俺に任せよと 白浪言葉を竝べたて

しやしやり出でたるをかしさよ 熊公は目玉を怒らして

どこの奴かは知らねども 貴様の出て來る幕ぢやない

早く此場を立ち去れと ケンもホロ口に撥ねつける

此時アクは立ち上り ハルナの都に名も高き

大黒主おほくろぬしに仕つかへたる

鬼おに春はる別わけの身み内うちなる

吾われは片かた彦ひこ將しやう軍ぐんぞ

數すま萬まんの軍ぐん勢せい引ひきつれて

齋い苑その館やかたに打うち向むかふ

それの途と上じやうに小こ北きた山やま

神かみの御み前まへに戰せん勝しょうを

祈いのらむものと來きて見みれば

俄にはかに聞きゆる荒すさび聲こゑ

汝なんぢ二人ふたりが爭あうそひの

不ふ都つ合がな聲こゑと聞きく上うへは

此この儘まま容よう赦しやは相あ成ひらぬ

梵ぼん天てん釋たい自じ在く天てん

授さづけたまへる金かな縛しばり

熊くま公こうの手て足あしをふん縛しばり

吾わが陣ぢん中ちゆうに歸かへれよと

タク、テク、萬まん公こうに下げ知ちすれば

遠さすが熊くま公こうも恐き縮しゆくし

涙なみだかたて

アクは五い三そ公こうに打うち向むかひ

汝なんぢはこの頃ごろ賣うり出だしの

俠け客ふかく五い三そ公こう親おや分ぶんか

此この場ばはお前まへに打うちまかす

もしも聞きかない其その時ときは

直ただち報はう告こく致いたすべし

いざこれよりは神しん前ぜんに

祈き願ぐわんに往ゆかむと云いひながら

此この場ばをたつて出いでて往ゆく

後に五三公は澄まし顔

白浪言葉を竝べ立て

お寅婆さまの隠しもつ

小判千兩取り出して

手切れの金と熊公に

渡せば熊公頂いて

實に有難き御仲裁

これだけお金があつたなら

五年十年甘い酒

遊んで呑める有り難い

長居は恐れと立ち上り

尻はし折つて坂道を

一目散に歸り行く

後にお寅は吐息つき

五三公さまのお蔭にて

危ない處を助かつた

千兩で濟むなら安いもの

えらい御苦勞かけました

アク、テク、タクや萬公も

氣轉の利いたお方ぢやな

これこれ蠚蝮別さまへ

熊公の野郎が去にました

魔我彦さまは何うしてぞ

早く此場に現はれて

祝の酒を改めて

お飲りなされ五三公さま

萬公の奴を初めとし

アク、タク、テクのお客さま

面白<sup>おもしろ</sup>をかしく飲<sup>の</sup>みませう　　大<sup>おほ</sup>きな聲<sup>こゑ</sup>で呼<sup>よ</sup>ばはれば  
次<sup>つぎ</sup>の一<sup>ひと</sup>間に忍<sup>しの</sup>び入り　　隠<sup>かく</sup>れ居<sup>ゐ</sup>たりし兩<sup>りやう</sup>人は  
又<sup>また</sup>ツと此<sup>この</sup>場<sup>ば</sup>に現<sup>あら</sup>はれて　　どことはなしに氣<sup>き</sup>の乗<sup>の</sup>らぬ  
顔<sup>かほ</sup>を晒<sup>さら</sup>して慄<sup>ふる</sup>ひ居<sup>を</sup>る　　そのスタイルのをかしさよ。

お寅<sup>とら</sup>「これ蠨<sup>いもり</sup>蛸<sup>りわけ</sup>別<sup>わか</sup>さま、お前<sup>まへ</sup>さまは本<sup>ほん</sup>當<sup>たう</sup>に腑<sup>ふ</sup>甲<sup>が</sup>斐<sup>ひ</sup>ない人<sup>ひと</sup>だなア。お前<sup>まへ</sup>の取<sup>と</sup>り得<sup>え</sup>といつたら、朝<sup>あさ</sup>から晩<sup>ばん</sup>までスウスウスと留<sup>と</sup>め度<sup>ど</sup>もなしに酒<sup>さけ</sup>を呑<sup>の</sup>んで夢<sup>むちう</sup>中<sup>ちゆう</sup>になるのが取<sup>と</sup>り得<sup>え</sup>だ。それだから夢<sup>ゆめ</sup>の蠨<sup>いもり</sup>蛸<sup>りわけ</sup>別<sup>わか</sup>さまと人<sup>ひと</sup>が云<sup>い</sup>ふのだよ。熊<sup>くま</sup>公<sup>こう</sup>がやつて來<sup>き</sup>てこのお寅<sup>とら</sup>を手<sup>て</sup>籠<sup>ごめ</sup>にせうとして居<sup>ゐ</sup>るのに卑<sup>ひ</sup>怯<sup>け</sup>未<sup>み</sup>練<sup>れん</sup>に長<sup>なが</sup>持<sup>もち</sup>の底<sup>そこ</sup>に隠<sup>かく</sup>れて慄<sup>ふる</sup>うて居<sup>ゐ</sup>るとは何<sup>なん</sup>の事<sup>こと</sup>ぢやいな、御<sup>ご</sup>神<sup>しん</sup>力<sup>りき</sup>さへ備<sup>そな</sup>はつて居<sup>を</sup>れば、五<sup>い</sup>三<sup>そ</sup>公<sup>こう</sup>さまのやうに立<sup>り</sup>派<sup>っぱ</sup>に捌<sup>さば</sup>きがつくのだけれど、お前<sup>まへ</sup>は氣<sup>き</sup>が利<sup>き</sup>かないから、本<sup>ほん</sup>當<sup>たう</sup>に馬<sup>ば</sup>鹿<sup>か</sup>な目<sup>め</sup>を見<sup>み</sup>てしまつた。これ魔<sup>ま</sup>我<sup>が</sup>彦<sup>ひこ</sup>、お前<sup>まへ</sup>も仕<sup>し</sup>様<sup>やう</sup>の無<sup>な</sup>い事<sup>こと</sup>を云<sup>い</sup>ふから、たうとう熊<sup>くま</sup>公<sup>こう</sup>に金<sup>かね</sup>を強<sup>ゆ</sup>請<sup>す</sup>られて仕<sup>し</sup>舞<sup>ま</sup>つた。一<sup>い</sup>體<sup>たい</sup>どこへ往<sup>い</sup>つとつたのだい」  
魔<sup>ま</sup>我<sup>が</sup>「へい教<sup>けう</sup>祖<sup>そ</sup>様<sup>さま</sup>が長<sup>なが</sup>持<sup>もち</sup>の中<sup>なか</sup>にお入<sup>はい</sup>りなさつたものだから、私<sup>わたし</sup>も副<sup>ふ</sup>教<sup>けう</sup>祖<sup>そ</sup>の職<sup>しよ</sup>權<sup>けん</sup>を





まつひめ  
松姫さまは驚いて

なにか  
何か變事が出来たのか

わたしが  
私が往くのは安けれど

かへつ  
却て都合が悪からう

ごくらう  
御苦勞なれど一走り

やうす  
様子見て来て下されと

いはれた  
云はれた故に門口に

かへ  
歸つて佇み窺へば

どこの男か  
どこの男か知らねども

おほ  
大きな聲を張り上げて

あたり  
四邊に響く大喧譁

これや  
これや耐らぬと引き返し

まつひこ  
松彦さまや松姫に

いちぶし  
一伍一什申し上げ

わたし  
私の母を逸早く

たす  
助けてお呉れと手を合し

たのめば  
たのめば二人ニコニコと

わら  
笑ひながらに神前に

むか  
向つて祝詞を奏上し

けつ  
決して心配するでない

じんじ  
仁慈無限の神様が

たちま  
忽ち其場に現はれて

いそ  
五三公さまの口を借り

うま  
旨くさばいて下さらう

こども  
小供がいつては怪我をする

おつしや  
ここに居れよと仰有つた

ゆゑ  
それ故私はおとなしく

ちよ  
お千代さまと手を引き家の外

クルクル廻つて手を合せ  
蠓 蠓 別の教祖さま

魔我彦さまや母上の  
無事を守らせたまへよと

涙と共に祈りました  
暫くすると未代の

日の王天の大神は  
お菊さまお千代と手を上げて

いとニコやかに指し招き  
たまへば二人は喜んで

松彦さまの御前に  
進んで教を伺へば

もはや安心大丈夫  
悪者共はいんだ故

これから歸つて來なされよ  
松彦松姫兩人が

宜敷云つたと云つて呉れ  
俺が往くのは易けれど

蠓 蠓 別や皆さまに  
却て迷惑かけるだらう

控へて居ると仰有つた  
一體あれはお母さま

どこのどいつでムいませう  
大きな聲を出しよつて

尊き神の聖場を  
蹂躪したる憎らしさ

私は腹が立ちます  
とは云ふもののウラナイの

尊たふとき神かみの御教みをしへに 照てらして見みれば怒おこられぬ

ほんに口くちを惜じし焦じれつたい 私わたしが男をとこであつたなら

何程なにほど強つよいやつだとして 決けつして怖ひげは取とらないに

魔我まがひこ彦ひこさまの荒男あらをとこ 其場そのばに居あながら何なんの事こと

愛想あいさうのつきた其顔そのかほ それでも男をとこと云いへますか

何時いつも偉えらそに口くちばかり 立派りっぱな事ことを仰おつしや有あるが

まさかの時ときに屁古へこ垂たれて 其弱そのよわりよは何なんのざま

神かみのお守まもりあるならば 如何いかなる曲まがの襲おそうとも

決けつしてひけは取とるまいに 蠓いもりわけ別わけも魔我まがひこ彦ひこも

メツキリ神徳しんとく落ちました 斯かやう様な事ことでウラナイの

教をしへがどうして榮さかえませう それを思おもへば小北山こぎたやま

神かみの聖場せいぢやうの前途ぜんとをば 案あんじ過すごして寝ねられない

蠓いもりわけ別わけの教主けうしゆさま 魔我まがひこ彦ひこさまにお母かあさま

下くだらぬ喧譁けんくわを打うち切きつて 心こころの底そこから神様かみさまに

誠まことをもつて仕つかへませ 何程なにほど教祖けうそと云いつたとて  
 肝腎かんじん要かなめの神徳しんとくを 落おとした上うへは仕様しやうがない  
 これから心こころを立て直なほし 誠まこと一つのウライナイの  
 神かみの教をしへを謹つつしんで お守まもりなされ皆みなさまへ  
 年齒としはも行ゆかぬお菊きくめが 何なにを吐ぬかすと思おもはずに  
 今日けふの珍事ちんじを切り上あげに 根本こんぽん的に改あらためて  
 神かみの恵めぐみを世よの中なかに 開ひらかせたまへ惟神かむながら  
 天地てんちの神かみの御前おんまへに 謹つつしみぬやまひ願ねぎまつる  
 朝日あさひは照てるとも曇くもるとも 月つきは盈みつとも虧かくるとも  
 假令たとへ大地だいちは沈しづむとも 山やま裂さけ海うみはあするとも  
 眞まことの神かみをよく信しんじ 神かみの心こころを理り解かいして  
 愛あいと善ぜんとを世よに照てらし 生いきては此世このよの花はなとなり  
 死ししては神かみの御柱みはしらと なりて天國てんごく淨土じやうどをば  
 開ひらかせたまへ惟神かむながら 神かみに誓ちかひて此このお菊きく



蓄めて置いたる一萬兩 金迄スツパリ放り出して

此よに澤山宮を立て 末代日の王天の神

月の大神大將軍 朝日の豊榮昇り姫

義理天上や「きつく」姫 耕し大神地上姫

天若彦や定子姫 黄龍姫や金龍姫

金山姫は云ふも更 種物神社大御神

へぐれのへぐれのへぐれ武者 へぐれ神社迄立て竝べ

これ程信神して居るに 何と思つてか神様は

あの悪者がやつて来て 千兩の金をぼつたくり

肩を怒らしスタスタと 歸つて往くのを眺めつつ

そしらぬ顔でムるとは 聞えませぬぞ神様よ

私は心で思ふには 千兩やるのは惜けれど

尊き神の神罰で この坂道の中程で

罰が當つて金縛り 二進も三進もならぬよに

なつて熊公が心から

前非をくいて改心し

千兩どころか一文も

入らないこれは神様に

お返し申す其かはり

私をたすけて下されと

吠面かはいて来るだらうと

思うた事も當はずれ

みすみす千兩の金取つた

男を無事にいなすとは

ミロク成就の神さまも

常世の姫も此頃は

盲聾になつたのか

呆れて物が言へませぬ

思へば思へば力の無い

ガラク夕神だと思つたら

俄に腹が立つて来た

こんな事なら平常から

色々ざつたと氣をつけて

お給仕するのぢや無かつたに

愛想が盡きたユラリ彦

末代日の王天の神

上義の姫の松姫も

サツパリ宛にはなりませぬ

尊き神と思つたら

思ひも寄らぬ狼だ

狼住まう此山に

熊公の野郎がやつて来て

四つ足同様な行ひを 致してお寅を苦しめた

虎狼や熊のやつ 三つ巴になり果てて

何ぢやかンぢやと争ひつ 早暮れかかる冬の空

腹が立つのか寒いのか 體がブルブル慄て來た

叶はぬから叶はぬから 本當に誠に耐らない

力も徳もない神だ これこれ蠨蛸別さまよ

ものも言はない神さまを 何程お給仕した所で

カラキシ駄目ぢやありませんか 即座に云ふ事聞いて呉れる

金の神さま奪ひ取られ どうして後にぬつけりと

平氣な顔で居られよか お寅の腕には骨がある

これから熊公の後追うて 獅子奮迅の勢で

彼奴の胸倉グツと取り 一たんとつた金の神

引き戻さいで置くものか まさかの時に助かると

思ふが故に朝晩に 神のお給仕して居るのだ



盲聾めくしんぼの神かみさまに 何程なにほど頼たのんで見みたとこで

聞きいて呉くれそな事ことはない 何程なにほど偉えらい神かみぢやとて

ビタ一文いちもんも持もつて居ゐぬ 貧乏びんばふな神かみ様さま計はつりだ

朝あさから晚ばん迄まで俺おれたち達の 汗あせや膏あぶらで拵しじらへた

お神かみ酒さけを喰くらひ飯めしを食くひ 海河山野うみかはやまのくさぐさの

百味ひやくみの飲おん食じき居ゐながらに 頂いたきながら一言ひとことも

何なんとも彼かとも云いはぬ奴やつ 拜をがんだところなんで何なんになる

吾われはこれからスツパリと ガラクタ神かみを思おもひ切きり

誠まことの誠まことの根本こつぽんの 神かみの教をしへを探たうね出だし

人ひとに勝すぐれた神しん徳とくを 貰もらうて見みせにやおきませぬ

思おもへば思おもへば馬鹿ばからしい 怪體けたいの悪わるい事ことだつた

思おもへば思おもふ程ほど腹はらが立たつ 皆みなさま御苦勞ごくらうでごさいまして

此この神かみさまを拜をがもうと 捨すてよとほかそと御勝手ごかつてだ

信しん仰かう自由じゆうと聞きくからは 決けつして邪魔じゃまはせぬけれど

肝腎要かんじんかなめの此このわしが 愛想盡あいさつかしたよな神かみを

祭まつつた所ところで仕様しやうがない 屁へのつつぱりにもなりはせぬ

屁へなら音おとなとするけれど ブツともスツとも云いはぬ奴やつ

今迄いままで迷まようて來きたものと 吾身わがみがボツボツいやになり

馬鹿ばかであつたと氣きがついて 大地だいちに穴あなを掘穿ほりうがち

かくれて見みたいよな氣きがしだす あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

神かみも佛ほとけもあるものか 神かみは吾等われらと俱ともにあり

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや こんな明白めいはくな道理だうりをば

悟さとつて居ゐながら何なんとして 高姫たかひめさまの私造しざうした

ガラク夕ゆふ神かみに現うつをば 抜ぬかして居ゐたのか口惜くちをしい

サアサアこれから自暴自棄やくそく糞そだ 堤防どてを切きらして酒さけをのみ

白浪女しらなみをんなの意地いぢを出だし ドンチャン騒さわいでやりませう

のめよ騒さわげよ一寸先いっすんさきや暗夜やみよ 暗やみの後あとには月つきがで出でる

月つきの光ひかりは明あきらかに 吾身わがみの上うへを照てらします

ここに祭つた神さまは

照らす所か暗の夜は

燈明をつけたり蠟燭を

つけてやらねば目が見えぬ

困つた盲の神ばかり

アイタ、タツタ アイタ、ツタ

餘り口が迂り過ぎ

奥歯で舌を噛み切つた

やつぱり性根のある神か  
そんならこれから拜ませう

あゝ惟神々々

御靈幸倍まませよ

五三公はそろそろ歌ひ出したり。

神が表に現はれて

善と悪とを立て分ける

神の中にも善があり

また悪神のあるものぞ

善を表に標榜し

此世を救ふ生神と

信仰計り強くして

理解し得ざる信徒の

體を宿とし巢をくんだ

狐狸や曲鬼が

尊たふとき神かみの名なをかたり

世よびと人を欺あざむく事こともある

小北こぎたの山やまに祭まつりたる

此この神かみ様さまの素す性じやうをば

包つつまづ隠かくさず云いうたなら

生いのち命たまも魂たまも捧ささげたる

信しんじや者かたの方かたは驚おどろかう

私わたしはそれそれをば知しつて居ゐる

そあんな悪あく魔まに欺だまされて

現うつつを抜ぬかし根ねの國くにや

底そこの國くにやら畜ちく生しやう道だう

落おち行いく人ひとの身みの上うへを

見みるにつつけても可い憐ぢらしく

忙せはしき身みをも顧かへりみず

貴きち重ちゆうなたいまを空くう費ひして

此こ處こに滞たいざい在ざいして居ゐるも

汝なんぢら等いちどう一い同どうの身み魂たまをば

正ただしき神かみの道みちに

救すくひ助たすけむ其そのためぞ

思おもへよ思おもへよ顧かへりみよ

此この神しん名めいは高たか姫ひめが

脱だつ線せんだらけの神かむ憑かがり

みたまが地ぢう獄じやくに落おちた時とき

天あめの八やち衢またに彷徨さまよへる

醜しこの魔ま神がみに取とりつかれ

肉にくの宮みやをば宿やどにされ

變へん性じやう男なん子しの系ひつ統ぽうだ

日ひの出での神かみの生いき宮みやと

吾と吾手に盲信し 教を立てて居りたのだ  
肝腎要の高姫や 黒姫司が自分から  
愛想盡かして打ち捨てた ウラナイ教の神様に  
どうして誠があるものか 茲の道理を考へて  
社を残らず潔齋し 拂ひ清めて天地の  
眞の神を祭るべく さうでなければ蝶蜋別  
司の體は曲の巢と なつて忽ち身を碎き  
魂は曇りて地獄道 根底の國へ落ち行かむ  
魔我彦さまやお寅さま 貴方も確りするがよい  
名もなき神に名をつけて 拜んだ所で何にする  
狐狸の弄びに なるより外に道はない  
天地の神の御息より 生れ出でたる生宮と  
名乗りながらも曲神に 靈を汚され朝夕に  
濁つた言靈奏上し 世を亂すとは何の事

これ五三公が天地の神に誓ひて赤心を  
 汝が命の御前に 怯ず臆せず竝べ立て  
 忠告致す次第なり 果してこれの神様に  
 誠の靈があるならば 今眼前五三公が  
 無禮の事を囀つた 舌の根とめて命をば  
 とつて呉れても恨みない これが出来ねばこの神は  
 靈も力も無い曲津 茲で眼を醒まさねば  
 眞の神の御怒りに ふれてその身は云ふも更  
 靈魂までもメチャメチャに こはされ無限の苦しみを  
 萬古末代受けますぞ 顧みたまへ蝶蜋別  
 百の司の御前に 神に誓ひて述べておく  
 あゝ惟神々々 御靈幸倍ましませよ

第四篇 鬼風獸雨

第一四章 三昧經（一二〇四）

蝶いもり蛸りわけ別わけはお寅とら婆ばアさまに抓つかめられ、鼻はなをねぢられ氣絶きぜつした揚句あげく、犬いぬも喰くはない  
悋りん氣き喧げん譁くわをケロリと忘わすれて、奥おくの一ひと間までお寅とら婆ばアの酌しやくで再ふたび般はん若にや湯たうに舌鼓したつづみを打始うちはじ  
めた。お寅とらは神かみより大切たいせつに思おもうて居をつた千兩せんりやうの小判こばんを惡因縁あくいんねんのまはり合あせか、十  
五ご年ねん前ぜんにふりすてた夫をつと、醉よひどれの熊公くまこうにふんごまれ、酒さけをしたたか吞のみつぶされ、  
ふんだくられて劫ごふを煮にやし、迷めい信しん者じゃにはよくある信しん仰かう上じやうのグラツキを始はじめ出だし、  
口くちを極きはめて屁へのつつ張ばりにもならぬ神かみだとコキおろした揚句あげく、自みづから舌したを嚙かみ、八  
ツと氣きがつき、再ふたび神かみを禮れい拜はいする心こころに立返たちかへつた。五い三そ公こうは今いまこそ迷めい夢むを醒さましや  
らむと歌うたによそひて説せつ明めいした。小北山こぎたやまの祭神さいじんの虚偽きよぎてきむめい的てき無名むなの神かみなること、高たか姫ひめが  
自みづから心こころに積つんだ罪惡ざいあくのために、一旦いつたん根底ねそこの國くにに陥おちり、天あめの八衢やちまたにさまよひ、漸やうく

息を吹返し、氣が遠くなつてゐる所へ、其虚を窺つて這入つて來た古狐が神の眞似をして、いろいろの他愛もない神名を編み出し、日の出神の生宮と妄信し、自分分は變性男子の系統だ、生粹の大和魂だと固く主張し出し、三千世界のこととは此日の出神でなければならぬ、之を變性女子にソツと知らしてやるお役だと、悪い狐に誑かされて、益々固く自分の副守を信じ出し、變性女子の御靈や金勝要神の御靈が取上げぬのを、非常に憤慨し、黒姫、蝶蝶別、魔我彦、其外精神上に大缺陷のあるデモ紳士や婆娣共を籠絡し、三五教の信者より寄附金を集め、北山村に本據を構へてゐた所、とうとう化がはげかけたので、蝶蝶別に命じ、小北山へ本山を移すことを命じておいたのである。其内に肝腎の高姫、黒姫は極惡無道の神と思つてゐた神素盞鳴大神の仁慈の徳に感歎し、ウラナイ教を弊履の如くに棄て、三五教に歸順し、宣傳使の中にヤツと加へられたのである。併し乍ら執着心はどこ迄も強く、自分は義理天上日出神の生宮だといふ觀念は中々容易に除れなかつた。又黒姫は黒姫で自分こそ龍宮の乙姫の生宮だと固く信じ、隨分三五教の宣傳使を手古摺らしたものである。併しながら言依別命以下の熱心なる種々の薰



陶に依つて、高姫、黒姫は一日々々薄紙をへぐ様に迷ひの雲が心の空から取除か  
れた。今は全く二人は迷夢も醒めて、今迄の自分の言行を省み、羞恥の心に惱ん  
である。然るに蝶螭別は依然として高姫の遺鉢をつぎ、執念深くウラナイ教を支  
持してゐた。其理由は、今迄高姫、黒姫の肉體を機關として三五の誠の教を攪亂  
せむと企んでゐた諸々の悪魔共は、高姫、黒姫の歸順と共に其身内に止まる餘地  
なく次第々々に脱出して、小北山の蝶螭別、魔我彦、お寅婆さまの肉體に全部宿  
替をして了つたのである。それだから此等三人の猛烈なる迷信は以前の高姫、黒  
姫に優る共決して劣らなかつた。又蝶螭別は以前は軍人であつて、相當の社會的  
教育もあり、一寸哲學もカジリ、各宗の教典も生かじりて稍見聞を廣くして居た  
から、曲神が道具に使ふのには、高姫、黒姫よりも餘程の便利があるのだ。併し  
乍ら何程常識があつても、學問があつても、肝腎要の良心を犯され、精神の大缺  
陥を來した上は、世間の所謂賢人も學者もヤツパリ愚夫愚婦以上に始末がをへな  
くなるものである。蝶螭別は高姫のあらはした支離滅裂な神名や教理を審判する  
ことの出来ない様な文盲者ではないが、併し乍ら最早今日となつては公平な理解

よく 力も全然失つて居た。それ故晨にウラナイの神を念じ、日中にアーメンを叫び、  
夕暮になれば數珠をもみ、鈴を鳴らして、佛の教典を一生懸命に讀誦して唯一の  
善行と信じてゐたのである。

蝶螭別の有難がつて唱へる御經はいつも觀物三昧經であつた。此經文は釋迦佛  
の弟子共の偽作であつて、佛敎弘通の方便として、釋迦を辨護する爲に作つたも  
のである。要するに此經文は釋迦に對し鼻屑の引倒しであることは少し思慮ある  
者は悟り得ることであらう。夕暮になつたので、蝶螭別は例の如く數珠をもみ、  
鈴を打鳴らし乍ら觀物三昧經を稱へ出した。

爾時太子於其根處出白蓮華。其色紅白上下二三華相連。諸女見已復相謂言。此  
如神人有蓮華相。此人云何。心有染著。作此語已噎不能言。是時蓮中忽有身根如  
童子形。諸女見已更不勝喜悅現此相。時羅睺羅母見彼身根華々相次如天劫貝。一々  
華上乃有無數大身菩薩。手執白華圍繞身根現已還沒。爾時復有諸姪女等。皆言。  
瞿曇は無根人。佛聞此語如馬王相漸々出現。初出之時猶如八歲童子身根。漸々長

大如少年形。諸女見已皆悉歡喜。時漸長大如蓮華幢。一々層間有百億蓮華。一々蓮華有百億寶色。一々色中有百億化佛。一々化佛有百億菩薩無量大衆。以爲侍者。時諸化佛異口同音毀諸女人惡欲。而説偈言。

若有諸男子 年皆十五六 盛壯多力勢

數滿恆河沙 持以供給女 不滿須臾意

時諸女人聞此語已。心懷慙愧懊惱。僻地舉手拍頭。而嗚呼惡欲。各厭女身皆發菩提心。チーン……

萬公、五三公、アク、テク、タクの五人はヘグレ神社をブラブラと巡見して種々と批評を試みて居た所、俄に不思議な、神の館に似合はず、經文の聲が聞えて來たので、ソツと壁の外から、足音を忍ばせ、どこの坊主がやつて來て、經文を稱へてゐるのだらう、蠚蠚別も餘程物好だ、ドレ一つ考へて見ようかと、一行五人は耳をすまして聞いてゐる。五人の中で佛の經文を知つてゐる者は五三公一人であつた。

五三「あゝコリヤ不思議だ、あの聲は蝶蜋別だ。観物三昧經を上げてゐる様だ。

ヤツパリ三教合同の御本尊の眷族だと聞いてみたが、神、佛、耶混淆のウラナイ

教の教主さままだな」

萬公「観物三昧經にはどんなことが云つてあるのだ。一つ其譯を聞きたいものだ

なア。オイ是から蝶蜋別さまに拜謁を願つて、お經の解説を願ふことにしようか

なア」

五三「何……ダメだよ、観物三昧經の真相が理解されたら、馬鹿らしくつて、有

難さうに唱へられるものぢやない。ああして棒讀みにダ、ブダ、ダ、ブダと讀ん

で行くから、有難い様に聞えるのだ」

萬公「さうするとヤツパリ分らぬのが有難いのかなア。五三公さま、お前經文の

精神を知つてゐるのなら、一つ其説明を願ひたいものだなア」

五三「餘り馬鹿らしくて、説明する丈の價値がないのだ。お釋迦さまも、ああし

て祭り込まれちゃ、本當にお氣の毒だ。露骨に言へば……全體釋迦如來様は無生

無死の大神人國大立尊の別御靈なる大八洲彦命様が月照彦と現はれ三五教の教を

宣布し、永く幽政を掌り遂には久劫の昔から成佛して都率天といふ天上に坐し坐し印度の國に於て再び肉體を示顯され時代と地方との關係上から佛法を弘布せむと天津神様の命令を奉じて淨飯王の妻摩耶夫人の腹に宿つて生れ婆羅門教の勢力旺盛にして刹帝利族を壓迫し且つ毘舍、首陀の二族を虐げ弊害が甚だしかつたので婆羅門教を言向和すべく活動されたのだ。併しその教の流れを汲む後世の佛弟子どもが若し人に、釋迦はそれ程久しい昔から成佛して居たといつたならば、妻子の如きものが在るべき筈がないと難じられた時に困る譯だから、その時の尻を結ぶために糞坊主どもが言つたことだ。まだまだその他の佛敎にも尻の結べぬ事が書いて居るが皆釋迦如來の精神ではないのだ。

今唱へて居るのは觀物三昧經だが、その意味を譯すれば、釋迦は妻を娶つたけれど交合を爲なかつた、所が耶輸陀羅を始め數多の侍女どもが非常に怪しんで居た時に、侍女の一人が云ふには妾は釋迦に奉事して永らくの年を経たけれども未だにその根を見たことが無い、況んや世事あらむやといふ、但俺が根と云つたるは即ち陰莖のことだ。そして世事と云ふのは、やがて交合の事だ、何の事はない

釋迦に仕へて年を経たけれどもその陰莖を見たことが無いから況して交合はせぬ  
筈ぢやと云ふのだ。時にまた一人の女が云ふには、妾は太子に仕へて十八年を経  
たが未だ太子の便利の患あるを見ない況ンや復た諸の餘を見ようぞと云つた。そ  
こで一同が然らば太子は男ではあるまいと云つて居るので釋迦は之を察して態と  
晝寢をして彼の一物を出して見せた、其趣を經文の儘に棒讀みにするから實に有  
難く見えたり聞えたりするのだ、アハ、ハ、ハ、後の坊主どもが釋迦を鼻屑に思ひ過  
ごしてこんな馬鹿な説を作つて鼻屑の引倒しを爲たものだ。何程わからぬ人間だ  
とて蠚蝨別の如き文盲なものばかりも有るもので無いから坊主のやうにダ、ブダ  
ダ、ブダ　ダ、ブダとばかり讀んで居らず、たまさかには俺の様にシヤンと讀  
む人もあるからなア、こんな具合で諸々の佛經は盡く釋迦に托して後の佛者ども  
が偽作したものだよ、大方の人間は凡ての佛經は全部阿難が書いて置いたものだ  
と固く思つて居るから目指して釋迦を譏つたり非難する様になるのだ』  
萬公「ヤア有難い。併し乍らヒイキの引倒し、商賣道具に使はれちや、お釋迦さ  
まもキツと阿彌陀をこぼしてゐるだらう。何程教祖は正しいことを云つても、後

の奴やつがいろいと誤解ごかいをしたり、勝手かってな熱ねつを吹ふいたり、自分じぶんの説せつが通とほらないと、  
如是我聞によぜがもんとつけて、釋迦しやくかに是かくの如ごとく聞いたと自説じせつを辨護べんごせうとするのだから困こまつ  
たものだな、併しかし五三公いそこうさま、お前は一行中いっかうちゆうの大學者だいがくしやだ、ヤアもう感心かんしんした、今こん  
後は決けつしてお前まへを輕蔑けいべつしないから、どうぞ俺おれに知識ちしきの分配ぶんぱいをしてくれ、お頼たのみだ  
五三いそ『ヨシヨシ俺おれも神かみでもなければ佛ほとけでもないのだから、萬屋よろづやの樣やうに何でも引受ひきう  
けるといふことは出來できない。蠓いもりわけ別わけの樣やうに知らぬことでも何なんとか理屈りくつをつけてチ  
ヨ口ちまかすのなら、どうでもなるが、ゴマ化くわしは永續ながつづきがせぬからな、そして又また  
下根げこんの人間にんげんに何程なにほど結構けつこうなことを聞きかした所ところで、聞きく耳みみがないと反對はんたいに取とれるもの  
だ、さうだから愚夫愚婦ぐふぐふには却かへつて誠まことのことは言いはれないのだ。自分じぶんの暗愚あんぐな卑劣ひれつ  
な心を標準へつじゆんとして、凡すべての人間にんげんは聞きくのだから、玉たまに光ひかりのない者ものには本當ほんたうのこと  
を云いつてやると却かへつて誤解ごかいするものだ、併しかし萬公まんこうさまは下根げこんではない、中根位ちうこんくらゐな所ところ  
だから、天國てんごくで云いへば第二天國だいにてんごくといふ所ところだ。第二天國だいにてんごく相應さうおうの説明せつめいを與あたへることに  
せう』

萬公まんこう『ヤア有難ありがたい、中根ちうこんなら結構けつこうだ。俺おれは又下根またげこんだと言いはれるかと思おもつてヒヤヒ





タク 『先生、私はどこらですか』

五三 『ウン、お前はさうだなア、何と云つてよからうかな』

タク 『へー、さうすると上中下三根を超越してゐるのですか』

五三 『番外だなア、よいと云へばよい、悪いと云へば悪い、まだ混沌として鷄子の如く、溟涬にして牙を含めりと云ふ所だ』

タク 『あゝさうすると、開闢の初に現はれた國治立命様同様の身魂ですか、即ち化して神となる、國治立命と號す……といふ様なものですか。成程國治立命様

は世界最初の偉い神様であり乍ら、一番世の中におちぶれて御座つたといふ事だ

から、いかにも番外でせう。オイ、中の下先生、中の上先生、どうですなア』

萬公 『ハ、ハ、ハ、ハ、國所立退きの命だな、砂が化して瓦となるといふ所だ』

テク 『先生、私は何ですか』

五三 『さうだなア、テクもタクと餘り勝ち負はないだらう』

テク 『ヤア有難う』

萬公 『ハ、ハ、ハ、ハ、つまり言へば神界のハネノケ者だ。チツと之から觀物三昧經でも

研究して、下の下位迄進んだらよからうぞ、ウツフ、」  
テク「馬鹿にすない、あんな者がこんな者になるといふ仕組だ、今よくても先が  
よくならねば誠でないぞよ。靈がよいと申して慢心致すとスコタンを食ふぞよ、  
萬公どのに氣をつけるぞよ、早く改心して下されよ、改心が一等ぞよ。良婆アに  
間違ないぞよ、蝶蝟別の女房お寅が氣をつけるぞよ、アハ、ハ、ハ、」  
（大正一一・一二・一三 舊一〇・二五 松村眞澄録）

## 第一五章 曲角狸止（一二〇五）

五三公は觀物三昧經説明のおかげで、四人の連中からたうとう先生といふ仇名  
をつけられて了つた。五三公も先生と言はれてよい氣になり、ウンウンと返詞を  
することになつて了つた。そしてアク公を中上先生と仇名し、萬公を中下先生と  
稱へ、タクは番外先生、テクはチヨボチヨボ先生と互に呼びなす様になつた。

タク「モシ先生、小北山の神の因縁に付いては最前お寅婆アさまの前でお歌ひに  
なりましたが、如何して又こんなバカなことが出来たものでせうかな」  
五三「之に就ては随分面白い秘密があるのだ。所謂一輪の秘密だ。常世の國から  
渡つて来た大變古い斑狐が白い狐を二匹、古狸を三疋、それから野狐を幾疋とも  
なく引率して、波斯の國北山村の本山に現はれ、バラモン教に一寸首を突出して  
ゐた精神上に缺陷のあるヒポコンデル患者高姫といふ女に憑依して、此世を紊し、  
國治立の大神様を看板にして、自分の世界にせうと考へたのが起りだ。そして所、  
此高姫も若い時は随分情交が好きで、其斑狐サンが思ふ様に肉體を使ふことが出  
來なかつたものだから、やむを得ず、ネタ熊といふ若い男の體をかり、上谷とい  
ふ所で、謀反を企みかけたのだ。そして所、變性男子の御靈と、變性女子の御靈  
が現はれて審神を遊ばしたものだから、斑狐サンたまりかね、部下の狐狸共を引  
つれ、小北の山へ一目散に逃歸つて了つたのだ。さうすると、ネタ熊の肉體は小  
北山へ來なくなり、二三日逗留する内に、神罰を蒙つて國替をして了つた。それ  
から今度は斑狐サン、又もや坂熊といふ男の肉體に巣ぐひ、金勝要神の肉宮を手

に入れ、變性女子を却け、一芝居やらうと思つた所、又もや女子の御靈に看破され、ゐたたまらなくなつて、アーメニヤへ逃出し、ウラル教に沈没して了つた。そこで今度執念深い斑狐サンは、石高といふ男の肉體に巢をくみ、變性女子の向うを張り、日出神と名乗つて、三五教を蹂躪せむとした所、今度は變性男子、女子に看破され、これ又キツイ神罰で肉體が國替したので、今度はミソクといふ山子男の肉體をかつた、そして又女子に大反對をやつてみたが、目的達せず、此奴もアーメニヤの方面へ逃失せて了つた。それから又種熊の肉體を使ひ、大奮闘をやつて女子を手古づらせ、たうとう此奴も神罰で國替をして了つた。それから今度憑つたのが蠓蝮別さまだ、蠓蝮別には斑狐サンが籠城遊ばし、左右のお脇立の白狐サンは、伴鬼世、角鬼世、味噌勘、石黒彦、坂蟲、などに眷族をうつして、四方八方から三五教を打ちわさむと、今や計畫の眞最中なのだ、併し乍ら惡神のすることはいつも尻が結べないから賽の河原で子供が石をつむ話の様なものだよ。萬公「さうすると此小北山は容易ならない所だ。根本的に改革して世界の災をた

たねばダメだなア、先生」

五三「さうだから、松彦様がお出でになつたのだ。神様は偉いものだ、チヤンと松姫を先へ派遣しておかれたのだからなア、悪神といふ者は、自分より上の方は見る事が出来ないの、松姫さまの肚の中を知らず、本當に唯一の神柱が出来たと喜んで奉つてゐるのだよ」

萬公「アハ、ハ、ハ、其奴ア面白い、さうすると、松姫さまを眞から上義姫だと思つてゐるのだなア」

五三「松姫様は、上義姫様の誠生粹の肉の宮様と確信してるから面白いのだ、そして松彦さまをユラリ彦命だと確く信じてゐる所がこちらの附目だ、最早落城したも同様だよ」

萬公「益々愉快でたまらなくなつた、なア中上先生、番外先生、チヨボチヨボ先生、怪體ぢやないか、エ、ー」

アキ「アキ迄アキの根を断ち切り、萬公末代五三々々せぬ様に誠の道を開拓し、テクテク歩を進めるとするのだなア、ハツハ、ハ、ハ」

五人はこんな話に現をぬかし、蠓蠓別の居室の窓外に自分の立つてゐる事を忘

れ大聲で喋つて了つた。蠓蠓別はお經をすませ、又もやグイグイと酒を呑み始めたらしい。ケチン、ケンケラケンと爛德利や杯のち合ふ音が聞えてゐる。お寅は五人の立話を一伍一什聞いて了つた。

お寅は蠓蠓別に酒の用意をなし、何くはぬ顔で、

お寅「サア蠓蠓別さま、ドツサリオあがりなさいませ。一寸私はお廣前まで御禮にいつて参ります、コレお菊、教祖様のお酒の相手をするのだよ」

お菊「あたえ、厭だワ、お酒のお給仕はお母アさまの役だよ。あたえはお廣前へ参つて來ますから、お母アさまは教祖様のお給仕をして上げて下さいな、そして爪つたり鼻をねぢたりせぬ様にして下さい、あたえ心配でならないワ」

お寅「私がお給仕をしてゐると又あんなランチキ騒ぎが起つちや大變だから、それでお前にお給仕をしてくれと云つたのだよ」

お菊「さうだつて、あたえ、嫌なのよ。教祖さまは腋臭だから、お母アさまにねぢられなくても、私の鼻が獨りでねぢ曲るのよ」

お寅「エ、口の悪い娘だな、そんな失禮なことを云つちやすまないよ、蠓蠓別さ

ま、どうぞ子供こどもの云いふことだから氣きにかけない様やうにして下くださいよ」

蠓いもり別わけは細ほそい目めをつり上げ、口くちを尖とがらして鼻はなと背せくら比べさせ乍ながら、

蠓いもり「ウフ、、、これお菊きく、マア良いいぢやないか、おれの腋わい臭がでも喜よろこぶ人ひとがあ

るのだもの、そうムゲにききおるすものだない」

お菊きく「さうよ、教祖けうそさまの腋わい臭がの好すきな人ひとは高姫たかひめさまかお母かアさまだよ、オ

ホ、、、」

お寅とら「コレコレ何なにを言いふのだ。併しかし乍ながらお前まへの云いふ通とほり、蠓いもり別わけさまは高姫たかひめさま

の腋わい臭がが好すきなのだからねえ、私わたしもどうかして腋わい臭がになりたいのだけれど、不器ぶきよ

用うな生うまれつきだから、チツとも持もち合せがないのよ。ホツホ、、、」

蠓いもり「お寅とらさまは腋わい臭がの代かはりにトベラだから、マアそれでババランスが取とれるとい

ふものだ」

お菊きく「ホ、、、、腋わい臭がにトベラ、何なんとマアいいコントラストだこと、神かみさまも

随ずい分ぶん皮ひ肉にくだね、イヒ、、、」

お寅とら「蠓いもり別わけさま、一寸ちよつと之これから御神前ごしんぜんへ参まゐつて來きます、ぢきに歸かへりますから」

蠓いもり 蠓いもり 『ウン、獨酌どくしやくの方が却かへつて興味きよつみがある、トベラの匂におひが酒さけに混合こんがふすると餘あまりうまくないからなア』

お寅とら 『わいがの匂におひが混合こんがふするといいいんだけど、へん』

と云いひ乍ながら、ツンとして立上たちあがり、疊たたみを踵きびすでポンと一ひとつ威喝ゐかつさせ乍ながら表おもてへ飛出とびだした。

蠓いもり別わけはお菊きくを相手あひてにグツグツと口くちの奥おくで分わからぬことを喋しゃべりつつお菊きくにつがせては八百萬やほよろづの神かみにお供そなへしてゐる。

お菊きく 『ホツホ、何なんとマア青白あをしろい顔かほだこと、丸まるで文助ぶんすけさまの何時いつも書かいてゐ

らつしやる蕪かぶらに目鼻めはなつけたよな顔かほだワ。それでも大根だいこんの樣やうな形かたちした白しろい爛かん徳利とくりが

お好きすだからねえ。ホ、そして此この朝顔あさがほがた型の杯さかづきは高姫たかひめさまの口元くちもとに似にとる

んだから面白おもしろいワ、教祖けうそさま、サア、此この杯さかづきで一ひとつキツスなさいませ。隨分ずぶんよい味あぢ

が致いたしますよ』

蠓いもり 蠓いもり 『ヤア朝顔あさがほがた型の杯さかづきは、危き險けん視しされるから止やめておこウ』

お菊きく 『さうですねえ、よう崇たる杯さかづきですなア。あたえも此この杯さかづきみるとゾツとするワ、

又またつねられたり、鼻はなを捻ねぢられたり、息いきの根ねをとめられたりするよなことを突發とつぱつさ



せるのだから、本當に憎らしい猪口才な猪口ですなえ、此猪口のおかげでチヨコと腋臭とトベラの直接行動が始まるのだから、本當に此杯こそ過激思想を包藏してゐるのだワ」

蠓 蠓 『お前もお寅の娘丈あつて、随分口の良い女だ、困つた者だのう』

お菊 『何も貴方が困る筈はないワ、犬もくはない喧譁の煽動するのは此猪口だから、困るのは側に見てゐる此お菊だワ』

蠓 蠓 『そんなら此處にある菊型の杯で一杯やつたら安全だろ、なアお菊』

お菊 『イヤですよ、私の名に似た杯を口に當てて貰うこた、眞平御免だ』

と云ひ乍ら、薄い平たい陶器の杯をグツとひん握り矢庭に袂へかくして了つた。

蠓 蠓 別はソロソロ酔がまはり出した。

高姫山から谷底見れば お寅の奴めがウロウロと

お菊の小虎を引つれて 犬も喰はない餅を焼く

ホンに浮世はこしたものか 思へば思へば自烈たい。

世界に女は澤山あれど

トベラの女に比ぶれば

腋臭の強い高チヤンは

蠓蠓別の命の親だ。

好きは出て来ず厭は来る

ホンに浮世は儘ならぬ。

わしと高ちやんはお倉の米よ

いつか世に出てママとなる。

ままになるならトベラの婆さま

どつかへ嫁入りさして見たい。

八木と云ふ字は米國の米よ

日の出といふ字は日本の日の字

蠓蠓別さまは日出神の

光を身に受けママとなる。

デツカンシヨウ デツカンシヨウ……だ。オイお菊、お前は随分口八釜しい女

だから、お寅に直様密告するだらうなア

お菊、今の内に十分悪口をついておきなさい。私や決して言ひませぬ。併し貴方

がお酒に酔ふと後先見ずに、お母アさまの前でそんなこと仰有るからホんにオ口

オ口するワ、末代日の王天の大神様がおこし遊ばしてるに、みつともない、イチ

ヤ付喧嘩をおつぱじめるなんて、見くびつた人ですなえ

蠓いもり 蠓いもり 『お前まへさへ言いはなきやそれで良よい、俺おれも成なるべく言いはぬ積つもりだ。併しかしあのお寅とらといふ奴やつア、お前まへのお母かアだから、エ、こんなこといつたら悪わるからうが、顔かほにも似に合あはぬ助すけ平べえだよ、おりやモウ、スーツカリと厭いやになつちやつたのだ。

いやで幸さいひ好すかれてなるか 愛あい想さうづかしをまつわいな。

いやぢや いやぢやと口くちでは言いへど 縁えんを切きるとなりや又またいやだ』

お菊きく 『ホ、、、、、、いいかげんに若わか後ご家けをつかまへて、【てら】しておきなさい』

蠓いもり 『ハ、、、、、ちつと妬やいてゐやがるなア、若わか後ご家けだといの、男をとこも持もつた覺おぼ

えもないのに、若わか後ご家けとはふるつてる、さうするとお菊きくお前まへは純じゆん粹すゐな處しょ女ぢよではな

いなア、誰たれにハナヅルを入いれて貰もらつたのだ』

お菊きく 『牛うしか何なんぞの様やうに鼻はなづるなんて、バカにして下くださいますな、油ゆ斷だんのならぬは

娘むすめですよ。かげ裏うらの豆まめもハチける時ときが來くれば、自し然ぜんにハチけますわ。ホッ

ホ、、、、、』

斯かくの如ごとくお菊きくを相あひて手に水色みづいろのうす汚よごれた晝夜ちうや着替きがへなしの木綿もめん着物ぎものを着きたまま、クビリクビリと時ときの移うつるも知しらず、杯さかづきの數かずを重かさねて居ゐる。一方いっぱうお寅とらは門かど口に立たつてゐる五人ごにんの男をとこを認みとめ、

お寅とら『コレ皆みなさま、そんな所ところに何なにしてゐらつしやるの、何か立聞たちぎきでもしてゐなさ

つたのだからいませぬかい』

五三いそ『ハイ立聞たちぎきをさして頂いたきました。あの教祖けうそ様さまがお上あげになつて居をつたのは觀くわん

物三昧ぶつさんまい經きやうでしたね。聲こゑ音ねといひ節ふしまはしと言いひ、本當ほんたうに調子てうしがよく合あつて、知し

ず知しらず吾々われわれの身からだ體たいが躍動やくどうし、其言そのこと靈たまの德とくに吸引きふいんされて、何時いつの間まにやら窓まどの外そと

まで引ひよせられて了しまつたのですよ、何なんとマア偉えらい先生せんせいですね』

とうまく五三いそ公こうはさばいた。お寅とらは怪訝けげんの目めを見みはつて、聊いささか不機嫌ふきげんの態ていであつ

たが、螻蛄いもり別わけの聲こゑがよいとか、節ふしが上じやう手てうだとか言いつて褒ほめた詞ことばに嬉うれしさの餘あまり、

何なにもかも打忘うちわすれ、ニコニコし乍ながら、

お寅とら『さう聞きえましたかなア、本當ほんたうによい聲こゑでせうがな、サアお廣間ひろまへ參まゐりませ

う』

萬公まんこう「ハイ、有難ありがたう、お伴致ともいたしませう」

お寅とらは得意とくいの鼻はなうごめかし乍ながら、機嫌きげんよげに先さきに立たつ。アクは小聲こしゝゑで、

アク「成程なるほどあの濁にごつた言靈ことたまでああやられちや、誠まことの神かみは嫌きらつて寄より付つき玉たまはず、せうもないガラクタ神がみが密集みつしぶするのは當然あたりまへだ、言靈ことたまといふものは謹つつしまねばならぬ

ものだなア」

とウツカリ後あとの方ほうを大おほきく云いつて了しまつた。お寅とらは目めを丸まるくし、後あとふり返かへり、

お寅とら「エ、何なんと仰おつしや有あります、螻蛄いもりわけ別わかさまの言靈ことたまが濁にごつてゐるのですか」

アク「イエイエ濁にごつた所ところもあり澄切すみきつた所ところもあります、それだから偉えらいお方かたと云いつたのですよ。大海たいかいは濁だくせん川せんを入いれて其色そのいろを變へんぜずとかいひましてなア、清濁せいだく合あはせ

呑のむ螻蛄いもりわけ別わかさまの度量どりやうには随分ずぶん感服かんぷく致いたしましたよ」

お寅とらは又また機嫌きげんを直なほして、

お寅とら「本當ほんたうにさうですな」

テク「オイ、アク、否中上いやちつじやうせんせい先生せい、清濁せいだく併あはせ呑のむといふのは何なにか、清酒せいしゆと濁酒だくしゆと一いつ

所しょに螻蛄いもりわけ別わかさまはおあがりなさるか」

アク「バカツ、スツ込んで居れ」

テク「ヘン、偉相に仰有るワイ、イヒ、、だア」

お寅「サア、皆さま、一同揃うて御禮を致しませう」

と神殿の前に仔細らしくすわる。お寅は四拍手し乍ら聲高らかに曲津祝詞を、

「かかまの腹に餓鬼つまります。かん徳利爛ざましのみこともちて、雀の親方、

かんたか姫の命、嘘をつくしの日の出の、高姫のおいどのクサギが原に、味噌す

り拂ひ玉ふ時に、泣きませる、金拂戸の狼達、モサクサの間男、罪汚れを拂ひ玉

へ清め玉へと魔の申すことの由を、曲津神、クダケ神、山子萬の狼虎共に、馬鹿

の耳ふるひ立てて、おみききこしめせと、カチコメ カチコメ申す。ウラナイの

雀大御神、曲り玉へ逆らへ玉へ、ポンポン」

萬公「アハ、、、」

お寅「コレ何方か知らぬが、曲津祝詞を上げてる時に笑ふとは何事ですか、チツ

と謹んで下さい、ここは狼の前ですよ、狼さまにお寅が祝詞を上げて居るのだ」

萬公「寅に狼、何とよい対照だなア、ここがウラナイ教のウラナイ教たる所以だ」

お寅は一生懸命に祈り出した。

「嘘つきの狼様、ヤク日の狼様、曲津日の玉、イタチ天の狼様、落瀧津速川の狼

様、てん手古舞の狼さま、リントウ鉢巻ビテングの狼様、木曾義仲姫の狼様、上

杉謙信姫の狼様、生羽ぬかれ彦神社の狼様、岩テコ姫の狼様、五六七成就お邪魔

の狼様、夕日の豊榮下りの狼様、不義理天上内から火の出の狼様、軽業師玉のり

ひめ、おほかみさま、バカの大將軍様、蝶蜷別のおね間を守り玉ふお床代姫の狼様、種物神

社御夫婦様、悪魔の根本地の十六柱の狼様、堺の神政松の御神木様、何卒々々朝

な夕なの御神徳を蒙りまして、蝶蜷別がヨクの熊高姫を思ひ切りますやうに、そ

して此丑寅婆サン姫命を此上なきものとめでいつくしみくれます様に、其次には

お菊姫命、萬公と因縁がムりまするならば、どうぞ一時も早く添はしておやり下

さいませ、ハン狐さんの、どこ迄も正體が現はれませぬ様、御注意下さいませや

う、これが第一の御願でムいます。そして末代火の王天の大神様の肉宮、不情誼

姫様の肉宮が、どこ迄も此小北山に鎮まり遊ばして、吾々の心性不淨自由の目的

が達します様に、再び素盞鳴尊があばれ出しませぬ様に、天の岩戸が開けます様

に、色の黒き尉殿と白き尉殿が、天の屋敷にお直り候ふやうに、誤醜護御願申上げます、ポンポンポン。

皆さま、御苦勞でムいました。サア之で今晚は御自由にお休み下さいませ。御廣間に夜具を並べさせますから

萬公「イヤどうぞ心配して下さいますな、自分のことは自分にせなくてはなりません。夜具の在處さへ聞かして貰へば、自分で床をのべて休まして貰ひます」

お寅「あゝそんなら此押入の襖をあけると、チツと痛いけれど、木の枕もある也、蒲團も澤山にあるから、萬公、お前が皆さまに床を布いて寝て貰う様に世話をや

いて下さい」

萬公「ハイ何もかも呑み込みました。どうぞ早くお歸り下さいませ。教祖様が淋

しがつてゐられますからなア」

お寅「ホ、ホ、ホ、何から何迄、よう氣のつく男だこと。ヤア五三公さま、其外の御一同さま、どうぞ御ゆるりと明日の朝迄お休み下さいませ」

と云ひ乍ら、慌ただしく蠚蠚別の居間を指して歸り行く。



(大正一一・一二・一三 舊一〇・二五 松村眞澄録)

第一六章 雨露月(一二〇六)

教をしへの庭にはも大廣木おほひろき

正宗まさむねさまの肉にくの宮みや

出入でいりあそ遊あそばす神様かみさまに

お神酒かみきをすすめて管くだを卷まき

曲角まがつのり狸りと止とを奏上そうじやうし

酒酌さけくみ交かはしグイグイと

心こころは浮うかれて天國てんごくの

園そのに遊あそべるよい機嫌きげん

潮時しほどき見みすましお寅とらさま

大廣前おほひろまへに現あらはれて

夕ゆふべの御禮おれいを申まをさむと

お菊きくを側そばに侍はべらせて

酒さけの相あひて手をさせ乍ながら

いといかめしき装束しやうぞくを

體からだにまとひ中ちうけい啓けいを

殊勝しゆしやうらしくもひん握にぎり

教祖けうその館やかたを立ち出いでて 五三公いそこう、萬公外三人まんこうほかみたり

伴ともなひ乍ながら悠々いいうと 大神殿だいしんでんに参入さんに入し

恭うやうやしくも拍手かしはでを うちて四邊あたりの空氣くうきをば

いやが上うへにも濁にごらせつ 曲角狸止まがつのりとを奏上そうじやうし

自分勝手じぶんかつての願ねがひをば 百萬ひやくまんだらりと宣のべ立てて

五人ごにんに暇いとまを告つげ乍ながら 慌あわただしくも蝶いもり蛸りわけ別

潜ひそむ一閒ひとまへ歸かへり行く あとに萬公まんこう、五三公いそこうは

戸棚とだなの襖ふすまを引ひきあけて 夜具やぐや枕まくらをとり出いだし

大廣前おほひろまへに布しき竝ならべ 足あしを伸のばして横よこたはり

皆みなくちぐち 三五あななひの 天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし

終をはつて互たがひに高姫たかひめや 黒くろ姫ひめ司つかさを初はじめとし

お寅婆とらばさまの身みの上うへや 蝶いもり蛸りわけ別のローマンス

ひそびそ笑わらひ囁ささやきつ 漸やうやく寢ねむりに就つきにける

萬公まんこうさまは目めを醒さまし 四人よにんの寢息ねいきを窺うかがひつ

玄關口の雨戸をば 音せぬ様にひきあけて

ブラリブラリと庭内を うろつき初めお菊さまは

もしや外には居るまいか 一つ直接談判を

やつて見なくちや納まらぬ 五三公さまを初めとし

白河夜舟の四人づれ 俺もこれから彼奴等が

夢にも知らぬ白河の 夜舟に一つ乗つて見よか

櫓權の音がキクキクと 聞えて來さうなものぢやなあ

お寅の港に寄り來たる 老朽船や新造船

何の方向を尋ねたら 波止場に出づる事ぢややら

本當に誠に氣がもめる あゝ惟神々々

結縁の神の御恵みに 何卒嬉しきおもてなし

偏へに願ひ奉る 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 星は天から下るとも

鼬が最後屁放るとても お寅婆さまが萬公を

耕たがやし大神だいじんの生宮いきみやぢや

娘むすめのお菊きくは地上ちじやう姫ひめ

テツキリ夫婦ふうふの身魂みたまゆゑ故

靈肉れいにく茲ここに合致がうちして

大神業だいしんげふに参加さんかせば

小北こぎたの山やまは萬歳ばんざいだ

等などと甘い事こと云いひよつた

俺おれはもとよりウラナイの

神かみは信用しんようせぬけれど

お寅婆とらばさまの言いひ草ぐさが

萬公まんこうさまの氣きに入いつた

ここは一ひと先まづ猫冠ねこがぶり

お菊きくを首尾しゆび克よくく女房にようぼうに

定さだめた上うへに潮時しほどきを

考かんがへすまし三五あななひの

教をしへの道みちに歸順きじゆんさせ

夫婦ふうふ手に手てを取り交かはし

松彦まつひこさまに従したがひて

惡魔あくまの征途せいとに上のぼらうか

我慢がまんの強つよいお寅とらさまも

可愛かあいい娘むすめが三五あななひの

道みちに信仰しんかうした上うへは

屹度きつと信仰しんかうするだらう

さうなりや萬公まんこうの結けつ婚こんも

決けつして無意むい味みにや終をはらない

神かみと戀こひとの二道ふたみちを

かけて愈いよいよ神界しんかいの

大神業だいしんげふに加くははらば

誠に都合のよい事だ

待てば海路の風が吹く

松彦さまは久振り

戀しき女房に巡り合ひ

俺は又もや義妹に

思はぬ處で出會はし

ここで愈結婚の

式を擧げる様になつたのも

何かの神の引合せ

之程ボロイ事はない

これを思へば五三公や

アク、タク、テクの三人が

氣の毒さうになつて来た

ほんに浮世はままならぬ

神が表に現はれて

善と惡とを立別ける

五三公さまの眼力は

實に驚く外はない

あれ程六かしい三昧經

苦もなく解いた其手腕

竝々ならぬ人物だ

あれを聞いたら松彦も

さぞや感心するだらう

俺も今迄五三公を

あれ程偉い人物と

夢にも思つて居なかつた

天教山に現れませる

木の花姫の御化身か

何處とはなしに違つてる 五三公さまの寢姿を

一寸覗ひ眺むれば 何とも知れぬ靈光が

周圍を包んでゐた様だ 此奴あ迂闊戯言も

云ふてはならぬ化物だ あゝ惟神々々

御靈幸倍ましまして 蠚螋別や魔我彦や

お寅婆さまが目を醒まし 誠一つの三五の

道を悟つて神政の 教を四方に開くべく

守らせ玉へ三五の 道を守らす大御神

國治立の御前に 慎み敬ひ祈ぎ奉る

と庭園の口八臺に腰を打かけて歌つて居るのは萬公である。

萬公「あゝ、何と暗い夜だな、星は随分澤山に現はれてゐるが矢張り月の光でな

いと駄目だわい、然し乍ら青春の血に燃ゆる若き男女のむすびの神は矢張り闇夜だ。

お菊と情的締結の最中に空から圓い顔で覗かれちゃ、あまり見つともよくないか

らな。

あれ見やしやんせ、あれ、あの人は

橋の欄干で艶文を読む

雲が悋氣で月かくす。

お月さまも若い男女のロマンスを御覧になると嬉しがつてニコニコなさるさうだ。いや嬉しがつてでない、可笑しくて笑ふのだらう。そこを雲の奴、悋氣しやがつて、艶文を見えない様にするのだから雲と云ふ奴あ、意地の悪いものだ。鬼雲彦だつて矢張此世の雲だからな  
と獨り呟いて居る。其處へ足音を忍ばせてやつて來る一つの影があつた。萬公は思はず胸を躍らせた。此人影は果して何者なりしか。

(大正一一・一二・一三 舊一〇・二五 北村隆光録)

第一七章 萬公月（一二〇七）

暗の中から、

女の聲「萬公さま、あなた其處に何して居らつしやるの。あたい最前から大廣前の周圍をクルクル廻つてゐたのよ」

萬公「さう云ふ聲はお菊さまぢやないか。あられもない女の身として連れもなく、只一人夜歩きなさるとはチツと大膽ぢやありませんか、女は夜分になれば決して一人出るものぢやありませんか」

と故意とに嬉しさを隠して力んで見せる。

お菊「ホ、ホ、あたい、一人出たつて構はないよ。男のつれでもあつて見なさい、それこそお母さまに大いお目玉を頂戴せなくてはならないわ。萬公さま、お前だつて此暗がり一人何してゐるの。早く夜分は寝るものですよ」

萬公「今俄に神懸になつたものだから種物神社に詣つてここ迄歸つて來た所だ。一寸息を休めてこれから寝ようと思つてるのだ」



お菊「ホ、ホ、種物神社なんて、よう云へたものだ。種物が違ふのでせう」

萬公「さう素破抜かれちや隠しても駄目だ。實の所は如何しても寝られないので、外をぶらついて居たら天然棒の星あたり、犬も歩けば棒に當ると云ふから、あたつて碎けて見ようと思つてブラリブラリとやつて來たのだ。何と暗い夜でないか。お菊さまの美しい白い顔が満足に見えないのだからなあ」

お菊「あたいの顔を見て如何するの。あたいは見せ物ぢやありませんよ。これ萬公さま、お前さまの目的は一體何だい。皆さまが寝てゐるのに暗がりで一人うるつくのは何か野心がなくちやありませんまい」

萬公「別に野心もないが耕し大神の本守護神が地上姫を尋ねてお出御になつたのだよ」

お菊「ホ、ホ、これ萬公さま、お前はそんな慢心をしてゐるのかい。耕し大神だなんて思つてるのだな。随分お目出度いね」

萬公「耕し大神と云つたら萬公さまぢやないか。それが違ふならお寅さまに聞いて見るよ」

お菊「ホ、ホ、お寅さまに聞いたつて何が分るものか。みんな此處の神さまは嘘だよ。お母さまは迷信家だから、あんな事云つて喜んで居るのよ、本當に嫌になつて了ふわ。お菊は地上姫だなんて、何時でも云つてるの。好かんたらしい。地上を耕すと云ふので耕し大神と地上姫が夫婦だなんて、こんな妙な理屈をつけるのだから、本當に馬鹿らしくして仕方がないのよ。お前も、もちと【らしい】人かと思つたら、そんな事を聞いて本當にしてるのかい。天下泰平だね」

萬公「さうするとお菊さま、お前は地上姫だないと思つてるのかい」

お菊「癡情の結果、家を飛び出るものが癡情姫だよ。こんな箱入娘に癡情姫なんて仇名をつけれられちや大變な迷惑だ。然し萬公さまは耕し大神が性に合ふとるよ。人と約束した事でも直に、たがやし大神だからね。ホ、ホ、」

萬公「これや怪しからぬ、さうすると此萬公を何神さまだと思つて居るのだ」

お菊「さうだね、まんまん たわけ大神位なものでせうよ」

萬公「こりや怪しからぬ、さうすると蝶蜋別教祖は大廣木正宗ではないのか」

お菊「阿呆らしい、あんな酒喰ひが大廣木正宗なんて、呆れつちまふわ。あの人

は蠓いもりの様な人やうひとだよ。井戸いどの底そこにすつ込んで、のたくつて居ゐるのだからな。松姫まつひめさまだつて決して上じやう義姫ぎひめでも何でもありやせない。松彦まつひこさまだつてユラリ彦ひこでも何でもないのだよ。蠓いもり別わけさまやお母かあさまが迷信めいしんして居ゐるのだから始末しまつにおへないのよ。よくもかう惚とほけ人にん足そくばかりが寄よつて居ゐるものと呆あきれてゐるの。それでもお母かあさまが可哀かあい相さうだから斯かうして付ついて居ゐるのだが、仲々なかなか容易よういに夢ゆめは覺さめないのだよ。此目このめを覺さまして呉くれる立派りつぱな男をとこさへあれば、其男そのをとこを夫をつとに持もち度たいだけど、そんな立派りつぱな人ひとは一人ひとりもありやせないわ。萬公まんこうさまだつてさうだもの□

萬公まんこう「やあ、此奴こいつあ感心かんしんだ。實じつの所ところは俺おれも、それや知しつてるのだ。只ただお寅とらさまの前まへで、一寸ちよつとテングに神懸かむがかりの眞似まねをして耕たがやし大神だいじんと云いつて見た所ところが大變たいへんに信用しんようして呉くれたもんだから俺おれも其氣そのきになつて、一寸ちよつと化ばけて見たのだ。要えうするにお前まへと結婚けつこんをして誠まことの道みちの御用ごようをしさへすれば宜いいのだ。耕たがやし大神だいじんや地上ちじやう姫ひめなんか、眼中がんちゆうにないのだ□

お菊きく「エーエ、阿呆あほうらしい。たれが萬公まんこうさまの様やうなお方かたに身みを任まかす馬鹿ばかがありま  
すか。あたゐ、もう姉ねえさまの事ことで懲こり懲こりしてゐるのだもの。お前まへさまの顔かほを見る

と嘔吐が出る様だわ。夜分だから顔が見えぬので、斯うして、しつぽりと辛抱して話をしてあげるが、晝だつたら氣分が悪うて一目見てもゾツとするのだよ。そんな馬鹿な夢を見て居らずに、さあチヤツとお寢み。ホ、ホ、ホ、男と云ふものは氣の利かないものだな」

此方の木の茂みから、

「尤も尤も、然り然り、左様々々、お菊さま、萬歳」と叫ぶ聲がする。

萬公「なんだ。如何にも小北山は怪體な魔窟だな。女とも男とも得體の知れぬ聲を出しやがつて、何を吐すのだ。ヤツパリ斑狐サンの御眷族だな。アハ、アハ、アハ、お菊「ホ、ホ、ホ、狐ばつかりの寄り合うた世の中なもの、無理もないわ。況して此小北山は狐狗狸さんの巢窟だからね」

暗がりから細い聲で、

「お菊さま、頼みまつせ。しつかりおやりやす。此萬公はなあ、高慢人だから逆様に慢高と云ふのよ。慢の字のついたものには碌な奴はありやせないわ。自慢高

慢我慢慢心に萬引に満鐵、マント、まんまんこんな者だよ。【まん】の悪い處へ

小狐がやつて来て濟みませぬね

萬公「はあて、益々合點の行かぬ處だ。此奴あ夢でも見てるのぢやなからうかな。

夢の蝶蝨別の館へ來てるのだから、大方夢かも知れないぞ。アイタ、ヤツ

パリ頬を抓つてみれば痛いわい

お菊「オホ、、、」

萬公「こりやお菊、いやらしい聲出しやがるな。そんな笑ひ聲出しやがると首

筋元がゾクゾクするぢやないか

お菊（聲色）「一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、六枚、七枚、八枚、九枚、エー

残念やなあ、怨めしやなあ

萬公「これやこれやお菊、戲けた眞似をさらすと承知せないぞ

お菊「播州の皿屋敷だよ、ホ、、、」

暗がりから、

「オ、一枚、オ、二枚、オ、三枚、オ、四枚、オ、五枚、オ、六枚、

オ、七枚、オ、八枚、オ、九枚、さあ後の一枚を今宵の中に出さぬ事には  
不憫乍ら其方の生命はないぞや。其一枚の皿はお菊の股にある筈、萬公がその皿  
を狙つて隠して居るのだ。萬に皿だから萬皿嘘でもあるまい。ウツフ、  
萬公「これや、誰ぢやい。馬鹿な眞似さらすと承知せないぞ、俺を誰様と心得て  
るのだ。エーン」

お菊「ホ、  
ドレドレ又お母さまが蝶蝶別さまの大廣木正宗を苛めてゐると可哀相だ。どれ仲  
裁に行かうかな。萬引滿鐵の萬さま、左様なら、アバよ、ホ、  
と笑ひ乍ら足早に教祖の館をさして歸つて行く。萬公は雙手を組み合點の行かぬ  
怪しの聲と考へ込んでゐる。闇がりから、

「ワツハ、  
萬公は其笑ひ聲に聞き覚えがあつた。萬公は恥かしさと腹立たしさとに自棄に

なり、  
萬公「チヨツ、これや、アクの奴、要らぬ惡戯をやりやがるない。本當に人の肝

なり、  
萬公「チヨツ、これや、アクの奴、要らぬ惡戯をやりやがるない。本當に人の肝

玉を冷やしやがつて仕方のない奴だ。タク、テク、貴様もチツと心得ないと痛い目をさしてやるぞ」

アク「偉い失戀な事を致しました。ウツフ、」

萬公「エーエ、馬鹿らしい夢を見たものだ。あゝ夢になれなれ（口上句調）夢の蠓蠓別の神館、萬公が失戀の幕、首尾克うお目にとまりますれば先客様は之でお代り」

一同「アツハ、」

（大正一・一二・一三 舊一〇・二五 北村隆光録）

## 第一八章 玉則姫（一二〇八）

蠓蠓別は酒に酔ひつづれ他愛もなく徳利と共に横たはつて仕舞つた。お寅はソツと上から夜具を着せ足音を忍ばせながら、四疊半の間に角火鉢を置いて坐り込

み獨言、

お寅「ほんとに蠓蠓別さまも困った男だなア、是程親切にすればする程、どことはなしに冷やかになつて来る男だ、もちつと温かい人だと思つて居たに、えらい買ひ被りをしたものだ。こんなに冷たいと知つたら、初めからああ逆上せ上るのぢやなかつた。折角貯めた財産は一文も残らずお宮の普請に入れて仕舞ひ、それから又「シボクボ」として蓄めた千兩の金は熊公にしてやられ、是から先はどうしたらよいのだらうか、本當に氣の揉める事だわ。お酒は朝から晩迄上げなくてはならないし、酒だつて矢張無代であるものぢやないし、一升の酒に二十五錢も税金が要るのだもの。これだけ間接國税を納めて居てはやりきれない、ぢやと云うても私も女の意地、今更捨ててはならず、捨てられては尚ならず、えらい羽目に陥つたものだ。澤山の迷信家は參つて来るが文助が馬鹿者だから此神様は蕪や大根さへ上げればよいと思つて、些も金目のものを供へる信者はなし「龍神さまだ」と云つては黒蛇を北山の上に放しに来る位なものだ。こんな事でお宮の維持、いや商賣が出来るものか、チヨツ、偉いヂレンマに掛つたものだわ」



斯く獨り言を呟いて居る所へ、廊下の縁板をおどかしながら足音高くやつて来たのは魔我彦であつた。

魔我「お寅さま、まだ起きてゐらつしやるの」

お寅「寝ようと思つたつて寝られないぢやないか。お前が仕様もない事を云ふものだから、たうとう熊公の奴に千兩ゆかれて仕舞つたぢやないか」

魔我「それでも命と千兩とは比べものになりませぬよ、未だ御神前に九千兩残つて居るのだから、さう悲觀したものでござやありませぬわ、それよりもお寅さま、いつも貴女が、上義姫と義理天上と夫婦にしてやらうと仰有つたが、末代日の王天の神の生宮がやつて来たので、サツパリ私は蛸の揚壺になつたぢやありませぬか、貴女の御託宣でも時々違ひますな」

お寅「どうせ、一つや二つや違つたて仕様が無いぢやないか、さう執念深くこの氣の揉めてるのに理屈を云つてお呉れでないよ」

魔我「お寅さま、一つや二つ違つたて何ぢやと仰有いましたが、上義姫と私との結婚問題が、一つ間違つたのは私に取つては大變な苦痛ですよ、否殆ど破滅も同

様ですよ」

お寅 「仕方がないぢやないか、神様は「其時の都合に致すぞよ」と仰有るのだから、なんぼ義理天上日の出神が偉うても末代さまには叶ひますまい、それよりも、もつと若い綺麗な女に目をつけたらどうだい、あんな中古は、古手屋の店へだつて垂下しておいても誰も買やしないよ。人の着古したマントを買はうよりまだ一度も手を通した事のない、シツケの取れない衣物を買った方が何程氣持がよいか知れないよ」

魔我 「實は私も、さう思つて思ひ切つたのです。チヨツ昨日も信者の中から物色しましたが、いつもよう參つて來るお民さまを私の女房にして見たいと思ひます、世話をして貰ふ譯には行きませぬだらうかなア」

お寅 「何、あのお民を女房にしたいと云ふのか、ウンそれやよい了見だ、一つ私が懸け合つて見よう、併し旨く行くか知らぬがな」

魔我 「そこは旨くお民の身魂を義理天上さまの女房の身魂玉則姫さまだと云ふやうに説きつけて下さいな、神様の命令とあれば、あれ程熱心の信者だから聞いて

呉くれませう」

お寅とらはニヤリと笑わらひ、

お寅とら「これ魔我まがヤン、お前まへは何處迄どこまでも自分じぶんの身魂みたまを義理天上ぎりてんじやうと思おもつて居ゐるのか、お目出度めでたいぢやないか、このお寅とらは馬鹿ばかぢやけれど、昨日きのふ五三公いそこうさまの歌うたによつて、スツカリ看破かんぱして仕舞しまつたのよ、蝶いもり別わけさまは高姫たかひめ仕込じこみで精神せいしんが變へんだから「誰たれの身魂みたまが何だの彼の身魂みたまが何だの」と口くちから出放題ではうだいの事ことを云いつて居ゐるのだ。併しかしこれも商賣しやうばいだと思おもへば、勘辨かんべんが付つかぬ事ことも無いが、本當ほんたうにお前まへ、義理天上ぎりてんじやうさま

まと思おもうて居ゐては大當違おほあてちがひだよ、お前まへの身魂みたまは狸たぬきだからねえ」

魔我まが「これや怪けしからぬ、そんなら私わたしが狸たぬきなら、お寅とらさまは虎猫とらねこでせう」

お寅とら「私の守護神しゆごじんは、そんな屁泥へどろい者ものぢやないよ。五三公いそこうさまの歌うたを聞きいて、目めが醒さめ、ソツと腹はらの中の守護神しゆごじんを調しらべて見みたら、腹はらの中なかより云いふ事ことにや「私わしは斑はん狐こぢや、それを盤古ばんこと云いうて居ゐるのぢや。虎とらとも牛うしとも狐きつねとも分わからぬやうな怪物くわいぶつだが、やつぱり古狐ふるきつねの親分おやぶんで、小北山界隈こぎたやまかいわいで羽振はぶりを利きかして居ゐるのだ」とよ、本當ほんたうに呆あきれて仕舞しまつたよ。これを思おもへばどれもこれも皆狐みなきつねや狸計たぬきはかりだなア」

魔我「さうすると蠓蝶別さまの守護神は何ですか」

お寅「大きな聲では云はれぬが、大變大きな狸だよ、さう聞くと時々口を尖らしたり、目をギョロリと剥いたりなさるだらう、併し狸だつて斑狐だつて餘り馬鹿にはならないよ、魔我ヤン、お前も其心算で狐擬ひになつて活動しなさい、狸と

云はれるより狐はましだよ、狐は稻荷さまと云うて、皆が崇めて呉れるからな」

魔我「狐狸の話は暫くお預りとして私の結婚問題です、如何かしてお民さまを世話して下さいな、貴女グズグズして居ると蠓蝶別さまが取つて仕舞ひますよ」

お寅「ウンさうだなア、どうもお民の視線が蠓蝶別さまに集注するやうで仕方がないと思つて居た處だ、ひよつとしたらあの阿魔ツチヨ、蠓蝶別さまに秋波を送つて居るのかも知れない、憎いやつだ、どれどれ今に面の皮を引き剥いてやりませうかい」

魔我「そんな事をせずに私に世話して下さいたら、私が大事にして、蠓蝶別さまの方へ目も呉れないやうに保護するぢやありませんか。さうすれや第一お寅さまも安全でせう」

お寅「さうだな、別に荒立てる必要も無いのだから否や應なしにお前の女房になるやうに一つ懸合つて見よう」

魔我「ヤアそいつは有難い、遠はお寅さまだ、よく取り上げて下さつた、それだから取上婆アさまと云ふのだ、ウフ、ウフ、」

お寅「そんな洒落所かいな、かう聞けば一時も早く何とか極めないと、蝶蝮別さまが險難で仕方がない。お民は今日歸つたと云ふことぢやないか」

魔我「何歸りますものか、あの女は神様へ參るのは表むき、その實は蝶蝮別さまに百度以上に逆上て居るのですよ」

とお寅婆アさまを焚きつけて自分の縁談を周旋させやうと巧んで居る。

お寅はカツカとなり、

お寅「これ魔我サン、そのお民さまは何處に居るのだえ」

魔我「炊事場の隣に寝て居るのですが、實は私も今晚瀨踏をして見たのですがやられました。本當に本當に馬鹿らしい」

お寅「アハ、ハ、ハ、氣の利かぬ、エツパツパを喰はされて來たのだな、それで此お

寅さまに應援を頼みに来たのかな、併し魔我ヤン、お前は大に氣に入つた。さうしてチヨイチヨイ邪魔をしたり氣をつけたりして貰はねば蝶蜷別さまが險難で仕方がないからな。番犬には適當な男だ

魔我「番犬とはちと甚いではありませぬか」

お寅「番犬でもいいぢやないか、今に立派な御主人にして上げるのだから、これ魔我ヤン、お前は前に「チヨコナン」として蝶蜷別さまに魔のささぬやうに番犬の御用をつとめて居るのだよ」

と立ち出でむとする時、其邊をうるついで居たお菊がやつて來た。

お寅「お前はお菊ぢやないか、娘が夜中にどこをうるついで居るのだ」

お菊「あの耕し大神の生宮に遇つたのよ、それで散々膏を取つてやつたの、本當に萬公の奴、狸に誑かされよつて耕し大神だと自信して居るのだから可笑しくて仕様がな。このお菊だつて地上姫でも何でもあれやしなわ、こんな鼻の頭も分れて居ない處女に、癡情があつて耐るものですか」

お寅「何も彼も好く知りぬいたお轉婆ぢやなア、私は一寸そこ迄行つて來るから、

お前<sup>まへ</sup>ここで魔我彦<sup>まがひこ</sup>さまと待つて居<sup>ゐ</sup>るのですよ」

お菊<sup>きく</sup>「お母<sup>かあ</sup>さま、女<sup>をんな</sup>が夜分<sup>やぶん</sup>にのそのそ一人<sup>ひとり</sup>歩きするものぢやありませんよ」

と即座<sup>そくざ</sup>に竹篋<sup>しつべい</sup>返しをやつて見<sup>み</sup>た。

お寅<sup>とら</sup>「私<sup>わたし</sup>は神界<sup>しんかい</sup>の御用<sup>ごよう</sup>があるのだよ、お前<sup>まへ</sup>はここに神妙<sup>しんめう</sup>に魔我彦<sup>まが</sup>と待つて居<sup>ゐ</sup>る

のだよ。そして眠<sup>ねむ</sup>くなつたら勝手<sup>かって</sup>におやすみよ」

お菊<sup>きく</sup>「お母<sup>かあ</sup>さま、好<sup>す</sup>かぬたらしい、魔我彦<sup>まが</sup>の顔<sup>かほ</sup>見てる位<sup>くらゐ</sup>なら、寢間<sup>ねま</sup>へでも入<sup>はい</sup>つ

てやすみますわ」

お寅<sup>とら</sup>「エ、勝手<sup>かって</sup>におしよ」

と云<sup>い</sup>ひながら、パイと立<sup>た</sup>ち出<sup>い</sup>で、炊事場<sup>すゐじば</sup>の隣<sup>となり</sup>の暗<sup>くら</sup>い部<sup>へ</sup>屋<sup>や</sup>を指<sup>さ</sup>して足<sup>あし</sup>さぐりに進<sup>すす</sup>んでゆく。

(大正一一・一二・一三 舊一〇・二五 加藤明子録)

悋氣りんきの角つを振り立てて

顔かほを眞赤まっかに染そめながら

轟とどろく胸むねを撫なで下おろし

居間ゐまに魔我彦まがひこのこ残こしつつ

粹すに氣きの利きくお寅とらさま

炊事場すゐじばさして進すすみ入り

お民たみの居間ゐまへ訪おとへば

お民たみは切しきりに經典きやうてんを

緋ひもき初はじめ居ゐたりける

お寅とらは外そとから聲こゑをかけ

これこれ申まをしお民たみさま

こんな夜更よふけに何なにしてぞ

人の寢静ねしづまつた其後そのあとで

文ふみでも書かいて居ゐるのだらう

油斷ゆだんのならぬ女をんなだなあ

かう出だし抜ぬけに呼よばはれば

お民たみは驚おどろき經典きやうてんを

二ふたつに疊たたんで傍そばにおき

貴女あなたは内事ないじのお寅とらさま

この眞夜中まよなかに何なんとして

態々わざわざ訪たつねて來きなさつた

合點がてんがゆかぬと怪あやしめば

お寅とらは眼まなこをむき出いだし

花はなの盛さかりのお民たみさま

お門かどが多おほくて嘸さぞやさぞ

心こころの揉もめる事ことでせう

お前まへがここへ參まゐつたのは

神信心かみしんじんは表向おもむき



外ほかに望のぞみがあるのだろ お前まへも美うつくし身みをもつて

グヅグヅして居ゐる時ときぢやない 早くはや夫をつとを持たもたさせよと

大神おほかみ様に聞きいた故ゆゑ 眠ねむたい眼めをばこすりつつ

態わざわ々やつて來きたのだよ お前まへの身み魂たまは義ぎ理り天てん上じやう

日出ひので神かみの奥おくさまの 玉たま則のり姫ひめに違ちがひない

神かみと神かみとの因いん縁ねんで 夫め婦をとにならねばなりませぬ

日出ひので神かみの生いき宮みやの 魔ま我が彦ひこさまと逸いち早はやく

結けつ婚こん式しきをあげなされ この神しん勅ちよくに背そむいたら

其そ方なたが御おん身みの一大いち大だい事じ 神かみの怒いかりで忽たちまちに

根ね底そこの國くにへ墜おちますよ 何なに程ほど蠖い蠖も別りさまを

戀こひし戀こひしと思おもうても 高たか根ねの花はなか水みづの月つき

とても掴つかめる筈はずがない そんな野やしん心しんを起おこさずに

馬うまは馬うまづれ牛うしは牛うし 魔ま我が彦ひこさまと機き嫌げんよう

合が衾ふきん式しきを上げなされ 返へん答たふはどうぢやと手て嚴きびしく

嘯鳴ればお民は仰天し 晴れたる空に霹靂の

閃く如く胸打たれ 暫し言葉もなかりける。

お民「お寅さま、貴女は今私が蝶蝶別さまに して居るやうに仰有いましたな、

それや大變な迷惑です、そして魔我彦さまと夫婦になれと仰有いましたが、それ

や本氣ですか」

お寅「本氣でなくてこの眠たいのに、誰が態々來ませうか。お前の身魂は玉則姫

さまと云ふ事が、御神勅で分つたのだよ、それだから一時も早く義理天上日出神

と夫婦に致さねば、神界の經綸が後れるのだから勧めに來たのだよ」

お民「藪から棒のやうなお言葉、早速に御返事が出來ませぬ。どうか一週間程熟

考の猶豫を與へて下さいませ。さうすれば否とか、應とか御返事致しますから」

お寅「さてもさても齒切れのせぬお方ぢやな、なぜ神様の仰有る事を素直に聞か

ないのだ。十萬億土に落されても構はないのですか」

お民「どうなつても仕方が無いぢやありませんか。何程神様の御命令だと言つて

も自分の氣に合はない夫をもつ事は一生の不愉快ですから、何程神様だつてそんな無理は仰有いますまい。私は女としての人間を作つて、その上で夫をもつ考へですよ。人形の家になつては困りますからな。ホ、ホ、ホ、

お寅「随分悪思想に染つたものだねえ。それだから今時の女は仕方が無いと云ふのだ、そんな剛情を張るものぢやありません。」「剛強必ず死して仁義王たり」と云ふ事を知つて居ますか、女と云ふものは仁義の心が肝腎だよ、剛強な男に缺くべからざる特質だ。剛強にして仁義を保つのが男の中の男だよ、女に剛強の必要はない、サア早く返答して下さい。返答のないのは矢張り蠚螋別さまに野心があるのだらう」

お民「エ、何と仰有つて下さつても、女の一生の一大事ですから、一週間熟考の餘地を與へて貰はなくして御返事は出来ませぬ」

お寅「不機嫌な顔をして雨戸をガラガラビシヤンと閉めながら、一足々々四股を踏み庭の小石を蹴散らし跳ね散し、

お寅「ど強太い阿魔ツチヨ奴、それ程蠚螋別が欲しいのか」

と口汚く罵りながら歸つて往く。後にお民は獨言、  
お民「あゝ情ない、一人前の女と生れながら背の低い腰の屈つた瓢箪面の、スカ  
ンピン男を夫に持てとは、お寅さまも餘りだわ、何程神様の命令だつてどうして  
こんな事が承諾ませうか、私も「おたんちん」だけでも、矢張り十人並に勝れ  
て居る心算だ、あんなケチナ魔我彦の女房になる位なら、目でもかんで死んで仕  
舞つた方が何程氣が利いて居るか、分らないのだ。何でまあ、あんな男が副教主  
になつて居るのだらう。此處の神様は餘程惡戯がお好きだと見えるなあ、私がか  
うして此お山に參詣するのも十中の九分迄は、蠚螋別さまが……「暫く待つて居  
れ、お寅の隠して居る一萬兩の金さへ手に入らば、お前を連れて好い所へ往つて  
やらう。そして二人仲好う暮さう」と仰有つた御親切のお言葉を夢寐にも忘れた  
事はない、それにまあ、お寅さまとした事が、魔我彦さまを夫にもてとは好うも  
好うもこのお民を輕蔑したものだ、お寅さまは、私と蠚螋別さまが怪しいと思つ  
て其意氣利拔きのためにあんな事を云つて來たのだらう、アタ阿呆らしい、玉則  
姫の身魂ぢやなんて、そんなことにチヨロマカされるお民ぢやありません。あゝ

もう嫌になつた。何とかしてお月様がお出ましになれば、此處を逃出さうかなあ、  
今晚は二十一日のお月様、もうお上りなさるに間もあるまい、あゝさうださうだ。  
これから荷物を片付けて逃げ出すのが上分別だ、併し蝶螈別さまに一言云うて置  
かねば後で何と不服云はれても仕方がない、あゝ如何したらよからう、大方今頃  
はお酒に酔つて寝て居らつしやるのだらう、あゝ如何しようかなア  
と獨り言ちつつ去就に迷うて居る。

お寅は直様松彦や松姫の館を夜中にも拘らず叩き起した。

お寅「もし上義姫様、一寸起きて下さいますまいか」

上義姫は中より、

松姫「ハイまだ寝んで居りませぬから、サア何卒お這入り下さいませ、甚う遅い

ぢやありませんか」

お寅「這入つてお差支はムいませぬかな」

松姫「サアサアどうぞお構ひなく」

と云ひながら門口をガラリと引き開け、お寅の手を取つて靜かに座敷に通し、夜

風を防ぐため再び庭に下りて門口の戸をピシヤリと閉め、土で捏ねた火鉢を前に  
おき、二人は茲に對座した。隣室には早くも松彦お千代の躰が聞えて居る。

松姫「お寅さま、夜半にお訪ね下さいましたのは、何か急用でも起つたのですか  
なア」

お寅「ハイ、實の所は魔我彦の一件でムいます、彼は今迄義理天上日出神の生宮  
と確く信じ副教祖となつて御用を致して來ましたが、貴女様に御主人様があつた  
事が分り、もはやスツカリと斷念致しました。それに就ては魔我彦にも女房を持  
たさねば、はうけて仕舞ひます。それで私も氣を揉んで衣掛村から來て居る信者  
のお民の宿つて居る處へ態々押しかけて参り、魔我彦の女房になつてやつて呉れ  
と申しました所、スツタモンダと申し仲々承知して呉れませぬ、一週間熟考の暇  
を與へて呉れ、其上で返答するといふのだから、腹がたつて仕方ありません。  
グズグズして居ると、蝶蜋別さまを喰はへて何處に往くか分りませぬ。それで一  
つは蝶蜋別の戀の豫防のため、一つは魔我彦を安心させるため一舉兩得、どうでせ  
う、貴方の御神徳と權威とをもつてお民を説きつけて頂く譯には参りますまいか」

松姫「左様でムいますか、それや實際にさう往けば好都合ですな、併し乍ら幸ひ末代日の王天の大神様がお越し遊ばしたのだから、とつくりと伺つた上で話せなら話しても見ませう。今夜に何うと云ふ事もムいますまいから、明日でも悠り懸け合つて見ませう」

お寅「イエイエそんなまどろしい事ではいけませぬ。實の所は今夜の中に何つちか極めて仕舞ひたいのです」

とかく話す内にお菊と魔我彦がやつて来て、

お菊「ご免なさい、お母さまは来て居られますかな」

戸の中からお寅は、

お寅「その聲はお菊ぢやないか、女の子が夜分に獨り歩くものぢやないと云うておくのに、云ふ事を聞かぬ子ぢやな」

お菊「お母アさま、魔我ヤンと一緒に来たのだよ、あの腰の屈つた魔我ヤンと」

お寅「魔我ヤン、お前は蠚蠚別さまの番犬に頼んでおいたぢやないか、何しにこんな所へ来たのだ、このお寅はお前の縁談を取結んでやらうと思つてこの遅いの

にお民の部屋へいつたり、松姫さまのお室に來たりして心配して居るのだ。サア早く家へ歸つて蠓蠓別さまの番犬をしてお呉れ、お前さへ居ればお民が來たつて大丈夫だから」

魔我「そんならお寅さま、これから番犬を勤めますわ、併しお菊さまだけは、貴女のお傍に置いて往きますからな」

お寅「仕方がない、そんならお菊、這入らして貰ひなさい」

お菊「おばさま御免」

と云ひながら、自分から戸を開け、又締め、松姫、お寅の横にチヨコナンと坐つて居る。魔我彦は、松姫、お寅の話が氣にかかつて堪らず、壁の外に耳を當て二人の談話を盗み聞きして居る。困がもつて來るマバラの雪、チラチラと魔我彦の頬をなめて通る。

(大正一一・一二・一三 舊一〇・二五 加藤明子録)



第二〇章 蛙行列（一二一〇）

蠓蠓別は前後も知らず、酒に酔ひつぶれて雷の如うな躰をかいてゐる、其處へ裏口の戸をソツと開いて、震ひ震ひやつて來たのはお民であつた。お民は蠓蠓別をゆすりおこし小聲で、

お民「モシ先生、大變な事がおこりました。私は此處に居れませぬ。今晚限り此處を逃出しますから、一寸貴方に應へに参りました。どうぞ悪くは思つて下さいませぬ」

蠓蠓別は俄に酒の酔ひもさめ起上つて目をこすり乍ら、

蠓蠓「お前はお民ぢやないか。大變とは何事だ。グツグツしてゐるとお寅に見つ

かつたら、俺もお前も大變だから、早く要件を云つて、此處を立去つて呉れ」

お民「大變と申すのは外でもありません、最前もお寅さまが私の居間へ出て來て、是非共魔我彦の女房になれと仰有るのです。アタ好かぬたらしい、誰が、死んで

も女房になりますものか。私が此處へ参つて來て居るのも貴方にお約束があるば

つかりで、御【つとめ】の時にチヨイチヨイお顔を見るのを樂しみに來て居るの  
でせう、それだから一寸貴方に此事を申上げ、これから私は一足先へ歸りますか  
ら、御親切がありますなら後から追っかけて來て下さいな」

蠓蠓「ソラ大變だ。お前は先づ野口の森まで行つて待つとつてくれ。俺はこれ  
からお寅の松姫館へ行つた留守を幸ひ、お寅の隠しとつた金の所在も略分つたか  
ら九千兩の金子を腰に捲きつけ、後から追ひつくよ」

と【せき】たつればお民は莞爾と笑ひ、

お民「蠓蠓別さま、キットですよ、そんなら一步お先へ行つて居りますから……」  
と云ひ乍ら、長居はおそれ、月の出ぬうちにと坂道をスタスタと息を喘ませ下り  
行く。蠓蠓別は早速に衣類を着かへ、蓑笠の用意をなし、九千兩の金を内懐にグ  
ット締め込み、脚装束をして草鞋脚絆迄も首尾よくつけ、金剛杖をひんにぎり、  
今や門口を飛び出さむとして、あわてて柱に額を打ちウンと一聲其場に倒れて了  
つた。こんな事が出来て居るとは神ならぬ身の知る由もなく、お寅は頻に蠓蠓別、  
お民の密約成立の妨害運動に熱中し、松姫と膝を交へてヒソヒソ話に耽つてゐる。

お寅「コレお菊、モウお休みと云ふのに、夜更まで子供が起きてゐるものぢやないよ。此子はマア十七にもなつて一寸も親の言ふ事を聞かない子だ。本當に困つ了わ」

お菊「お母さま、何だか目がさえざえして、一寸も寝られないのよ。今晚は廿一夜だから、モウお月様が鎌の様な光を地上に投げて小北山を御上り遊ばすから、月見でもした方が好いわ」

お寅「馬鹿な事お言ひでないよ。外は風が吹いて吹雪がして居るよ。こんな夜さに月見したつて何が面白いか。又風に當つてインフルエンザにでも罹つたら何うするのだい」

お菊「お母さま、雪が降つとるの、ソレは尚結構ぢやありませんか。空にはお月さま、下には雪、そこへ花の蕾のお菊の花が出るのですもの、月雪花を一時に眺めるやうなものぢやありませんか。こんなよい機會は滅多に有りはしませんわ」  
お寅「コマシヤクレた子だな。早く休ましてお貰ひなさらぬか。モシ松姫さま、此通りお轉婆娘で、本當に親も手こずつてゐますのよ」

松姫 『さうですね、今時の女の子はどうして、これ程ヤン茶になるのでせう。お千代だつてコマシヤクレた事ばかり云つて、私達に逆理屈をこね、仕方がありませんわ』

お寅 『さうですねー、こんな子は今の教育でもさした位なら、到底親の挺には合はぬようになりますぢやろ。もう學校は尋常で止めるつもりですわ。高竹寺女學校へでも入れようものなら、男女同權だとか、女權擴張だとか、下らぬ屁理屈をいつて兩親を困らせますからね』

松姫 『あの高竹寺には女學校がありますか。さうすると坊さまの娘なんかが入學するのでせうね』

お寅 『イエ坊さまの娘なんか一人も入學してゐやしませぬわ。みんな毘沙や、首陀の娘ばかり入學して毎日毎日、球突きだとか、マラソン競走だとか、テニスだとか、ダンスだとか、【せう】もない事ばかり教へられてゐますのよ』

松姫 『ホ、ホ、ホ、ソラ高竹寺女學校ぢやありますまい、高等女學校でせう。等の字を竹と寺とに分けてお讀みになつたのでせう』

お寅とら「時に松姫さま、魔我彦まがひこの結婚問題けっこんもんだいは何ういたしませうかなア。是非共今晩ぜひともこんばんの間にきめたいのですが」

松姫まつひめ「サ、兔も角もこれから私が直接わたしちよくせつにお民さまに逢うて、トツクリと御意見ごいけんも承はり、成る可く圓滿えんまんに話がまとまりますやうに骨を折つて見ませう」

お寅とら「ソレは濟みませぬな、何卒貴女の雄辨ゆうべんと御神徳ごしんとくによつて成功せいこうする様にお願ねがひ致します」

松姫まつひめ「ソんなら是からお民さまのお居間へ伺ひませう」

と云ひ乍ら細い二百段の階段を下つて行く。お寅もお菊も松姫の後からついて来る。松姫はスツと炊事場の隣室、お民の寢間を指して吹雪をぬひつつ行つて了つた。お寅は蝶蝨別の居間に歸つて見ると、豈圖らむや、旅装束をしたまま打倒れてゐる。

お寅「コレヤマあ何の事だいなア、コレ蝶さま、何こんな所に嚴めしい装束をして倒れてゐるのだい。アア魔我彦は何處へ行つたのだい。番犬を仰せつけておくのに雪の降るのに、のそのそと夜歩きをしてをると見える。困つた男だな、コ

レお菊、水を持って来い」

お菊「水持って来いといったつて、下まで汲みに下りなくちや一滴もあれやしな  
いわ。ソレよりも鼻をつまんでおやり、そしたら屹度氣がつくわ」

お寅は合點だと蠓蠓別の鼻を例の如くグツと右の手で捻ぢ、左の手で背を三つ  
四つ喰はした。蠓蠓別はハツと氣がつき、

蠓蠓「お民、ヨウ助けて呉れた。到頭走る最中、蹴つまづいて、ひどい事だつた。  
もうスツテの事で幽冥旅行をやるどころだつた。お寅の奴追ひかけて来やがつて

……」

お寅はグツと胸倉を握り、

「コラ蠓蠓別、何を云ふとるのだい。お民が何うしたと云ふのだいなア」

蠓蠓別は此聲に驚いて目を見ひらけば、閻魔が駄羅助を舐つたやうな顔してブル  
ブル震ひ乍らお寅が胸倉をとり、齒をくひしめて睨んでゐる。

蠓蠓「ナニ一寸夢を見たのだ。ナ、ン、ン、ン、ン、ン、ン、ン、ン、ン、ン、ン、ン、  
い、苦しい哩」

お寅 「たいさうな脚装束をして何處へ行くつもりだい」

蝾螈 「ナニ一寸松姫さまに逢ひたいと思つて」

お寅 「松姫さまとこへ行くのに旅装束をして……何の事だいなア。些怪しいぢ

やありませぬか」

蝾螈 「ナニ一寸大廣間まで御禮に行つて來るつもりだ」

お寅 「此雪の降つて居るのに今日に限つて行く必要がありませんか。アンマリ馬鹿

にしなさるな、人を盲にして……」

蝾螈 「ナニ雪が降つて居るから、下駄の齒に雪がつまつてこけると思つて、草鞋

をはいたのだ」

お寅 「五間や六間の距離よりない大廣間へ行くのに大變な旅装束すると云ふ事が

ありますかい。しかも御叮嚀に蓑笠をかぶり、何の事だいなア。お前さまの行く

處は外にあるのだらう」

蝾螈 「ウン外にある、笠松の根元の御神木の傍まで一寸御禮に行くのだよ」

お寅 「あまり馬鹿になさると、鼻を揞ますぜ」

蠓いもり 蠓いもり 『イヤ鼻はなばつかりは御免ごめんだ』

お寅とら 『そんなら、つめつて上げようかい』

蠓いもり 『イヤ此この冷つめたいのに抓つめるのは御免ごめんだ。お寅とら、モウ恠こらへてくれ。もう何處どこ

へも行きはせぬから』

お寅とら 『コレ兵六玉ひやうろくたま、此このお寅とらを何なんと思おもつて居ゐるのだ、これでも浮木うきぎの村むらの白浪女しらなみをんなうし丑

寅とらさまといつたら誰知たれしらぬものもない姐ねえさまだぞ。此この姐ねえさまの目めを晦くらまさうと思おも

つたつて、野郎やろうの力ちからでくらまさるものか、サ綺麗きれい薩張さつぱりと白状はくじやうすればよし、白はくじ

状やうせぬに於おいては、可愛かあいさまあまつて憎にくさが百倍ひゃくばいひねりつぶしてやるぞ』

蠓いもり 蠓いもり 『實じつはエーンその實じつは………實じつはやつぱり實じつだ。何なにを云いへといつたつて、胸むな

倉ぐらとつてゐては息いきが苦くるしくつて云いへはせぬぢやないか。はなせ はなせ』

お寅とら 『そんなら放はなすから、薩張さつぱり白状はくじやうせ、お前まへはお民たみと今晚こんばん驅落かけおちするつもりぢ

やる。お民たみは野口のぐちの森邊もりあたりに待合まちあはして居ゐるのだろ』

といひ乍ながら、胸倉むなぐらを握にぎつた手てをパツとはなした。蠓いもり別わけはスツと立たつた途端とたんに懷ふところ

の小判こばんが、ガツツと音おとがして落おちた。お寅とらは之これを見るより怒いかり心頭しんとうに達たつし、狂氣きやうき



の如くなり、

お寅「此の泥坊奴、金子を掻浚へてお民と驅落するつもりだつたのだなア、待て今に思ひ知らしてやらう」

とあわてて火鉢につまづき逆上て空ぶつた身體は忽ちスツテンドウと倒れて、柱の角に額をグワンと打ち「アイタ」と云つたきり、其場にしやがんで仕舞つた。

蠓蠓別は手早く小判を拾ひ上げ腰につけ直し、金剛杖を手に持ち、

蠓蠓「お寅、俺は寸時修行に行て来る程に留守を頼むぞや。人間は老少不定、會

ふのは別れの初めとやら、御縁があつたら又未來で御目に掛りませう。之がお寅

さまと別れに際しての形見だ」

といひ乍ら、金剛杖で頭をコツコツと打たたき「アリヨース」といひ乍ら、雲を

霞と驅け出した。柱に額を打つて氣が遠くなつてゐたお寅は、頭を叩かれた途端

に氣がつき、面を上げ屋外を見れば、蠓蠓別は下の坂を一丁許りも走つて居るの

が、折柄上る銳鎌の如き月に照らされ見えてゐる。お寅は狂氣となり、

お寅「おのれ蠓蠓別、此お寅を馬鹿にしをつたなア」

と怒りの聲をはり上げ乍ら裾もあらはに雪の路を【こけつ】轉びつ追つかけて行く。

偕て松彦は松姫を始め萬公、五三公、アク、タク、テク等と相談の上、小北山に修祓を行ひ、國治立の大神を始め三五教を守ります天地八百萬の神を一々鎮祭し、松姫、お千代、お菊竝に受付の文助其他に眞理を説きさとし、此聖場を清く正しく祭らしめおき、松彦、萬公、五三公、アク、タク、テクの一行は、小北山を後に眺めて浮木の森を指して足を早めた。

因に魔我彦はお民の此館を逃去つた事を聞き何處迄も探しあてねばおくものかと、是又尻ひつからげ、お寅の後を追うて三丁許り距離を保ち乍ら、トントントと野口の森を目當にかけり行く。

（大正一一・一二・一三 舊一〇・二五 外山豊二録）

~~~~~

靈界物語 第四五卷 舍身活躍 申の巻  
終り